

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

教会学校 教案誌



church school curriculum



見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。
その名はインマヌエルと呼ばれる。

マタイによる福音書 1章23節

vol. **75**
2019年10-12月

「救済史」
に基づく二年サイクル 第2年

【巻頭説教】「天に富を積む」	三野孝一
教育の現場から「萌保育園の理論と実践」	吉岡良昌
信仰告白の証「信仰告白まで10年」	雨宮凛太郎
教会役員養成のために「牧師の務めについて(1)」	望月 明
旧約聖書が語る歴史(7)～(9)	大西良嗣

2019年10～12月カリキュラム（第75号）

—救済史に基づく2年サイクル 第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
10月6日	ローマに届いた福音	使徒28：1－31	使徒1：8
	パウロは世界の中心ローマでも語る。聖霊は働き続け、福音は前進する。		
10月13日	福音を恥としない	ローマ1：16,17	ローマ1：16
	福音は全ての人間を救うことのできる神の力である。		
10月20日	神の公平な裁き	ローマ2：1－16	ローマ13：8b
	神の公平な裁きを学んで、罪赦されて救われた喜びを思い起こす。		
10月27日 宗教改革記念	宗教改革の実り	詩編46編2－4節	詩編46：2
	宗教改革記念日を覚え、宗教改革の実りを覚える。		
11月3日	信仰による義	ローマ3：21－31	ガラテヤ2：16
	主イエスの正しさを信仰により受け取ることが、神の一方的な救い。		
11月10日	神を愛する者たち	ローマ8：18－39	ダニエル10：19
	主は愛する子どもたちを決して欺かれぬ。主の真実を信じ、日々新たに生きよう。		
11月17日	主の晩餐	1コリント11：17－34	1コリント11：26
	辛い時こそ、神の前で自分を見つめ直すことが必要。		
11月24日	最も偉大な愛	1コリント13：1－13	1コリント13：13
	神と隣人を愛する生活こそ、神に従う歩みであることを確認する。		
12月1日 アドベント	目を覚ましていなさい	マタイ24：36－44	マタイ24：44
	いつも神の愛を見つめて生きる。		
12月8日	洗礼者ヨハネ	マタイ3：1－12	マタイ3：2
	キリストによって、悔い改め、神のところに立ち返る信仰生活を歩む。		
12月15日	洗礼者ヨハネとイエス	マタイ11：2－11	イザヤ61：10
	神は私たちに「主にある喜び」を与えてくださる。		
12月22日 クリスマス	主の降誕	マタイ1：18－25	マタイ1：22－23
	罪人を見捨てることなく、愛して関わりを持ち続ける神の意志を知る。		
12月29日	エジプトへ逃れる	マタイ2：1－23	マタイ2：2
	悲惨な現実の中に御国が到来し、その民として生きる喜びに招かれる。		

も く じ

2019年10・11・12月カリキュラム

まえがき「中高生の『理想の大人』」	坂井 孝宏……………	4
巻頭説教「天に富を積む」	三野 孝一……………	5
教会学校教師会のために③ 「日曜学校教師会のために」	相馬 伸郎……………	9
CS 教師の一言 引退 CS 教師のささやかな経験と提言	中尾 慎宏……………	19
教育の現場から 萌保育園の理論と実践	吉岡 良昌……………	21
信仰告白の証 信仰告白まで10年	雨宮凜太郎……………	24
教会役員養成のために 牧師の務めについて (1)	望月 明……………	26
旧約聖書が語る歴史 (7)～(9)	大西 良嗣……………	30

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……………33

10月 6日 ……………	34
10月 13日 ……………	39
10月 20日 ……………	44
10月 27日 ……………	49
11月 3日 ……………	54
11月 10日 ……………	59
11月 17日 ……………	65
11月 24日 ……………	70
12月 1日 ……………	75
12月 8日 ……………	80
12月 15日 ……………	85
12月 22日 ……………	90
12月 29日 ……………	96

聖句カード…………… 102

次号カリキュラム (2020年1・2・3月) …………… 104

2019年度年間カリキュラム (第73号～第76号) …………… 105

「子どもと親のカテキズム」案内 …………… 107

教案誌自由募金案内…………… 108

執筆者よりひとこと・あとがき…………… 109

まえがき

中高生の「理想の『大人』」

坂井孝宏

私はこの10年ほど、サマーデイズなどのキャンプ奉仕に関わり、大会中会規模での中高生教育に重荷を覚えてきました。中高生の魂をキリストのもとに導くにはどうすればいいのかを考え続け、多角的に学んでもきました。数年前に、東京基督教大学のユースミニストリーの講義に参加した際に、以下のような興味深いインタビューの結果を学びましたので、分かち合わせていただきます。

中高生が求める「理想の『大人』」として、こんな声が挙がっています。

- ・励ましてくれる人
- ・中高生の文化に理解を示してくれる人
- ・あたたかい居場所、孤立しない居場所を提供してくれる人
- ・中高生に教えようとする態度ではなく、彼らを知ろう、理解しようとする態度を感じることができる人
- ・謙遜な人
- ・命令口調を使わない人
- ・顔の表情と言葉の語尾が柔らかい人
- ・ユースの持つ様々な悩みを、動じずに聞くことができる人（過剰に狼狽するような人はNG）
- ・話しやすい雰囲気を持つ人
- ・クリスチャンの形にとらわれない人、こだわらない人、クリスチャンぽくない人

ガラテヤ5:22,23「霊の結ぶ実は、寛容、親切、誠実、柔和……」、マタイ20:26「一番偉くなりたい人は、皆に仕える者になりなさい」といった御言葉をただちに思い出すものです。

今度は逆に、「こんな『大人』はいやだ」

という、彼らの率直な声ですが、こういう「大人」は、中高生じゃなくともきつと嫌だと思います。

- ・えらそうな人
- ・決めつけて話す、意見を押し付ける人
- ・頑固で否定的な人
- ・自分ばかり話す人
- ・正論ばかり言う人
- ・自分だけ知っているような言い方をする人

このような人のことを、「成長が止まっている人」とも言うのだと思います。中高生は、常に変化をこわがらず、あなたたちといっしょに自分も成長していきたいという姿勢で、横並びで一緒に神を見上げ、一緒に御言葉から学んでくれるような「大人」を求めているようです。それこそ、まさに改革派教会の信仰者の姿ではないですか。御言葉によって絶えず改革され続けると、口が酸っぱくなるほど繰り返してきたのですから。

古来「若者」とは、大人からすれば理解しがたく苦々しい存在であり続けています。彼らは「過去の私」とは共通点を持つが、「今の私」とはまったく異なった価値体系の下に生きている、異質な存在であるという理解を前提としていきたいと思いません。第一に「自分がもう若者ではなくなった」という、私たち自身の「自己理解」こそ問われているのです。

その上で、その「自分ではない人」と話すために、言葉も翻訳していきいたいし、相手が生きている文化的・社会的背景を想像し、彼らが抱えているストレスを理解できるように努めたい。それは中高生に限らず、隣人愛の基本だと思います。

(勝田台教会牧師)

巻頭説教

天に富を積む

ルカによる福音書18章18～23節

三 野 孝 一

このところは、イエスが弟子たちと共にエルサレムへ向かわれる途中のことです。「ある議員がイエスに、『善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか』と尋ねた」(18)です。イエスがこの議員の質問に答えられた、イエスのその言葉に耳を傾けたいと思います。

この「議員」とは、ユダヤの最高議会＝サンヘドリンの議員のことで、ユダヤ社会で確固とした社会的地位と名声を得ていた人物です。そしてこの人物は「大変な金持ちでもあった」(23)と記しています。議員であり、また金持ちであるこの人がエルサレムへと向かわれるイエスを「善い先生」と呼んで、イエスに『何をすれば(つまり、どんな善いこと＝行いをすれば)、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか』と、尋ねた」というのです。

この議員がイエスに尋ねた「永遠の命」という言葉は、ヨハネによる福音書でイエスが繰り返し用いられた言葉ですが、ルカの福音書ではこの言葉はここで初めて出て来ます。この議員はそれを「受け継ぐ」という表現で、何をすれば受け継ぐことができるのかとイエスに尋ねたのです。

この後で、イエスのもとを悲しみながら立ち去ったこの議員の姿を見て、イエスは弟子たちに「財産のある者が神の国に入る

のは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(24b～25)と、「永遠の命を受け継ぐ」ということを「神の国に入る」と言い換えておられます。それで、この「永遠の命を受け継ぐ」とは、いわゆる、「不死の命を得る」ということではなく、神の国に入れられること、すなわち、人が生ける時も、また死ぬ時も永遠に生きておられる神に結ばれつつ、神の恵みの御支配、神の御手の中に入れられる、さらに、神が人生の味方となり、そして、死に関わってくださるそのような状態で生きる、死ぬということ、神とその関係の中で「命が永遠に続く」ということを意味するものです。

この議員はイエスのことをただ「先生」ではなく、「善い先生」(デイダスカロス、アガソス)と呼んでのですから、この議員は他のユダヤ教の指導者、ファリサイ派とか律法学者とは異なって、イエスに特別な尊敬の念を抱いていたということです。

その議員に対して、イエスは「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない」(19)と言われたのです。「神おひとりのほかに、善い者はだれもない」、イエスのこの言葉を文字通りに採ると、「善い」、「善」の源は神のみであるから、軽々しく「善い先生」

と呼ぶなと言われたということで、イエスはこのような不愛想な対応をその議員にされたのです。それはどういうことなのか、その訳はその議員のイエスに対する姿勢に問題があるのではなくて、議員のその質問、その設問自体を問題とされたということです。というのは、この議員がイエスに尋ねた「善いことをすることで、永遠の命を受け継ぐことができる」とするその発想こそがまさにイエスに敵意を抱くユダヤ教の人たちが伝統的に持って来た誤った発想であるからです。

しかし、イエスは直接そのことを指摘されず、その議員に「姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、という掟をあなたは知っているはずだ」(20)と、言われたのです。イエスのこの言葉は議員の質問にまともに答えたものではなくて、いわゆる、皮肉を込めて言われたものと思うのです。このように思う理由は、イエスがここで挙げられた戒めを見ると、本来、最初に挙げられるべきモーセの十戒の前半、つまり、神に対する戒めが省略されていて、ただ「十戒」の後半部分、すなわち、隣人に対する戒めだけが挙げられているからです。さらに後半の部分のその順番はモーセのそれと違い、最初に挙げられるべき「第五戒」、すなわち、「父母を敬え」が最後になっていますし、第十戒の「隣人のものをむさぼってはならない」がそこには欠けているからです。それで、イエスのこの言葉はその議員の質問に正面から答えようとされたものではない、皮肉を込めて言われたものであると思うのです。

イエスのその言葉を聞いた議員は、案の定、「そういうことはみな、子供の時から

守ってきました」(21)と答えました。それで、イエスはこの段階になって始めてその議員の質問に真正面から答えられたのです。「あなたに欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従って来なさい」(22)。

イエスのこの言葉を聞かれた方の中には、イエスが議員に言われた「あなたに欠けているものがまだ一つある」というこの言葉を文字通りに採り、イエスがこの議員のことで指摘された「欠けている一つのもの」とは、彼がお金を貯めていて、貧しい人に施しをしていなかったことである。それで、イエスは議員である彼に「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい」と言われたのだ。それで、永遠の命を受け継ぐために、神の命じられた律法をすべて完全に行うことが必要であると言われたのだ、このように解釈されるのではないかと思うのです。

けれども、イエスがここでこの議員に言われたことはそうではないのです。イエスはここで「あなたに欠けているものがまだ一つある」と言われたので、行い、行為における一つの欠けを補うことが、その議員が永遠の命を受け継ぐための条件であるような印象を受けます。けれども、イエスがその議員に言われた「一つ欠けているもの」というのは、行ない、行為における欠けを指すものではなく、永遠の命を受け継ぐためにどうしても欠かすことができないもの、心をどこに向けて生きるのかという生き方のそのものに関わる事柄を指すものです。もう少し具体的に言うなら、イエスが言われたこの「欠けているもの」とは、「持つ

ている物をすべて売り払い、貧しい人々に分ける」という行為また、行ないそのものではなく、イエスはその次に言われるように「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやって」「それから、(原文はそうして) わたしに従いなさい」——このことなのです。

永遠の命を受け継ぐために、また神の国に入れるために必要なこと、それはイエスに従う、イエスを信じて信頼して従うことです。この議員が「イエスに従う」ためには、彼が「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分ける」ということが必要不可欠であったのです。

イエスはその後、29, 30節で「はっきり言うておく。神の国のために(これは、「イエスに従うために」とも言い換えることができます)、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てる者はだれでも、この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける」と言われました。「永遠の命」を受け継ぐために、地上で持っている富、名声に固執して、地上にたくさんの財産を積み上げて持つというような生き方を捨てる、そのような生き方を根本から転換させて、イエスがここで「わたしに従いなさい」と言われたように、御自身に従うこと、これが「欠くことができない」ことなのです。そして、神がそうする人に永遠の命を、神の国を受け継ぐことができるようにしてくださるのです。

その一方、イエスは12章32～34節で、イエスを信じ従う弟子たちには、次のように言われました。「小さな群れよ。恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださ

る。自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、罪人も近寄らず、消しも食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」。

「天に富を積む」と日本語に訳されて来たこの文章を直訳すると、「天に宝を持つ、所有する、獲得する」です。ですから、この「天に富を積む」とは人間が富を積み上げるといったイメージではなくて、天に富を持つ、天におられる神からいただけるという富を持つ、それで、天の神からいただく報い、報酬に目を注ぐということなのです。

ですから、イエスがここでこの金持ちの議員に対して「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい」と言われたのは、天からの富をいただくためにそうすることが必要なのだということなのです。

このように、イエスは永遠の命を得ようとする、願うならすべての人に文字通りに「持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」と言われたのではないのです。この金持ちの議員が、「天に富を持つ」、神からの恵みをいただくためには財産を捨てて、「イエスに従う」ことが不可欠であったということなのです。

「しかし、その人はこれを聞いて非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである」(23)と、ここで初めてその議員が持っている本当の問題を明らかにします。このことから、この議員が「大変な金持ちだった」ということが、イエスを信じて、永遠の命を受け継ぐ、神の国に入るためには大きな障害であったということを明らかにされるのです。イエスはその議員にとっては彼が

持つ財産が彼にとってイエスに従うためには本当の障害であることを見抜かれていたので、「行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。」と言われたのです。

しかし、この金持ちの議員はいま自分が持つ地位、経済力を捨てきれずにしっかりと握りしめていたため「永遠の命を受け継がせる」イエスを信じることに踏み込めなかったのです。彼がたくさんの財産を持っていた、それによって安定し、安心だと思っていたそのため、その居心地がよかったためにその生活を変える勇気がなかった、抜け出すことができなかつたのです。それで、彼はイエスが招かれた「永遠の命」を受け継いで生きる驚くべき世界に、生活に入る準備ができなかつたのです。

イエスはヨハネによる福音書3章3節で「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と語られました。この「神の国を見る」というのは、先程触れた「永遠の命を受け継ぐ」ということと同じ意味です。「新たに生まれる」—これは「永遠の命」へと招かれるイエスの招きに応じて、イエスに従う生活へとその生き方を転換する、これは、自分の目をこの地上のこと、地上の持ち物からも天に、神に向けることです。

イエスはこの少し前の18章17節にあるように「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れるのでなければ、決してそこに入ることはできない」と言われました。イエスはもこのように、神の国に入るのには子どものように、イエスの前に「身を低くして」、イエスを「受け取る」人が「神の国」に入るのだと教えられました。

それに続いて、イエスはこのところで、この地上の暮らし向き、この世で得る安心、安定を得ることに固執しない、その生き方を捨てて、天の神からの富を持つ、そして、それで、天の神からいただく報い、報酬をいただく、「永遠の命」を得る、受け継ぐために「わたしに従いなさい」と言われた、招かれたのです。

イエスが地上におられた時は、「イエスに従う」ということは、文字通り、すべてを捨ててイエスの後について行くということでした。いま現在、この「イエスに従うこと」というのは、イエスを信じて、イエスの言葉を信じて、いつも目を向けて生きるということなのです。

この世の富や財産、また地位にしがみついているのではなく、イエスが語られる一つ一つの言葉を心の糧として、心の支えとして生きるということなのです。イエスがそのように生きる人を「天に宝を持つ、所有する、獲得する」者とする、してくださるのです。そして、「永遠の命」を与えてくださる、受け継ぐのです。わたしたち人間にとって、「天に富を持つ、所有する、獲得する」、そして、神がくださる「永遠の命」を得る以上に価値あるものはないのです。

わたしたちがイエスを信じて、イエスに従って生きる、天に、神に思いを馳せつつ生きる＝「永遠の命」を得て生きるところに、わたしたちの地上の生活、人生というものすべてがそれまでとはまったく違うものになるのです。そして、そこに生きる時、わたしたちは地上のもの奴隷となることなく、縛られることなく、すべてのものから自由にされるのです。それは天から富を得ることができるからなのです。

(東京恩寵教会引退牧師)

教師会形成のために③

日曜学校教師会のために

相馬伸郎

第七回 子どものための説教と礼拝

引き続き、子ども礼拝式における説教とその重要性についてなお一緒に考えてまいりたいと思います。議論と主張が重複する箇所が多々出てまいりますが、忍耐してお付き合いくださいませ。

聖書、聖書朗読、そして説教

—語りだされる神—

私ども日本キリスト改革派教会に生きる者として、説教について論じるとき、先ず覚えておきたいことは、ウエストミンスター大教理問答の間155です。「神のみたまが、み言葉の朗読・特にその説教を」して、「救いに有効な手段」としてくださるとの信仰が表明されています。

最初から横道にそれますが、ここで、聖書朗読の重要性がどれだけ重要であるのか、現代の私どもの実践において、極めて深刻な反省を迫るものがあります。日曜学校の礼拝式では、聖書をまだ購入していない地域の子らもいるはずです。子ども礼拝式にとって、聖書朗読は、決定的に重要な意味を持つと思います。

もともと人間のことばは、文字ではなく、音声でした。私どもの信仰からすれば、「ことば」とは、神の御言葉にその根拠があります。神は、その御言葉をもって人間に語りかけ、応答する者として創造してくださいました。人間は神と、ことばをもって交わることができるようになりました。そのときも神の御言葉は、文字ではなく、音声として響いたのです。聖書の言葉は神の御言葉ですから、もともと語られた言葉なの

です。その意味でも、朗読されることを求めるのです。

しかも生ける神は、聖書の時代で語ることをおやめになったわけではありません（もとより、啓示は完結されています。新しい聖書の誕生はありません）。つまり、聖書朗読自ら、さらに説教されることを求めているのです。むしろ、説教のために聖書朗読されることを聖書自身が要求しているといった方が良いかもしれません。

聖書、説教、そして教会

—説教の射程—

さらに聖書が自ら求め、かつ創り出すのは、朗読と説教を聴く「神の民」です。彼らが集まり生きる場所、礼拝共同体です。神は御自身の御言葉を個人にではなく、御自身の民に向けてお語りになられます（もとより、聖書の中には、預言者個人に語られた言葉があります。しかしそれは、常に民へと語らせるためでした）。

ここでも、ウエストミンスター大教理問答問154を確認したいと思います。「救いの有効な外的な手段」は「キリストが彼の教会に分ち与えられる」（松谷訳・一麦出版社）もの、つまり、神の御言葉の説教とは、「彼の教会」（神の民の祈りの家・礼拝共同体）を形成するためにあり、なされるものなのです。その意味では、聖書を礼拝のための書物として見るのが重要です（もとより、個人で、家庭でも読まれるべきことは言うまでもありません。しかしその個人も、家庭も、主の日の礼拝式と結ばれています。個人の礼拝や家庭礼拝もまた、

主の日の礼拝式と結ばれていることによって真実の生命を持つのです。礼拝によって教会は生命を得ます。「教会の生命は礼拝にある」(20周年宣言)からです。また、主日礼拝式においてこそもっとも鮮やかに「キリストにおいて神ひとと共に住みたもう天国の型」としての教会は姿を明らかにします(20周年宣言)。キリストの体の輪郭が鮮明になるのです。これらは、日曜学校の礼拝式においてもまったく変わりません。

説教の本質 神の言葉の説教

説教の本質を論じるときほとんど必ずとりあげられる有名な定義に、「神の言葉の説教は、神の言葉である」(第二スイス信条)があります。説教とは、神が人間(説教者)を通して語られる、神の言葉であると信じるのです。読者の皆様の中かで、既に説教奉仕を担ったことのある方は、あの説教が「神の言葉」なのです! 改めてそのように考え直すとき、どのような気持ちになられるでしょうか……。「わたしの説教はそのようなものではありません」——しかし、あくまでもそう主張し続けるなら、説教を担うことは許されていません。これが私どもの信仰なのです。この説教の定義によって分かることは、逆に言えば、説教を自分で神の言葉にする必要はないし、その可能性もまったくないということです。わたしの説教の言葉を神の言葉としてくださるの、神御自身なのです。

その意味で、「神の言葉の説教」としての大前提とは、それが、記された神の御言葉である聖書の解き明かし(釈義)であるということです。つまり、決して、自分の信仰的な考え、体験を「お話し」することではありません。あるいは、自分が伝えたいと思う聖書のメッセージや教理を、与えられたテキストに押し込むことでもありません。

説教の機能

—礼拝を成り立たせることば—

しかし同時に、単に「聖書の解説」で終わってもなりません。それだけなら、聖書の新しい翻訳を試みさせたということではかないのです。

前回学びました「説教作成までの道のり」を思い出してください。説教者には、第一に祈祷。第二に聖書をよく読む。第三に本誌による学び(聖書・カテキズム研究)。つまり、正しい解釈を求めてする営みです。最後の第四として説教原稿の作成としました。しかし、ここで弁えていたいことがあります。それは、ただ単に、自分が学びとった事柄を子ども向けに分かるように優しく説明することだけでは、いまだ良い説教になっていないということです。

実はこの第四の前の段階、あるいは、ある方にはそのなかで同時にすることもあるかもしれませんが、通常、「黙想」と呼ばれる営みが不可欠なのです。これは、「神学すること」といっても良いかと思います。ここで、御言葉との対話を深めるのです。同時に子どもとの対話が求められます。つまり、与えられた御言葉が子どもたちに何を語るのか、意味するのかを問うのです。言い換えれば、子どもの現実に「届く言葉」を求める作業をします。単に、聖書の言葉を子どもに上手に説明してみせても、神の言葉の説教にはなりません。説教の課題は、説教をして真実に説教たらしめること、つまり、子どもたちに届く言葉、さらに言い換えれば、分かる言葉を獲得することです。

それなら、分かったとき、何がそこに起こるのでしょうか。それは、神礼拝です。キリストとの出会いです。第二スイス信条で確認したとおり、私どもの語る言葉は神の言葉ですが、それは、ひとえに子どもたちをして、神礼拝を成立させる限りにおいてのものなのです。

神礼拝、つまり、臨在のキリストとの出会いがそこで起こらなければ、日曜学校の営み全体に、「生命」が枯渇して行きます。致命傷となります。礼拝こそ生命なのです。だから、届く言葉、分かる言葉としての説教の言葉を獲得することこそ、私どもの常に真剣な課題となることが分かります。それは、子どもたちにとっての礼拝のリアリティーを豊かに味あわせる道をたずね求め続けることなのです。

説教の権威

しかし、このことがいかに困難な営みであることか、説教をなさった方は、既に途方にくれる思いで、知っておられるのではないのでしょうか。よい説教とは、おそらくこの現実には打ち砕かれる人から生み出され、与えられて行くと思います。

しかし、そこでこそ、改革教会の福音理解が光となります。私どもは、敬虔主義的教会のように毎週のように信じる決心を促すような説教をしません。回心だけを目標とした説教や、分級をしないのです。なぜなら、「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」(ヨハネによる福音書第10章27節)からです。つまり、そこで私どもは、自らの力(操作)で、回心させること、キリスト者を産み出すことはできないし、してはならないのです。予定の信仰に立ってこそ、より事柄にふさわしい、正しい仕方では説教に仕えることができるのです。

ここでもウエストミンスター信仰告白第7章「人間との神の契約について」の6項を確認することが大切です。「実体であるキリストが提供された、福音の元では、この契約が実施される規定は、御言葉の説教と、洗礼および主の晩餐の聖礼典の執行である」(松谷訳)。つまり恵みの契約の本体であるキリスト御自身の救いの恵みが私ど

ものものとなるのは、第一に御言葉の説教によることが明らかにされているのです。神の契約のうちにある選びの民であれば、必ず、御霊が有効に召命して下さるのです。横道にそれますが、第14章「救いに導く信仰」の一項にも注目したいと思います。「信仰という恵みの賜物は～通常は御言葉の宣教によって生み出される」。ですから、地域の子どもたちをなんとし、礼拝式に招き入れ、説教を届けたいのです!

このような信仰の理解のあるところ、既に説教の「語り口」、説教者の「立ち位置」も規定されます。つまり、説教者が子どもたちを単に、生徒としてだけ見るのではなく、信仰の「若い仲間」と見ながら、語りかけるのです。つまり、「君たちは・皆さんは」よりむしろ、「(僕たち) 私たちは」と、説教者と聴衆とが一つになって御言葉の前に共に出ていることを明らかにするのです。そこで、説教者自身、契約の子はもとより、地域の子らをも新しいまなざしで見目を開いていただくのです。ここに私どもの日曜学校の営みの基本線があると信じます(誤解のないように付言すれば、「君たち!」と、神の権威をもって告げるべきときもあるはずです)。ここで改めて、子どもたちの礼拝式の中に占める、契約の子の重要性を思わざるを得ません。

神は、私どもを御自身の説教者としてお立てくださり、その拙い説教をお用い下さって、子どもに届く、聴き取れる、分かる神の声を語らせてくださいます。これは、神の約束であり、奇跡です。ですから、あなたの説教は必ず実ります。説教の主なる神、契約を実施なさる神の権威に基づく確かな約束だからです。今月も、この約束を信じ、光栄とおののきをもって、子どもたちの前に立たせて頂き、神の権威に基づき語らせて頂きましょう。

第八回 主イエスと説教そして分級

予定では、「牧会する場としての分級」として語るつもりでしたが、なお、先回の議論を深めるところからはじめます。

日曜学校の「魅力」とは

何故、子どもたちは、日曜学校が好きなのでしょう。たとえば、私どもの教会には、教会が置かれている学区以外の遠くからの小学校からも、自転車に乗って、あるいは歩いて通ってくる地域の子らが少なくありません。会堂建築に共なって、それまで教会堂として使用してまいりましたビルがあった学区からの移転が決定したとき、日曜学校には、地域の子がほとんどいなくなり、ゼロからの再出発のようになることも真剣に考えました。その意味で当初は、学区外への移転に対して、あまり積極的になれない思いすらありました。しかし、あれから3年。なおそこから続けて通ってくる子どもたちがいるのです（ただし可能なかぎり、車でも送迎しています）。それなら、私どもは、いわゆる福音派のような、特別楽しいプログラムをしているのでしょうか。違います。ごくごく普通の日曜学校です。皆様に「このようにすれば、子どもたちを集められます」と、取り立てて紹介すべきものはありません。だから、不思議に思うのです。何が楽しいのだろうか。どこに魅力があるのだろうか。教師たちの魅力だろうか。それは十分に考えられます。しかし、結局、ここに行き着きます。子どもたちをひきつけるのは、福音そのものの魅力です。主イエス・キリスト御自身の魅力に他ならないということです。

説教の内容 主イエス・キリストの紹介

そうなれば、日曜学校の営みの鍵となるのは、どのようにこの主イエス・キリストを正しく、豊かに、紹介できるのかという

一点に収斂させることが可能です。

しかしもともと改革（派）教会は、聖書の包括的な教えを重んじる教会です。一つの教理を突出させるようないわゆる教派主義（型）の教会ではありません。それだけに、主イエス・キリストに集中するというあり方に違和感を持たれるおそれもあるかもしれません。

ここでも前回と同じ、ウエストミンスター信仰告白第7章「人間との神の契約について」の6項を確認したいと思います。「実体であるキリストが提供された、福音の元では、この契約が実施される規定は、御言葉の説教と、洗礼および主の晩餐の聖礼典の執行である」（松谷訳）。ここでは、主キリストこそ、恵みの契約の「実体」であること、「福音」そのものであることが明らかにされています。

また、たとえば、ローマ・カトリック教会で、「福音」といえば、それは、「福音書」を意味していることをも覚えてもよいと思います。そもそも、新約聖書の最初の部分に収められたのは、四福音書でした。聖書が礼拝成立のための根本的な書であれば、そこで、主イエスを中心に語らざるをえないと教会は考えたからです。

「役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを」（使徒言行録第20章20、21節）

博学なパウロが、エフェソの教会の長老たちに別れの説教を告げて、「役に立つことは一つ残らず」と言ったとき、旧新約聖書の全体を余すところなく語ったというのではなく、「主イエスに対する信仰」でした。これは、主イエス御自身の説教の中核である「悔改めて、福音を信ぜよ」とまったく同じです。何より、復活の主御自身が、「聖書全体にわたり、御自分について書かれて

いることを説明された」(ルカによる福音書第24章27節)のです。

その他いくつも挙げることができるでしょう。「神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまい」(コリントの信徒への手紙第一第2章冒頭)。いささか乱暴な議論ですが、要するに、彼の説教は、主イエス・キリストに集中するものであったのです。なぜなら、このお方が、福音の主人公であられ、この救い主を信じることへと招き、勧め、教会を形成することが説教者、伝道者パウロの狙いであったからです(もとより、「信仰に成熟した者達の間では、知恵を語ります」とも申しております)。

子どものためのカリキュラムと主イエス

先回、子どもに分かる説教を求めるとき、説教の「語り口」まで規定されるのではないかと、いささか、大げさに申しました。しかし、それ以上に自明となることがあります。それは、教える内容、カリキュラムもまた規定されるということです。

改めて問います。子どもが語り、伝えるべき相手は、誰でしょうか。幼稚科から中高生までの子どもたちです。子どもたちにとっての魅力が、主イエス御自身であれば、日曜学校のカリキュラムもまた、このお方、福音の実体、本体であられるキリストを子どもたちに紹介し、出会いへと招くことに全力を注ぐべきことは当然ではないでしょうか。もとより、福音書以外は語らないというのでは決してありません。ただし、旧約聖書でも使徒書でも、この福音の主なるイエス・キリストを紹介する視点で、読み解くことが求められているのです。

ちなみに弊誌は、現在、子どもカテキズ

ムを軸とした2年カリキュラムの二巡目となりました。これまで少なくとも、編集方針としては、教理をできうる限り、福音書において語ることを目指してまいりました。

分かる(届く)説教と主イエス

先回、説教は神礼拝を成立させるための要であり、礼拝式こそ、日曜学校の営みの生命線であると学んだことを改めて思い出してください。そうなれば、分かる言葉、届く言葉を求めてなす説教は、単に教理の「説明」ではなく、生けるキリストの物語(説教、出来事)を、「物語る説教」を目指すことになります。聖書(テキスト)の固有の真理を告知しながら、主イエス(神)を生き生きと紹介する説教(お話)です。そうなれば、必然的に、神を賛美する礼拝の言葉、頌栄的な言葉としても整えられてくるのです。何よりも、そのときには、主イエス御自身が子どもたちの最も深いところにまで届き、訪ねてくださいます。

日曜学校教師は、たとい牧師のように聖書の広く深い知識、教理の包括的な知識においてなお貧しくとも、子どもに分かる、魅力ある説教を語れるはずで、今「どなた」を紹介するために、子どもたちの前に立っているのかというポイントがあつていれば、良いのです。蛇足ですが、牧師は、よき模範を見せ、教師を訓練する責任が教会の主から課せられています。

説教者と主イエス

そのためには、まず、説教者自身、御言葉によって、主イエスとの交わり(礼拝)の喜びを味わい続けていることが求められます。説教者自身の礼拝経験、説教(御言葉)経験、霊的生活の深まりが求められます。もとより、説教準備は、大変な奉仕です。重圧があるのはその通りです。しかし、万が一いやいやするようであれば、説教にな

りません。逆に、説教する（伝える・紹介する、分かち合う）喜びがあるなら、どれほど拙い言葉であったとしても、そこで既に神の言葉が働いておられるのです。伝える喜びにあふれる説教とは、すでに説教者自身が聖霊による喜びに巻き込まれている（生かされている）はずです。聴く子どもたちにも、同じ聖霊が働いてくださることを信じ、言葉を整えるのです。

もとより、それは感情的な語り口を持たなければということではありません。聖霊のお働きを人間の感情で操作できるはずはありません。しかし、喜びの調べになっっていない説教は、なお、説教未満であるでしょう。あわせて繰り返しますが、子どものための（分かる・届く）説教なのですから、説教の言葉から聴いている子どもたちの姿が見えてこないようであれば、同じように説教未満となるでしょう。

分級と主イエス

私どもは分級で、何をしようとするのでしょうか。しているのでしょうか。それは、礼拝説教とまったく関係のないことなのでしょう。一方で「違う」といわなければなりません。分級固有の視点があるからです。この点は、次回に学びます。しかし他方で、その本質から言えば、「同じ」です。説教であれ、分級であれ、教師が伝え、紹介し、分かち合うべきことは、福音であり、その主人公、主イエス・キリストに他ならないからです。説教と分級ではその仕方において異なるのです。

分級では、ひとりひとりの子どもたちとまさに膝をつきあわせるような仕方で個別

に向き合います。繰り返しますが、届く説教においても、すでに説教者と子どもたちとは対話し、向き合っています。その意味では、日曜学校の営みとは、子どもに向き合うこと、そして御言葉の恵み、喜びを響かせることにあります。しかし、分級では、それを全体ではなく、ひとり一人個別になすのです。

もとより、分級でも複数の子らがいるでしょう。しかし必ず求められることは、担任教師は、子どもの名前を呼ぶことです。そのようにしてその子の現実のなかに、主イエスを紹介してあげるのです。そこで何が起きているのでしょうか。子どもたちの真の羊飼いなる主イエス御自身が、具体的な状況のなかに生きている彼らを「訪問」しておられるのです。私ども教師とは、この御業の「道具」となるのです。その意味で教師は、子らの牧師（牧会者）そのものとなっています。私どもはその全存在をもって、主イエスの魅力、その御力の証人として用いられることができるし、用いられているのです。

繰り返します。私どもの務めは、生ける主イエス・キリストを紹介することに尽きます。ですから、私どもは与えられた分級において、「準備した知識をすべて教えなければならぬ」というプレッシャーは捨てて良いのです。むしろ、「こなせた」と言う自己満足こそ、教師の最大の誘惑なのかもしれません。

皆様の労苦は、主が見ておられます。主イエスこそ、子らのために、祈り、語り、お守り下さっているのです。今月も互いのため、子らのために執り成し祈りましょう。

第九回 分級とは何か

連載第3回におきまして、「カテキズム教育」という教育方法論こそは、教会が自らの福音理解にもとづいて生み出した、教育の基本形であると申しました。それは、単に、教理の言葉を覚えさせるという教育方法を意味しているのではなく、顔と顔とが向き合う（膝を付き合わせる）関係を要請し、互いに御言葉を共鳴させる（響き合わせる）姿となるべきものであると学びました。教師とは、子どもたちに先立って、神に御顔を向けられた人（神の顧み＝牧会を受けた）であり、教師は、神の「牧会」を受けた喜びをたずさえて子どもに向かうものであると申しました。これこそ、日本キリスト改革派教会の日曜学校の教育イメージ、教会教育の基本形なのだと言いました。ここでは、先回の最後の項ともあわせ、改めて言い直すことになります。

キリストの三職と日曜学校教師

キリストの「三職」とは、預言者職、祭司職、王職のことです。主イエスは、今も教会を通し、聖書と説教において語っておられ、また、十字架の主は今も、天上で神の民のために執り成し祈っておられ、また、王にして勝利者なる主は、今も、神の民を治め、守り続けていて下さいます（「子どもカテキズム」問25、26、27参照）。日曜学校教師の奉仕とは、意識する、しないにかかわらず、この三職に対応してなされているものなのです。つまり、教師は、一人一人に、①御言葉を届け、②執り成し祈り、③魂を配慮するのです。教師が、自覚的に行えればより事柄にふさわしい働きが担えるはずです。生ける主イエス・キリストは、今、まさに、この三つの御働きを

力強く、子らになしておられます。私どもは、先立って働いておられるこの主の御業を認めるところからこそ、その務めを正しく担えるはずです。自分の能力で、この聖なる奉仕を担うことはできません。

分級は知識の伝達が第一？

分級、それは、通常、年齢別のクラスのことです。それなら、何のために行うのでしょうか。私どもは、日曜「学校」と称しておりますが、小中学校では、必ず発達年齢に即した「授業」が行われます。それなら、私どもは、それと同じ理解のもとに分級を行うのでしょうか。ここでも一方で同じであるということが出来ます。子どもたちの発達年齢に即して、つまり、生徒の視点に立って、福音を語りこむことが求められ、当然、語り口、教える内容（範囲）も異なります。

しかし、私どもの営みにおける分級とは、「知識の伝達」がもっとも重要な目的ではないのです。「本誌の基本方針」には、「分級はオマケ」で構わないとまで記したほどです。私どもが目指しているのは、子どもたちの礼拝共同体の形成であって、どこまでも礼拝式が中心となるからです。しかも私どもの教会理解とは、「神の言葉の説教と聖礼典（聖餐）が正しく執行される場所に教会がある」（アウグスブルク信仰告白他）というものですから、日曜学校においてはとりわけ、説教が最重要となるはずなのです。礼拝式におけるキリストの臨在、生けるキリストとの出会いが子どもたちに起こることこそ、日曜学校の「魅力」「生命」となるからだと申し添えました。

① 預言者職

前回、「子どもたちの真の羊飼いなる主

イエス御自身が、具体的な状況のなかに生きていた彼らを『訪問』しておられるのです。私ども教師とは、この御業の『道具』となるのです。その意味で、教師は、子らの牧師（牧会者）そのものとなっています」と申しました。ここに既に、分級の狙い、教師の目標が明瞭に語られています。

主イエス・キリスト（神）は、その説教を通して、子どもたちの全人格、心と体と魂にまで深く届いてくださいます。主が訪れてくださるのです。それなら、説教が届く（分かる）とは、いかなることでしょうか。それは、子どもたちの生活のなかに、主イエスがともにいてくださること、主イエスが働いていてくださることを、主のご訪問を認めさせられることです。そうすると、牧会者である教師は分級の場合でもなお、語られた御言葉を目の前にいる子どもたちに届けようとするはずで、子どもたちの立場に立って、神の言葉が子どもたちに届くとはいかなることであるのかを考えるはずで、そこでもなお教師にとって、説教者（預言者）としての視点が働いています。しかし、分級では、牧会者の視点をこそ明瞭にして、個人的、具体的に御言葉を届けようとの働きを担うのです。

② 祭司職

説教を正しく聴き取る力は、人間の能力に基づくのではなく、聖霊の賜物以外のなものでもありません。ですから、教師は、聖霊の働きが子どもたちに豊かになされることを待ち望み、執り成し祈らざるを得ません。それは、子どもたちが御言葉を信じ、豊かな慰めを受け、喜んで従って生きて欲しいと祈り願う、祭司として働くのです。分級の奉仕においては、不可欠の視点です。

祭司の視点に立って働きを担う教師であれば、「日曜学校の目標をもし一言で言い表すなら、『祈りの生活へと導くこと』（自分の言葉で祈れるようになる）となります」（「本誌の基本方針」3より）に賛同してくださるのではないのでしょうか。そのためにこそ、神の御言葉を届けるのです。御言葉が、祈り（の言葉）を生み出す（与える）からです。子どもカテキズム問76に、「信じることは祈ること」とあります。それだけに、分級では、祭司としての牧会者として、子らの「ため」、また子らの立場に立って「共に」祈ることができたら、すでに分級は大成功なのです。

③ 王職

この、主の働きに即応することが、分級の最大の目標、つまり牧会の固有の視点となります。主イエスが子どもたちを顧み、治め、守っていて下さることを信じる教師は、主の「道具」となって、この御業、つまり、「牧会＝魂への配慮」をなすのです。教師は、子どもたちに主イエスのご訪問をより深く受けさせるため、何よりも先ず、子どもたちのことを深く知りたくするはずで、彼らを知らずして、彼らの魂を配慮することはできないからです。ときには、子どもたちに手紙を書く、あるいは実際に家庭を訪問する必然性も生じてまいります。彼らと真実に「向き合うため」にです。このようにして既に、教師は主イエスのお働きをなぞるように働き、子どもたちのための小さな牧師（牧会者）となっているのです。

分級の教師とは、何よりも牧会者です。上述の①②③の働きを牧会者として重層的に担っているのが教師なのです。自分がそ

こで、何をしているのか、それを意識的になしえている人は、熟達した教師です。

牧会とは何か ① 真の牧会者イエス

それなら、改めて問いましょう。「牧会」とは何でしょうか。御言葉を読みましょう。先ず、ヨハネによる福音書第10章11節「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」。そして、詩編23編1節「主は羊飼いです、わたしには何も欠けることがない」。さらに、エゼキエル書34章12節「牧者が、自分の羊がちりぢりになっているときに、その群れを探るように、わたしは自分の羊を探す」。なかでも決定的に大切と思われるのは、マタイによる福音書9章36節以下です。「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼いきれない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。……収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」。

ここで、主イエスは、一生懸命、預言者としての視点で働かれ、また牧会者としての視点で、魂の配慮ばかりか、肉体の配慮、癒しをしておられます。「牧会とは何か」と問うとき、主イエス・キリスト御自身、神御自身こそ、真の牧会者であられることを弁えることが大切です。

② 牧会者のまなざしと心

それなら、真の牧者の目に、人間（子ども）たちはどのように映っているのでしょうか。ここで主イエスは、「群衆が飼いきれない羊のように弱り果て、打ちひしがれている」と見ておられます。子どもたち

の現実には、今、「弱り果てている」者として主の御目に映っているのです。そして「深く憐れ」んでおられます。これは、もともとの言葉の意味は、内臓をぎゅっとなつかまれるかのような激しい痛みを表現するものです。

牧会者なる主イエスは、御自身の目に映る彼らの悲惨な姿を、私どもにも同じように見なさいと招いておられます。さらに、ご自身の痛切な御心をも私どもに分かち合ってください。そのようにして私どもを、主の弟子、主の働きの同労者となること、つまり子どもたちを牧会することへと激しく招き、求めておられるのです。

ヨハネによる福音書21章において、復活の主イエスは、裏切った罪人のペトロに、あらためて主への愛を問うていただきました。そこで、彼に「わたしの羊を飼いなさい」と言明されました。主は、私どもにも、子どもたちを主イエスの羊として「見る」ようにと招き、そして何よりも「飼う」ことへと命じておられるのです。

途中ですが、既に、紙数が過ぎてしまいました。次回に譲ります。

ある人は、子どもたちには、まだ、主イエスの救い、牧会など必要ないのではないかなどと、まったくの見当違い！な発言をします。あるいは、心のどこかでそのような思いをぬぐいきれない教師はなお、おられるかもしれません。弱く、小さく、しかも罪人に他ならない子どもたちこそ、主イエスなしでは、健やかに生きられないのです。ですから主は、「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」

(マルコによる福音書第10章14節)と憤られたのです。

子どものとき受けた「傷」が、大人になって実る、つまり、自他を大きく傷つける問題を生じさせてしまうことになることは、

明らか過ぎるほどではないでしょうか。

子どもたちを主のところに導く、私どもの働きがどれほど尊いものであるのかを思わざるを得ません。共に励みましょう！

(教会学校教案誌編集長)

CS 教師の一言

引退 CS 教師のささやかな経験と提言

中尾 慎 宏

今から約54年前、当時所属していた教会（改革派京都伝道所・森居康次牧師）で教会学校を始めることになりました。私が大学2年（回）生の時だったと思います。森居先生の息子さんとそのクラスメート（小学3年生）や近隣の子どもたち7人が集まりました。当時の子どもたちの名前と顔はいまでも覚えています。私自身、洗礼を受けて間もないころで、なんと命を危なっかしいCS教師のスタートでした。

それ以来、全部の期間を合わせると約45年、三つの教会でCS教師の奉仕をさせていただき、本年4月7日（日）をもって長丘教会（福岡）のCS教師を引退いたしました。もう74歳になっています。3年前には肝内胆管がんの手術も受けました。

何の変哲もない未熟な教師で、失敗と後悔の思い出も多いのですが、その時々CSの子供たちとともに主の恵みにあずかる楽しい時間をすごさせていただき感謝です。春のピクニック、夏のプール、谷川での川遊び、海や森での一泊修養会、そしてもちろん、毎週日曜日の教会学校でのお話しや工作、お絵かき、学び……。

ずいぶん昔（45年以上前）、家内と結婚して間もないころ、教会学校に通うには遠い地域にいる子どもたちが数人（幼稚園児）CSに通いたいという希望をもっていることを牧師の岩崎洋司先生（長丘教会）が知られ、子どもたちの家の近くで文具店の二階を日曜日の朝1時間だけ借りられるよう

にしてくださって、先生役を私と家内が引き受けることになりました。ある雨の降る日、まさかこの雨のなか来ないだろうと思っていたら、雨靴をはき大きな傘をさした三人の子どもたちがよたよたとやってきました。その姿を目にしたときは思わず涙が出そうになりました。

この度、私のCS教師引退に際して、現CS生徒と大学生や若い社会人となっている元生徒たち12人が連絡を取り合って、懐かしい写真をいっぱい載せたアルバムをつくってくれました。一人ひとりからのメッセージも各ページに張り付けられています。わたしにとっては思いもかけない素晴らしいプレゼントです。子どもたち自身からねぎらってもらえるとイエスさまが直接ねぎらってくださっているような気分になります。

CS礼拝でのお話し（説教）では「信仰の継承」とか「子どもたちにこの教理を教えねば、この教訓を伝えねば」といった視点からなされることが多いように見受けられます。でも、私のささやかな経験から言いますと聖書に書かれている内容をなるべくそのまま、「分かりやすく、簡潔にそして楽しく語る」ことが肝要かと思います。「くどい解説」や「教訓」はなるべく避ける方が、聖書そのものが子どもたちの心に語りかけてくれるのではないのでしょうか。

ちょっとした小道具を用いると小さい子どもたちも退屈せず、嬉しそうに聞いてく

れるでしょう。私の場合は、四角や丸、雲の形などに切った色つき画用紙に話の登場人物や地名、用語を書き、それをセロテープで竹串に固定したものを3、4枚用意し、ポイントポイントで見せていました。大いなるマンネリですが。

分級ではもちろん生徒のレベルに合わせて付き合う必要があります。幼稚科から中高校生科まで経験しましたが、高校生には「哲学的」(?)な内容もいれたりしました。

いずれにしても「子どもたちに教える」という強い姿勢より子どもたちと共に聖書の話、福音の恵みを楽しむ姿勢が大事かと思えます。

礼拝の話とは別に、クリスマスや修養会のイベントではときどき腹話術の人形を使って話をしたこともあります。この時は、聖書の話はかなり脚色したり、聖書の教を少し入れるだけにしたりしました。腹話術は昔、四国の三本松伝道所の故松井證先生から勧められて始めたものです。

それから、これは言い過ぎかもしれませんが、CS教師は職業人としても立場がはっきりしていることが望ましいと思えます。子どもたちや保護者に安心感を与えるし、子どもたちが自身の将来を考える上でも有益と考えるからです。私の場合、職業は数学の研究・教育者です。すべてを創造された神の恵みを覚えつつ楽しく研究をつづけ、大学生(院生)相手に約45年間、数学の教育・指導に携わってきました。これも主の憐みによることと感謝しています。「宗教」と聞くと眉をひそめる一般人が多い中(私自身も余り好きな言葉ではありませんが)、とくに地域の子どものことも視

野に入れるならなおさら、この点は大事かと思えます。

長丘教会の牧師は岩崎洋司先生の後、岩崎謙先生、長井正人先生、小中史郎先生と続きます。長丘教会では今、生徒は少数でほぼ会員の子どものみですが、以前、この地域は新興住宅地で住民も一般的に若く、地域の子どもたちが20~30人集っていたこともあります。そのうち契約の子はごく少数でした。会員の子どもでない生徒で後に洗礼を受けた生徒は一人、現在も時々礼拝に参加している者がひとりです。わずかに、と言えるかもしれません。今は、昔の熱心だった子どもたちがどこかで教会に繋がっていてほしいと祈るばかりです。

一方、契約の子どもたちが主体だと確実に信仰が継承されて行くのが実感できます。従って、生徒として未信者の子どもを対象とするか、契約の子どもたちを対象とするかは、どちらの方がよいとか望ましいとかいう話ではなく、主が備えて下さる状況のなかで、誠実に対応してゆく他ないのでしょうか。

生徒の数が少なくなっている昨今、生徒の子どもたちに心理的に大きな負担をかけるようにするにはどうしたらよいか。これは差し迫った避けられない課題だと思います。教会学校として、これまでのスタイルを変えねばならないかもしれません。

忙しい日々の中でCS教師として奉仕することは簡単なことではありません。主の支えと慰めが必要です。お一人お一人のCS教師の皆さんの上に主の祝福をお祈り致します。

(長丘教会長老)

教育の現場から

萌保育園の理論と実践

吉岡良昌

キリスト教教育の課題は、教育という共通恩恵の土俵の中に、いかにキリストの特別恩恵の恵みを汲取るかに掛かっています。

萌保育園の「萌え」という言葉は、「大地が草の芽を萌え出させ、園が蒔かれた種を芽生えさせる」というイザヤ書61章の言葉から採用されています。「芽生え」を大切にして保育することが、就学前教育の本質です。萌保育園の教育理念は、同イザヤ書61章10節に記されている「わたしの魂は、わたしの神によって喜び踊る。」“my whole being shall exult in My God”の聖句に尽きています。「わたしの魂」は英訳聖書ではmy whole beingと訳されます。「わたしの魂」は「わたしの全存在」と関わっていると言えるのです。Wholeは、全部そろった丸ごとの状態を表現する言葉で、傷がなく、壊れていない、もとのままの治癒した状態を意味する言葉です。「魂」の教育は人間の智・情・意を含む全人教育と同義であることに注目しています。わたし個人の全人的発達は、わたしの存在全体が丸ごと救われることを意味しているのです。exultは歓喜する、跳び上がる、踊る、勝ち誇るという意味です。この聖句を毎日の礼拝の暗唱聖句にしています。今日も「わたしの全存在がわたしの神によって喜び踊る」一日として、生活することが目標になります。そのために、朝の礼拝には、園児が声をそろえて、神を賛美する歌を歌い、「天にお

られる、愛する神様」と呼び掛ける祈りをもって、毎日の食事を戴き、園生活が展開されます。

またフレーベルが主張したように、遊びは神様からの贈物と考えて、自由遊びを積極的に取り入れています。

「いのち」は成長するものです。しかし、その成長の土台である、「いのちの存在」そのものを畏敬の念をもって受け入れることが前提となります。「いのち」は天与の賜物であり、誰一人自分から生み出すことはできないからです。ですから「こどもの成長」を願う者はまず、「こどもの存在」そのものを受け入れることが求められます。

人間の存在の始まりは、受け身形であるので、誰かによって「生まれさせられた」存在であり、「与えられた」人間であることを素直に喜び、感謝することが基本です。「与えること」は、「愛すること」であり、「与えられた人」は、「愛されている人」です。その自覚をもつことが「基本的信頼感」の始まりとなります。この基本的信頼は、神に愛されているという、信仰と同義なので、一生涯の課題となります。第二の自律性、第三の自発性も一生涯の大切な発達課題です。

健康な人格（(healthy personality)）の発達は基本的信頼の感覚（a sense of basic trust）が土台となり、その土台の上に自律性（autonomy）が発達し、さらに自発性

(initiative) へと発達します。就学前教育の発達の課題は、この三段階です。

- I 乳児期 I am what I am given, (わたしは与えられた人です)
- II 幼児期 I am What I will, (わたしは意志する人です)
- III 遊戯期 I am what I can imagine I will be. (わたしは将来を想像できる人です)

幼児は人間の原型です。従って幼児教育は人間教育そのものと言えます。対等な人間と人間の教育関係が基本です。そして、教師も人間形成の途上にあることを自覚して、こどもから学び、こどもと共に成長する恵みに預かることができます。目前の子どもを相手に、自分自身の「子ども期」の修正を同時に図ることができるのです。主イエスは、「子どもは神の国に属する」という意味の事を述べました。「子どもから学ぶ」は主からの御命令でもあります。子どもから学んで、大人が襟を正す事はあり得ることです。子どもの直観的洞察力と純粹な主への信頼度は、大人よりも高いからです。

キリスト教教育は常にキリストから来る聖霊の働きを祈り願って為されます。主こそが真の教師だからです。カルヴァンの教育理念の一つは、神の accomodation (適用) です。教会教育も含めて、教師は神の教育の代理者なのです。教師は、いつも聖霊の働きが現存している、三位一体の主なる神ご自身の教育の働きの代理者であり協働者であるのです。

ここから教育のメソッドも導かれます。教育のメソッド(方法)は、神が教育の主体で、教師は代理者ですから、フレーベル

が述べたように、消極教育の方法になります。神から促される子どもの意志が優先します。保育者はその子供の意志の実現に向けて援助する立場になります。教師の理念を押し付けたり、強要することはタブーとなります。まず、保育士は無心になって全身全霊を込めて子どもを受容することが先決なのです。その後、子どもの意志が自律(自立)の始まりとなるように子供の意志を尊重するのです。そこから子どもの自発性へと展開するのです。

今年の保育園の年間テーマは「ことばで生きる」です。旧約聖書のヘブル語「ことば」を意味する「ダーバル」は「言葉」・「でき事」・「誠(まこと)」・「理(ことわり)」の意味があります。従って、神が語る「ことば」は、「でき事」を生起させ、信仰共同体の「ことわり」として神の戒めとなり、神の「まこと」として、神の人間への「誠実な愛」となって現実化しています。神の御言葉に倣って、私たちの話すことばや園児への言葉かけなど、注意してゆきたいと願っています。

毎月の園内研修では、聖書の学びを含めた保育理論と実践の課題に取り組もうとしています。

課題はたくさんあります。その一つに、現保育士は全員クリスチャンではないという事があります。現保育士は園の方針に反対しないので、神の味方ではあると思いますが、本当に祈りを一つにして神の御国の進展のために労する同労者が現場にはいないという事です。

クリスチャン園長を募集しています。

萌保育園は銚子栄光教会と湖北台教会を母体とする社会福祉法人銚子栄光福祉会の保育所施設です。現在、萌保育園は、クリ

スチャンの保育士と経験のあるクリスチャン園長を募集中です。社会福祉法人として社会的責任を果たしつつも、理事会のメンバーは改革派教会の牧師・長老や教会員で構成されています。その点で萌保育園の教育理念が聖書に基づく保育理念として変わることはありません。しかし、萌保育園は現在クリスチャンの保育士・園長が不在です。保育士の資格を有するクリスチャン園長が与えられることを切に祈り求めています。遠方から赴任される場合でも、住宅を提供できます。どうぞ、御心を伺い求めて

ください。主からの呼びかけの声を聴かれて、立ち上がってくださる方をお待ちしています。主がその方の道を備えてくださるよう。ご連絡を切にお待ちしております。

連絡先：〒288-0861

千葉県銚子市芦崎町937番地 3

電話 0479 (33) 3677

社会福祉法人

銚子栄光福祉会 萌保育園

理事長 木村庸五

施設長 吉岡良昌

信仰告白の証

信仰告白までの10年

雨宮 凜太郎

私は、1996年4月16日に生まれ、翌年幼児洗礼を受けました。信仰告白に導かれるまでは、たくさんの人から、「信仰告白はいいよ!」「なんで信仰告白しないの?」と言われ、そのたびに私は「信仰告白のタイミングは自分で考えています」と答えました。正直どれぐらいこのやり取りをしたのか覚えていません。しかし、私は初めからそう答えていたわけではありません。

私が幼児洗礼を受け育った教会は、恵まれていることに、学生一人が信仰告白をすると、芋づるのように次々としていく傾向にあり、私もその一人でした。子供の頃から、12時近くのおなか空く頃に大人たちが飲み食いする「パンと葡萄酒」は、とても憧れで、自分から「信仰告白をしたい」と牧師に言ったのは中学生のときでした。しかし、親にも相談せず急に言ったため、学びはしたものの親に止められ、信仰告白をせずに約10年の時間が流れました。高校受験や部活動、浪人、大学進学など多くの経験をしました。その中で「自分がクリスチャンであることを周りに言うことは“伝道”になる」ということを学び、自分の中で強く残るようになりました。

それから、ノンクリスチャンの友達にも教会やキリスト教の話をたくさんし、少しずつ自分の中での伝道をし、高校生ではいろいろなキャンプへの参加、そして大学に入ってから、学生会やスタッフの奉仕を精力的に行い、また自他中会の教会を訪れ、

自分の教会とは何が違って、どんな試みをしているのかを見て、またそれを持ち帰り青年会で話し合いました。その中で、幼児洗礼を受けているが、信仰告白はまだしていない年下の子たちに出会う機会が与えられ、自分の経験を交えながら多くの話をしました。今思えば、その長い期間は私と同じ悩みをもった子たちを信仰告白へと導く大事な時間だったのかなと思います。そして、なにより私自身が信仰告白について考える時間を神様がくださったのだと思います。

もう一つ、が信仰告白するに至った出来事があります。それは「弟が導かれたこと」です。

私には4才下の弟がいます。弟は、部活動は中高とテニスに打ち込み、日曜日の礼拝もたびたび試合などで欠席することが多く、礼拝へ出席できても日ごろの疲れからか寝てしまっていて、夏のキャンプも小学生を最後に行っていませんでした。私はそんな弟を見て何とかしたいとは思っていたものの、何も出来ずにいました。

そして、彼が高校3年生になったときに、私は岐阜県恵那市で3泊4日にわたって行われる全国高校生キャンプ“SummerDays”に誘いました。卒部して夏休み時間があり、私がスタッフで行くなら、彼も行ってくれるだろうと思い、何より“信仰の友”ができれば変わってくれるだろうと思ったからです。初めは弟もあまり乗り気ではなかつ

たですが、周りの協力もあり、なんとか参加させることができました。最初はとても緊張している様子で、帰りたいと言うくらいでしたが、同年代と疲れるまで遊び、力一杯ワーシップを歌い、講演を聞き、次第に弟は変わっていきました。そして3日目の夜に行われるキャンプファイアーでの証会で、弟は「僕は今日初めて神様に会いました」と言いました。私も神様に会ったその瞬間を鮮明に覚えています。今では、日曜日の朝の礼拝に出席できなければ、夕拝に参加し、学生会も精力的に参加、中会を超えてできた“信仰の友”と連絡しあい、プライベートで会うくらいの仲です。私よりも大きな信仰をもった弟と私は、2018年11月に神様に導かれ、信仰告白をすることができました。多分この出来事は死ぬまで忘れないと思います。

今では、弟は大学に進学し、私は絶賛就活生として忙しい信仰の日々を送っています。これからはできれば他の教派の人とも交流を持ち、改革派の良いところと悪いと

ころを見極め、自分の教会で議論し生かしていきたいと思います。今23歳の私ですが、これからどこに就職し、どんな人と出会い結婚し、また家庭を築いていくのかは、神様にしか分かりません。ただこれまでの20年と同じように楽しく、つらく、信仰に満ちた人生が待っているのだらうと思います。残り約60年神様に仕え、覚えて信仰の道を歩んでいきたいと思います。もし、これを読んでいる方が、教会に行けずにいる人を思い起こされるように、若い人々が道に迷わないようにお祈りしていただけたら幸いです。最後になりましたが、私の愛唱聖句をここに書いて締めたいと思います。

「隣人を自分のように愛しなさい」

ルカによる福音書10章27節

「受けるよりは与えるほうが幸いである」

使徒言行録20章35節

(上福岡教会会員)

教会役員養成のために

牧師の務めについて (1)

望 月 明

引退教師の私に、表題のような文章が依頼されたのは教会規程などからの通常の解説ではなく、自分自身の自省を込めての課題の展開にあるのではないかと受け止めています。引退して年月がたっていますので教会の現状から疎くなっています。書籍のほとんどを人に譲り、今も「断捨離」をしている最中です。参考資料もほとんどなく学問的な論述をすることは出来ません。ごく雑駁な記述となり、申し訳なく思っています。

1. 牧師の基本的な務め

牧師（協力牧師、宣教教師）は、その就職式において、次の誓約が求められます。

「一 あなたは、神の恵みによってこの職務に召されたことを確信し、神への愛と福音を宣べ伝える熱心によってのみ、この務めを遂行することを誓約しますか」。

この私の文章では、「教師職」と言うよりも1つの群れの責任を担う「牧師（協力牧師、宣教教師）」の務めを取り扱います。「牧師」の第1の、そして最も基本的な務めは「神への愛と福音を宣べ伝える」説教者であることです。「福音を宣べ伝える熱心によってのみ、この務めを遂行する」のです。牧師就職の誓約二項以降は、第一項を補い支えるための誓約という構造になっています。

結婚式後に早々と結婚の誓約が忘れ去られることもあるようですが、同様に牧師就

職後に、この誓約の重さが忘れられているのではないかと思うことがあります。牧師は、福音宣教の熱心によってのみ教会を形成する務めです。福音宣教・伝道の中心にあるのは礼拝における説教と言っていいでしょう。極論すれば「あなたは、福音の説教によってのみ、牧師の務めを遂行しますか」と問われていると言って言い過ぎではありません。「のみ」を「だけ」と誤解されると困りますが、牧師の務めの中心は説教にあります。牧師とは説教職です。強調しすぎることはありません。

教会における福音宣教・伝道の主たる場は主の日の礼拝です。牧師はこの礼拝で福音を宣べ伝える伝道者、説教者として召されています。ここで福音を伝えるために召された。この召しの自覚が生涯を貫くのです。牧師にはいろいろな働きが求められます。手紙を書き、電話をかけ、訪問し、カウンセリングし、役員会の準備をする、さらには大・中会の務めを果たす、いろいろな奉仕が次から次へと入って来ます。これらも牧師の働きであることは勿論です。

しかし、牧師の務めの基本は「説教者であること」です。大・中会の奉仕などと言い訳にして説教の務めを疎かにしてはならない、手抜きをしてはならないのです。福音の宣教・説教をもって教会に仕える務めです。むしろ、他のすべての奉仕は、説教の延長線上にあると言っていいでしょう。

2. 神の言葉としての説教

説教には、人の言葉としての側面と神の言葉としての側面があります。説教は聴衆によって「今、語られる神の言葉」として聴かれるべきものです。第Ⅱスイス信仰告白第1項で、「旧新約聖書が、神のまことの言葉そのものである」と記した後に、「神の言葉の説教こそが神の言葉である」と規定されています。「教会において、正しく召しを受けた説教者によって告知されるとき、神の言葉そのものが告知され、信仰者に受け入れられることを信じる」。これが改革派教会の「説教者と説教」についての最も基本的な理解、信仰的な表明です。説教は「今、語られる神の言葉」であり、そのように聴かれねばならないのです。

説教者は、罪赦されたとは言え、なお罪人です。罪人で、有限で、愚かな者が、どうして神の言葉を語り得るのか。考えれば考えるほど不可能なことではないかと思う。しかし、神は、天使を用いて神の言葉を伝えるのではなく、有限な罪人に過ぎない人間の奉仕者の言葉を用いて神の言葉を語らせるのです。人間的に言えば本来、不可能な業です。しかし、神は説教者をこの不可能な働き、罪人である者が神の言葉を語る務めに召しておられるのです。

ここに畏れとおののきを感じねばなりません。説教者として召しを受けたことは、聖霊の働きです。「肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれた」という出来事です。ここに祈りが求められます。聖霊の働きである神の召しは祈りにおいて受け止められるのです。処女マリアが「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカ1:38）と語ったように、説教者も畏

れとおののきをもって、この召しを確信していくことが求められているのです。

3. 「福音の言葉」の獲得

説教は、神の言葉であると同時に人の言葉、説教者の言葉であることです。「神の言葉が外的に宣べ伝えられる」ために、神は人の奉仕を用いられます。ここに説教者の生涯にわたる修練が求められています。どれほどの修練を積んでも、これで完了ということはありません。

引退教師になると遠慮がなくなるのでしょう。私の耳にも多くの信徒や引退教師から説教についての批判の声が入ってきます。代表的な声の1つは「説教が聴くに堪えない」という声です。最近の「神学校報」にも、若い先生方の説教が律法主義的になっているという警告が記されています。若手の先生方だけのことではないでしょう。説教が「説教」になっていない場合があるのではないのでしょうか。改革派の牧師ですから聖書から離れて時事漫談をするわけではありません。聖書の話をしてはいる。ただ聖書についてとりとめなく話している。メリハリがない。中心点が絞られていない。何を語ろうとしているのか分からない。

説教において語られるべき「福音の言葉」が語られないのでは律法主義的になります。説教は、牧師という資格を持つ人が、礼拝という場で、何かを語れば説教になるわけではありません。問題は多くの場合、福音が分かっていないのではないかと思います。説教者として福音の恵みが体得されていないのではないのでしょうか。

19世紀英国に、スポルジョンという説教者がいました。この人が16歳くらいの少年

の時でした。ある日、礼拝に行こうとしたら嵐で途中から大降りになった。そこで近くの小さな教会に飛び込んだ。礼拝の時刻になったが正規の牧師が到着していない。そこで教会の役員でしよう、信徒が立ち上がって礼拝の司式をし短い説教をした。その説教に少年スポルジョンは引き込まれてしまった。信徒役員の説教は、キリストを見上げなさい、の一語に尽きます。受肉されたキリストを見よ、軽蔑されたキリストを見よ、十字架につけられたキリストを仰ぎ見よ、よみがえられたキリストを見なさい。使徒信条のキリスト論条項をなぞったようなものであったということです。何の準備も出来ていない信徒役員の説教です。しかし、この説教にスポルジョン少年は目が開かれた。彼はここでキリストを見たのです。

ある人がスポルジョンの評伝を書いています。スポルジョンの生涯の説教は「キリストを見よ」の一語に尽きると述べています。準備なき説教を勧めるわけではありません。無資格の信徒説教を勧めるわけでもありません。しかし、語られるべき「福音の言葉」が語られなくては説教ではないのです。聖書をただだと語ることが説教ではありません。説教以前です。説教は聖書講義ではありません。聖書テキストから明確に福音が語られねばならないのです。説教者は、聖書テキストから福音の言葉…キリストにある慰めを読み取り、これを受け止めて、語られねばならないのです。説教は聴く者に命を得させる福音の言葉の宣べ伝えです。

4. 相手に分かる言葉で語る

説教はコミュニケーション、言葉による

福音の出来事の伝達です。勿論、「神の言葉」の宣べ伝えである説教がすべての聴衆に理解されるということはありません。このことを十分に理解しつつも、なお説教は人の言葉による福音の伝達であることをしっかり受け止めていかねばならないのです。「聖書を正しく語ったんだから、後は神にお任せ」などと考えるはならないのです。自分の語った言葉が、内容が、相手にコミュニケーションしているか、どうか、です。

引退してから所属教会以外の教会の礼拝にも出席するようになりました。すると、この説教者は、自分の語る言葉が、聴衆に理解されることを求めているのではないか、と思うような時もあります。説教は、聖書概説の話でも、組織神学の講義でもありません。該博な聖書知識を伝達したらいいわけではありません。牧師の説教は神学校教授の講義ではないのです。説教は、聴衆、未信者とのコミュニケーションです。説教者の独りよがりには困ります。

新約聖書がコイネー・グreek（通俗ギリシャ語）で記されたことを自覚してほしいのです。新約聖書は当時の世界の多くの人に読める、最も多くの人に理解できる言葉で書き記されました。説教も聞き手の多くの人たちに理解できる言葉、平易な言葉で、焦点を絞って語らねばならないのです。語られる言葉の内容の霊的な理解のためには聖霊の働きが必要です。しかし、説教の言葉自体は、多くの人に理解されねばコミュニケーションとしての説教は成り立ちません。

説教者の使命は、時代に生きる聴衆に分かる言葉、通じる言葉を獲得することです。相手に分かる平易な言葉、聴衆が理解できる言葉と論理をもって語らねばならないの

です。世の人に理解できる言葉を語らせるために、神はあえて人間の奉仕者を用いられるのです。聞く相手に理解できる、分かってもらうためです。

神の御子が人となられた「へりくだり」の意味がここに 있습니다。神ご自身がへりくだって人となられ、人の言葉を用いてお語りになられました。そして、人間である弟子たちを用いて神の言葉を伝えさせられるのです。神の御子の「へりくだり」は、

キリスト論の課題であるだけでなく、優れて宣教論、説教の課題です。相手に分かる言葉、聴衆に理解できる言葉とレトリックを獲得することは容易なことではありません。どうしたら、この聴衆に「福音を伝えられるか」。このことに悩み抜くことが牧師の生涯の課題であり、務めです。このために召されていることを自覚して修練を重ねてくださるように祈り願っております。

(中部中会・引退教師)

旧約聖書が語る歴史

7. 王国時代の始まり

大西良嗣

サムエル記上下、列王記1～11章を取り上げます。士師の時代から王国の時代に移るのですが、まず、王を立てることになるサムエル誕生のエピソードから始まります。長く子どもが与えられなかった母ハンナの感謝の祈り(サム上2:1～10)は、主が弱い者を強く、低い者を高く、飢えている者を満たされ、王に力を与えることを賛美します。この祈りはサムエル記全体に通じたテーマを示しており、新約のマリアの賛歌(ルカ1:46～55)にも受け継がれます。

人々はサムエルに「ほかの国々のように」王を立てることを要求します(サム上8:5)。他の国々の風習に従わずに「聖なる者」となるように律法で求められている(レビ18:3, 19:2)ことが忘れられたようです。これは、主が王としてイスラエルに君臨することの拒否でもあります(サム上8:7)。

それでも主はサウルを王として立てさせます。サムエルは彼に油を注ぎ(10:1)、神の霊が彼に激しく降りました(10:10)。当時、イスラエルを最も苦しめていたペリシテ人は鉄器を独占した(13:19)軍事力の強い国でしたが、イスラエルの民の叫びを聞いて主が立てられた王であったサウル(9:16)は、息子のヨナタンの活躍もあって善戦します。ただしアマレク人との戦いで主に従わず、「主の御言葉を退けた」ので「王位から退けられる」のです(15:23)。

代わって油が注がれたのが、羊飼いに過ぎなかったダビデで、彼にも主の霊が激し

く降ります(16:13)。サウルからは主の霊が離れ、悪霊が彼を苦しめることとなります(16:14)。主がサウルを離れ、ダビデと共におられるようになりました(18:12, 14, 28)。サウルはダビデを恐れ、命を狙いますが、やがて戦死し(31:1～6)、ダビデが全イスラエルの王となります(サム下5:1～5)。歴史の真の支配者はやはり主なのです。

ダビデは主の契約の箱をエルサレムに移し、エルサレムを政治的な首都であるだけでなく、主への信仰の中心地とします(6章)。主はダビデの王国を永遠に続かせることを約束されます(7章、ダビデ契約)。やがてバビロン捕囚によってダビデの王国は滅ぼされますが、ダビデの血筋に属するメシア(油注がれた者)によって王国が再建されることが期待されることとなります。主がこの約束に忠実であられたことは、イエス・キリストによって実証されました。

次の王として立てられるのがソロモンです。ソロモンは王位に就くと、政敵を肅正する一方で(列王上2:12～46)、主に多大ないけにえをささげて、知恵を求める敬虔な姿を見せます(3:1～14)。ソロモンは王国の全盛期を謳歌し、神殿や宮殿の建築を進めます(4～8章)。その知恵は国際的にも知られました(10章)。しかし多くの外国人女性を妻とし、晩年には彼女たちの神々に従います。主の警告に耳を傾けず、ついに息子の代に王国が分裂されると言い渡されるのです(11:9～13)。

旧約聖書が語る歴史

8. 分裂した王国における王と預言者たち

今回は、列王記上12章～列王記下前半を取り上げます。列王記は、イスラエルがゆっくりと確実に霊的に病んで行く歴史を語ります。その結果、ソロモンの息子レハブアムの時代に王国が2つに分裂し（前922）、さらに北側のイスラエル王国がアッシリア帝国によって滅ぼされ（前721）、ついには南のユダ王国もバビロン帝国によって滅ぼされます（前587）。

このようなことが起こったのは、申命記で警告されていた（申命29:24～27）にもかかわらず、主との契約を捨て、偶像礼拝を繰り返したからでした（列王下17:7～20）。

レハブアムの手から北のイスラエル10部族の王を奪ったヤロブアムは、金の子牛を二体造ってベテルとダンに置き、イスラエルの人々がエルサレムに礼拝に向かわないようにします。これは、かつてイスラエルが荒野で犯した過ちの繰り返しであり（出エジ32）、さらに雄牛で象徴されるカナン神バアル礼拝に結びつくものでした。以降、イスラエルの王はヤロブアムの罪を繰り返すゆえに断罪されます。

さらにアハブはシドンの王の娘イゼベルを妻に迎えて、バアル礼拝を推進します。対外的には安定した時代でしたが、イスラエルの歴史上、最も主の怒りを招いた王となりました（列王上16:29～33）。

2つに分かれた主の民の王国、イスラエル王国とユダ王国の王について、交互に記述がなされて行きますが、そのリズムが中断されて、主への礼拝が最も脅かされたア

ハブの時代に預言者エリヤが送られたことが詳しく語られます。

聖書の預言者は、未来を予め告げることもありますが、むしろ主の言葉をその代理人として伝えることを任務とします。預言者は単独で行動することもあれば、共同体を作り、師弟関係を持っている場合もあったようです。

バアルは豊穡の神とされていました。しかしエリヤは、干ばつを予告することで主こそ自然を支配しておられること、やもめの息子を生き返らせることで主が生命を支配されていることを示しました（列王上17）。バアルの預言者と対決することで主が私たちの祈りを聞いて行動してくださるお方であること、再び雨を降らせることで真の豊穡の神が主であられることを示しました（18）。この主とバアルを同時に拝むことはできないのです。

エリヤの跡を継いだエリシャは、多くの奇跡を行いました。政治的・軍事的な危機に際して活躍したことも特徴です。イエフに油を注ぎ、バアル礼拝を推進したアハブの家系を断絶させるに至ります（列王下9）。

主が預言者を通して告げさせた裁きの言葉が成就したことが、たびたび記されます（列王上16:34、列王下9:36, 37など）。ただし、裁きの言葉は機械的に実現するのではなく、むしろ悔い改めを促すもので、主が赦し、実行が中断されることもあります。そして裁きが実行されてもなお、主は憐れんでくださるお方です。

旧約聖書が語る歴史

9. 前8～7世紀の改革と預言書

列王記下の後半には、北のイスラエル王国がアッシリア帝国によって滅ぼされた後、南のユダ王国で二度の宗教的な改革が行われたことが記されています。

一つ目の改革は、ヒゼキヤ王によるものです。「聖なる高台を取り除き、石柱を打ち壊し、アシェラ像を切り倒し」(列王下18:4) しました。約束の地でなすべきこととして申命記で命じられていたことです(申命7:5)。ヒゼキヤはイスラエル王国を滅ぼしたアッシリアによって攻め込まれるという絶体絶命の危機を経験しますが、主がアッシリアを退却させることが預言者イザヤから知らされました(列王下18,19章)。

二人目の改革者はヨシヤ王です。彼がエルサレムの神殿の修復を命じると、神殿で律法の書が見つかります。それに記されていることが行われて来なかったために災いがかたされることを恐れ(申命28章)、ユダ王国ばかりでなく、すでに滅ぼされたイスラエル王国の領土に至るまで、徹底的に偶像を破壊しました(列王下22,23章)。

しかし、いずれの改革も次代の王が主に従わなかったので、その成果はすぐに失われてしまいました(列王下21:2, 23:32)。

イスラエル王国が滅ぼされる前にはアモスとホセアが、ヒゼキヤの改革の前後にはミカとイザヤが、ヨシヤの改革の前後にはゼファニヤが預言者として活動しました。それ以前の預言者たちが活動したことは列王記などの歴史記述に記されていますが、預言者が語った言葉が一つの書物になるの

はこの時代以降です。語られたことが実現するかを確かめるために記録されたのかも知れません(参:申命18:22)。

アモスはユダ王国からイスラエル王国に遣わされた預言者でした。ホセアはもともとイスラエルに立てられた預言者です。二人はともにイスラエル王国の滅亡を予告したのですが(アモス8:1～3, ホセア13:7,8など)、それが主にとっていかに辛いことであるかをも語り(ホセア1～3章, 11:8,9)、やがて回復が与えられる日が来ることを告げています(アモス9:11～15)。

イスラエル王国の滅亡を目の当たりにしたミカは、同じことがユダ王国にも起こり得るのだと警告を発します(ミカ1:5)。エルサレムが廃虚となることを予告しますが(ミカ3:12)、その回復の約束も告げます(2:12,13)。イザヤもミカと同時代の預言者です。やはりユダの滅びと捕囚(2～11, 28～32章)、そして回復のことが語られますが、分量多く豊かに語られています。ゼファニヤはヨシヤ王の時代の預言者で、短い書物しか残していませんが、やはり滅びの警告(1:2～18)と回復の約束(3:9～20)が語られています。預言者はもつと多くの要素を語っていますが、アッシリア帝国やバビロン帝国が迫る危機的な状況の中で、主に立ち帰ることこそが最も有効な防衛手段であることを語り聞かせていることは、今日的にも重要です。それでも主に従い得ない民ですが、なお見捨てない主の憐れみがあります。(宝塚教会牧師)

聖書默想・説教展開例・分級展開例

10月6日 使徒言行録28章1～31節

【解説と黙想】

ローマに届いた福音

パウロたちの船は難破し、小さな島国マルタ島にたどりつく。島の人たちは、いろいろな形でパウロたちに敬意を表し、必要なものを与えた。パウロたちはこの島で3か月を過ごし、冬を越した。

いよいよマルタ島を出発。乗せてもらったアレクサンドリアの船の船印となっていた「ディオスクロイ」はギリシア神話に出てくる双子の兄弟のこと。まずはシチリア島シラクサへ渡り、本島のレギオン、プテオリへと海路で。プテオリで7日間滞在。そこからは陸路でローマへ（聖書巻末地図参照）。

プテオリで「兄弟たち」を見つけた、とあるが、これはユダヤ人のこと。そして、ローマの「兄弟たち」にもパウロのうわさが伝わり、手前の町々まで迎えに出て来た。ローマ宣教の足がかりは、まずは、ローマにいるユダヤ人たちだった。

パウロはローマに入ると、「おもだったユダヤ人たち」を招き、ローマ皇帝への上訴にいたる経緯を話す。パウロはおそらく今までの経緯から、ローマのユダヤ人たちにも、「パウロは律法を冒瀆する者だ」といううわさが回ってきているのではないかと恐れていたに違いない。しかし、ここのユダヤ人たちは、小アジアでパウロに猛反対し、殺そうとするほどに敵対していたユダヤ人たちとは違い、ローマの手前の町まで迎えに出てきてくれたし、「あなたの考えておられることを、直接お聞きしたい」（22）と耳を傾けてくれた。パウロは心底ほっとしたに違いない。ローマでは「全く

自由に何の妨げもなく」（31）教え続けられた、という記述は、パウロのそういう心境を表している。

「ユダヤ人たちは日を決めて、大勢でパウロの宿舎にやって来た」（23）パウロが「朝から晩まで説明を続けた」のは、神の国についての力強い証し（悔い改め、立ち帰るべき時が来たということ）であり、また、モーセの律法や預言者の書を引用して、イエスが来るべきメシアであり、神はそのイエスを死者の中から復活させられた、ということの説得することだった。そして説明を聞いてみると、パウロの言うことを受け入れる人もいたが、やはり他の地域での反応と同じように、パウロの言うことを信じようとせず、どんなに説明しても説得されない人たちはいたのであった。

蛇足かもしれないが、誤解のないように記しておく、パウロはローマに来て、漠然とローマ人（異邦人）に宣教したのではないということに注意していただきたい。まずは旧約聖書の言葉を知っているユダヤ人たち（改宗者も含む）に、その成就としてのイエス・キリストを宣べ伝えた。まず、ローマにいるユダヤ人・および「神をあがめる人たち」と呼ばれている人（異邦人からの改宗者・聖書の言葉で生きる決心をした人）への宣教だったということ。「神の救いは異邦人に向けられた」（28）のであるが、今もなお、旧約聖書を離れてのイエス・キリストの宣教はあり得ないということをお忘れしないでほしい。（赤石めぐみ）

《参照聖句》 イザヤ書6章、マタイによる福音書13章10～17節
《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問34, 35

10月6日 使徒言行録28章1～31節

【説教展開例】

ローマに届いた福音

◇..... 単元のねらい◇

パウロは世界の中心ローマでも語る。聖霊は働き続け、福音は前進する。

「説教題」

冬を越すのにより適していると思われるフェニクス港（同じ島の別の場所）へ移動するつもりが、暴風にさいなまれ、パウロたちは二週間も海上を漂流することになってしまいました。長い間食事もとれず、荒れ狂う風や波とたたかって276人もの船員は皆くたびれ果てていました。やっと陸地が見えましたが、船はうまく陸地までたどり着けず、手前でぶつかって壊れてしまいました。くたびれ果てている上に、泳いで上陸しなければならなくなり、皆ほんとうにぐったりと疲れてしまったことと思います。

でもそうやって、とにかくいのちは助かって無事に上陸できました。そこは島で、マルタと呼ばれていました。船は難破してしまいましたが、とんでもない方向に漂ったのではなく、パウロの目的地ローマまで、ぐんと近くまで運ばれたのでした。これは神さまのお計らいだったかもしれません。マルタ島に漂着した人は300人近くもいたのに、島の人たちは一同をもてなして、大変親切にしてくれたそうです。パウロが神さまの力によって守られていることは、この島でも示されました。マムシにかまれても大丈夫だったり、島の長官の父親をいやしたりしました。

三か月後、パウロたちはまたローマに向かう旅に出発しました。いくつかの港に泊まりましたが、プテオリというところでは、聖書を信じて生きている仲間たちがいて、「どうぞもっと泊まっていてください」

とお願いされて、七日も滞在したそうです。きっとパウロが話してくれる聖書のお話がとても興味深かったのでしょう。パウロの方も聖書のことなら朝から晩までいくらだって話せるくらいでした。

今までは船旅でしたが、そんなふうのパウロはプテオリに長く滞在したので、他の人たちはもう船で出発してしまい、船に乗れなかったパウロたちはローマまで陸路で行くことになりました。するとローマからパウロのうわさを聞いたユダヤ人たちが、手前の町まで迎えに来てくれました。「パウロは彼らを見て、神に感謝し、勇気づけられた」と記されています。今まで、パウロは、新しい町に行くと同胞のユダヤ人に会うのですけれども、そのユダヤ人たちに聖書とイエスさまの話をする、あの町でもこの町でもひどい反対にあい、そのために訴えられてローマまで来ることになったわけなので、ずいぶん気落ちすることが多かったのですが、ローマでは自分を迎え入れてくれそうだと、ということがわかって、本当に励まされ、勇気づけられたでしょう。

ローマに着いて、パウロは見張りがつけられましたが、自分だけで住むことが許されました。三日後、パウロはローマに住む「おもだったユダヤ人」（長老や会堂長）を招きました。そしてまず、自分がどうしてローマに来ることになったのかを話しました。それは同胞のユダヤ人たちに、「お前は律法を冒瀆している」と訴えられたから

だ、そこで、自分は皇帝に上訴したのだが、同胞に仕返しすることが目的なのではない、自分が今メシアだと信じているイエス・キリストのことをここでも伝えたいからなのだ、と話しました。

ローマにいるユダヤ人たちの耳には、エルサレムや小アジアでしつこく言われていたパウロの悪いうわさは届いていませんでした。しかし、パウロが教えている内容については、「至るところで反対がある」というふうに聞いていました。だから、ローマにいるユダヤ人たちは、パウロから直接、話を聞いてみたいと思っていたのです。

パウロの聖書とイエスさまについての話はいつもとても長い（朝から晩まで話せるほどだった）ので、ユダヤ人たちは日を決めて、そしてその日には大勢、パウロのところに来ました。神の国は来た、悔い改め、立ち帰るべき時が来た、ということ、旧約聖書の全体から、イエスさまこそが来たるべきメシア（救い主）であること、イエスさまが律法の要求どおりに罪の償いを成し遂げてくださったこと、それによって私たちに赦しが与えられたこと、神さまはそのイエスさまを死者の中から復活させて、イエスさまは今も生きておられること、初めは教会を迫害していた自分に、そのイエスさまが光となって現われて、自分の生き方が大きく変えられたこと、すべては聖書に書いてあるとおりであったこと、父なる神さまのご計画は壮大なものであったこと、その恵みをいただいて今自分は生かされていること……。

パウロは一生懸命説明しました。「自分たちも聖書を読んで生きてきたが、パウロの言うとおりに、イエスがメシアに違いない。

イエスがメシアだと信じて聖書を読めば、すべてつじつまが合う」と納得した人もいれば、「いや、安息日を守らないイエスなどという男がメシアであるはずはない。律法を守ることこそ大切だ」などと言ってパウロに反対し、イエスさまをメシアだと信じない人もいました。イエスさまの血によって贖いは成し遂げられた、ということもなかなか信じられないことだったようです。信じない人はどんなに説得してもダメで、互いに意見が一致しませんでした。

パウロの言うことを信じられなくて立ち去るユダヤ人たちに、イザヤ書の言葉を投げかけて、「この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです」と、言いました。パウロはその後二年間、自費で借りた家で、訪ねてくる人皆に聖書の言葉を教え、イエスさまのこと、自分の回心のこと、このイエスさまのために生きているのだということを証しました。はじめパウロはユダヤ人たちに語りましたが、聖書を信じて生きている異邦人たちにも、また、聖書と関係なく生きてきた異邦人たちにも、パウロは福音をどんどん伝えていきました。

さて、パウロは皇帝に上訴するためにローマに来たはずなのですが、その後どうなったのかは聖書に書いてありません。伝承によればパウロは67年頃、当時の皇帝ネロの命令で処刑され、天に召されました。パウロがローマに来たのが58年頃とされていますので、約10年、パウロはローマで福音を語り続けたものと思われます。聖書が見つめているのは、イエス・キリストの福音が広がっていくことのほうだったので、す。（赤石めぐみ）

《今週の暗唱聖句》

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。
(使徒言行録1章8節)

10月6日 使徒言行録28章1～31節

【幼稚科】

ローマに届いた福音、約束通りに

〈展開例〉

パウロは、ローマでもイエスさまの話をしたいと思い、船に乗って出かけました。嵐にあい、船は壊れてしまいましたが、なんと、ローマの近くの島に流れ着きました。島の人たちは親切で、パウロはマムシに噛まれたけれど大丈夫でした。こんな風に、神さまがいろいろと守って下さったのです。

パウロがまたローマに向って出発すると、今度はローマからパウロを迎えに来てくれた人たちがいました。本当に嬉しいこ

とでした。

パウロはユダヤ人にも、異邦人（ユダヤ人ではない人）にも、救い主イエスさまの話をどんどんしました。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（使徒1:8）という約束を、神さまがいつも共にいて、果たして下さったのです。

〈手紙を送ろう I〉「世界で働く先生方を励まそう」

材料：封筒、紙、色鉛筆など。

準備：封筒に入る大きさの紙を、人数分、用意する。

「私たちは小さいので、パウロのように船に乗って、外国の人たちにイエスさまを伝えることは、まだできません。でも外国で働いている先生方に手紙を書いて、応援することができます。

ローマから迎えに来てくれた人たちを見て、パウロが大喜びしたように、私たちの手紙を見たら、先生方はきっと大喜びをするでしょう。」

紙を配り、絵やメッセージを自由に書かせ、封筒に入れて送る。返信用のハガキを同封しても楽しい。

（敬称略、50音順）

小野田牧恵：カンボジア教育宣教

片岡 継：ワシントン日本人キリスト教会

川島 利子：ガンビア 技術・識字教育、医療伝道

酒井 啓介：アメリカ 神学生

長井 正人：ウエストミンスター日本人教会

10月6日 使徒言行録28章1～31節

【小学科上級・中学科】

ローマに届いた福音

1. 使徒言行録28：1～10を読みましょう。

①マルタ島の住民は、どのようにパウロたちを迎えましたか？

②パウロがまむしの害を受けなかったのはなぜですか？

③パウロが病人を癒したことで、島の住民の考えは、どう変わりました？

2. 使徒言行録28：11～31を読みましょう。

①寄港した場所を地図で確認してみましょう。そこに何日間滞在しましたか？

②ローマに着いた時、兄弟たちに出迎えられて、パウロはどんな気持ちでしたか？

③パウロと会ったユダヤ人たちは、パウロの話を受け入れましたか？

④迫害されても、福音が伝え続けられたのはなぜですか？

10月13日 ローマの信徒への手紙1章16～17節

【解説と黙想】

福音を恥としない

ローマの信徒への手紙は、キリスト教教理の総体であり、1章16、17節は全体の主題と言える。ルターは、この書を通して、神から与えられる「神の義」を発見し、宗教改革が起こった。

福音を恥としないとは、イエス・キリストを恥としないということでもある（マルコ8：38）。嘲りや嘲笑にも拘わらず、福音は全ての人に、救いをもたらす「神の力」であると確信していたからである。

福音とは、イエス・キリストが私たちの罪の身代わりに、十字架で死なれたことにより、私たちの罪が赦されたという良き知らせである。主の代償的贖罪によって、永遠の命の祝福へ受け入れられる。この福音は、「神の力」であり、人間を救うことが出来る（Iコリ1：18）。

力は、ダイナマイトの語源になった言葉。「力」とは、それ自身で何かを成し、結果を造り出すもの。「神の力」すなわち、神御自身の「力」を働かせて、救って下さるという意味。神の御子イエス・キリストの内に、一切の恩恵、力、方法が備えられており、御子の内に神性が満ち溢れており（コロ2：9）、御子が神の知恵、義、聖（Iコリ1：30）であられるので、御子という完全な身代わりの犠牲（十字架）と仲介によって、私たちの罪が赦される。更には、主は私たちを御自分の栄光ある体と同じ形に変えて下さる（栄化）のである（フィリピ3：21）。

救いとは、罪の支配から、神の祝福に入れられることである。①罪人である私たちは、無罪と宣言され、②全ての罪が赦され、③神から新しい霊的な命が与えられ（新

生）、④義人とされ（義認）、⑤キリストの律法の完全な成就によって、律法の呪いと支配から解放され、⑥神の子として受け入れられ（養子）、⑦罪の力から解放され（聖化）、⑧神の永遠の審判を免れ、永遠の命に預かり、⑨滅びから神の国に入れられ、⑩栄化され、⑪永遠に神と共に生きることである。神との関係で言うと、①神と和解し（コロ1：20）、②神との平和を得（ロマ5：1）、③子とする霊を受け、神を「お父さん」と呼ぶことが出来（ロマ8：15）、④子として全てのものの所有者となり（Iコリ3：21）、神の国の相続者とされることである（ロマ8：17）。私たちはこれらを全て、イエス・キリストの故に、神から、恵みとして頂くのである。

神の義とは、正しい審判者としての「神の義」ではない。神が御子において、私たちに与えて下さる「義」を指す。すなわち、私たちを断罪する義ではなく、御子が代わりに断罪されることで、完全に罪を償い、赦しと祝福を与えて下さるという「神の義」である。

このような驚くべき「神の義」が、福音には啓示されている。そして、この福音に依り頼む信仰は、最初から最後まで、**信仰**のみによって実現するのである。自分の力に頼らず、神に依り頼むあり方、神が与えて下さるものをそのまま頂く素直さが、信仰である。

「正しい者は信仰によって生きる」は、ハバクク2章4節からの引用で、旧約の信仰も新約の信仰も本質的に同じものであることを示している。（袴田清子）

《参照聖句》 ローマの信徒への手紙3：21～24、5：1、8：15、17。

《教理問答》 ウェストミンスター少教理問答：問33～38、ハイデルベルク信仰問答：問56～61、子どもと親のカテキズム：36問、ジュネーブ信仰問答：119問

10月13日 ローマの信徒への手紙1章16～17節

【説教展開例】

福音を恥としない

◇..... 単元のねらい◇

福音はしるしでも、知恵でもないが、全ての人間を救うことのできる神の力である。福音の中に神の義が啓示されていることを確認し、救い主、イエス・キリストへの信仰に立つように導く。

「憐れみと恵みに満ちた神の義」

パウロは、イエスさまが真の救い主であると知り、固い確信をもっていました。そして、世界中のあちこちで、イエスさまについて説明し、人々をイエスさまへの信仰に導こうとしていました。アテネという学問・芸術・文化の大都市にも行きました。また、コリントという商業と文化の町にも行って、イエスさまのことを伝えました。そして、世界の中心地であるローマにも行くようにしていました。パウロは、イエスさまが十字架にお掛かりになり、死んで、よみがえられ、この御方が神からの救い主だ、という話を、何度も丁寧に説明しました。しかし、聞いた多くの人たちは、パウロの話を、信じようとせず、むしろ馬鹿にしたのです。

パウロも、本当にかっかりすることがあったようです。しかし、パウロは、はっきりと語っています、「わたしは福音を恥としない」。私たちもお友だちに、「イエスさまを信じて、教会に行っている」と言って、馬鹿にされたことがあるかも知れませんね。しかし、パウロは、決して福音を恥ともしませんでした。それは、「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だ」と、はっきりと知り、確信していたからです。

福音とはどういうことを指しているのでしょうか。福音とは、神の御子であられるイエスさまが、私たちの罪の代わりに十字

架に掛けられ、死んで下さり、よみがえられたことを指します。そして、イエスさまによって、私たちの全ての罪が赦され、永遠の命の祝福に受け入れて頂けるようになったということを福音と言います。イエスさまがご自分を奉げて成し遂げて下さった、こんな素晴らしい、驚くべき救いを、パウロは恥じませんでした。福音は、神の御子イエスさまが天から降り、ご自分によって切り開いて下さった救いの道なのです。「ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じるすべての人に救いをもたらす、神の力だからです」と書かれています。つまり、福音は、国や民族を超えて、どの国の人でも救うことが出来るということです。

それでは、救いとはいったいどういうことを指しているのでしょうか。救いとは、罪の支配から解放され、神さまの支配に入れられることを指します。イエスさまによって、罪人の私たちが「あなたには罪はありません」と言われ、全ての罪が赦されることです。イエスさまを信じると、神さまからの新しい霊的な命が与えられます。そして、心が罪の力から解放され、神さまを愛する者に変えられます。神さまの目に、イエスさまを通して「正しい人」と認められます。イエスさまが、律法を完全に成し遂げて下さったので、私たちは、律法の呪いと支配から解放された者となります。永遠の滅びから救われ、永遠の神の国に入れ

られます。イエスさまの栄光の体と同じように変えられ、イエスさまと共に永遠に神さまの御国で生きるようにされる、これが救いです。

なぜ、イエスさまには、私たちを救うことが出来るのでしょうか。イエスさまは、神さまで、神さまの一切の恵みと力、完全な神さまの御性質と知恵と義と聖が備わっているからです。それだけではなく、私たちを救おうとされた、父なる神さまの御心に完全に従い通し、私たちの全ての罪を背負って、罪のための呪いと罰を受け、死なれましたが、その完全な服従の故に、父なる神さまからよみがえらせられ、更に高く上げられたからです。だから、たった一度の十字架の死と、そこからの復活によって、私たちの罪を完全に償って余りあるような、救いの力があるのです。これが神さまの力です。

イエスさまの十字架の御業によって、私たちは、神さまから完全な罪の赦しを頂き、神さまと仲直りでき、神さまとの間に平和があり、神さまのことを「天のお父さま」と呼んで、何でもお願いできる、神さまの子どもにされました。神さまの子どもですので、イエスさまと共に全てのものの所有者、そして永遠の神の国を引き継ぐ相続者とされているのです。これらをすべて、イエスさまを通して、私たちは神さまから、恵みとして頂くのです。このように、「福音は信じる者すべてに救いをもたらす神の力なのです」。

「福音には、神の義が啓示されている」とも記されています。ここでの「神の義」は、正しく裁くお方という意味の、聖なる御性質のことを言っているではありません。

イエスさまが身代わりに裁かれて下さり、罪を償うという方法で、私たちにプレゼントされている「神の義」のことを言っています。神さまから私たちに与えられる憐れみと恵みに満ちた「神の義」のことです。

私たちは、神さまに感謝し、賛美し、その恵み深さと憐れみに、心から依り頼むことが大切です。神さまとの関係は、最初から最後まで、神さまへの信仰によって実現します。信仰とは、自分の力に頼らず、神さまに依り頼むことです。神さまが「あげましょう」と言われるなら、「はいそうですか、有難うございます」と言って、そのまま頂く素直さが、信仰です。神さまはそのような信仰を、私たちに求めておられます。このように、永遠まで続く、神さまの歩みは、信仰に始まり、最後まで神さまへの信仰によって実現するのです。

救いは全て、神さまの力によることです。私たちは、この救いに関して、全てを神さまに負っています。神さまが、私たちを愛して、御自身の御子であるイエスさまを十字架に掛けるという方法で、私たちを救って下さったことによります。救いは全て、神さまのご計画され、神さまが実行され、成し遂げて下さったことだからです。イエスさまの内に、神さまの恵み、神さまの力、そして救いを成し遂げる方法、全てが備わっているのです。全ては三位一体の神さまのおかげなのです。

このように、福音は、神さまからの素晴らしい知らせなのです。イエスさまの福音は、信じるすべての者に救いをもたらす、神の力です。主イエスさまをほめたたえ、神さまへの信仰に生きましょう。

(袴田清子)

《今週の暗唱聖句》

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。 (ローマの信徒への手紙 1章 16節)

10月13日 ローマの信徒への手紙1章16～17節

【幼稚科】

イエスさまは、すばらしい！

〈展開例〉

パウロは、世界のあちこちで、イエスさまの話をしました。

「イエスさまが十字架で罰を受けて死んだのは、私たちの罪の身代わりでした。でも、3日目によみがえられた本当の神さま、私たちの救い主です！ イエスさまを信じるなら、神さまの子どもになれるのです」。

でも、パウロの話信じないで、ばかにする人たちも大勢いました。

ここに、葡萄があります。「それはリンゴだよ」とか、「それはバナナだよ」と言う人がいても、やっぱり、これは葡萄です

ね。

同じように、「イエスさまは救い主じゃないよ」とか、「イエスさまの復活は、夢だったんじゃないの？」と言う人がいても、やっぱりイエスさまは救い主です。

復活したイエスさまの手には、十字架の釘の跡がありました。夢ではありません。イエスさまは、信じるすべての人の救い主なのです。

「天のお父さま、イエスさまを信じて、神さまの子どもにして下さってありがとうございます」と素直に感謝するとき、神さまはとても喜んでくださいます。

〈体験レッスン〉素直に受け取ってみよう

用意するもの：季節の果物、ティッシュ

季節の果物（たとえば葡萄など、すぐに配れるもの）を用意し、上記のようにお話で用いる。

お話が終わったら、

「これは甘くて、とても美味しい葡萄です。欲しい人にあげます！ 食べたい人は、手を上げてくださいね」と呼びかける。

もらったら、「ありがとう」と言うように導き、葡萄を数粒ずつ配る。

食べながら、

「遠慮しないで、もらってよかったね」

「うれしいね。神さま、ありがとう！」など語りかけ、救いを素直に受け取る喜びを疑似体験する。

10月13日 ローマの信徒への手紙1章16～17節

【小学科上級・中学科】

福音を恥としない

1. ローマ1：8～15を読みましょう。

①パウロが神に祈り願っていることは何ですか？

②ローマの信徒たちのところに行きたいのはなぜですか？

③パウロの果たすべき責任とは、何ですか？

2. ローマ1：16～17を読みましょう。

①「恥」「恥ずかしい」という気持ちは、どんな時に起こりますか？

②福音とは何ですか？

③福音は、何を通して実現しますか？

④あなた自身にも、「救いをもたらす神の力」が働いておられることを感じますか？
それはどんな時ですか？

10月20日 ローマの信徒への手紙2章1～16節

【解説と黙想】

神の公平な裁き

○「あなた」とは誰か

ここでパウロが取り上げている「あなた」とは、ユダヤ人と名乗り、律法を教える立場にいた人です(17節以降参照)。この人は、自らが神の裁きの執行者であるかのように振る舞い、律法によって他人を裁いていました。一方自らに対しては、自分がユダヤ人であることを根拠に神の憐みと赦しが豊かであることを信じ、それゆえに自らを正しい者と理解して悔い改めることをしませんでした。他人の罪には敏感でしたが、自らの罪に対しては鈍感であったのです。

○律法と神の裁き

律法はもともとモーセをとおして神の民に与えられました。それは神に救われた選びの民が、主なる神を畏れて生きるためでした(申命記31章12,13節)。神を畏れるとは、神を重んじ神に従って生きることです。すなわち、主なる神を自らの神として生きることです。ここに律法の目的があります。この律法に対する行いにしたがって、神は報いをお与えになるのです(6節)。これは行いによる救いを言っているのではありません。神の恵みによって救われた者に相応しい行いがあるということです。この行いに基づいて、神は裁きを行われるのです。この裁きにおいて、ユダヤ人と異邦人で区別がないことをパウロは強調します。律法を持たない異邦人であっても、律法の命じるところを自然に行えば、自分自身が律法なのであり、その行いは神の裁きにおいて意味を持つのです(14,15節)。

○神が求める行いとは

律法をとおして神が求めておられる行いとはなんのでしょうか。それは悔い改めて、心を改めることです。そのために神は、豊かな慈愛と寛容と忍耐を注がれるのです(4節)。神は人を救うために、慈愛と寛容と忍耐をもって人の罪を忍ばれたのです。キリストによる罪の贖いが、これを示しています。自らがこのように救われたのなら、神が自分の罪を忍ばれたように他人の罪を忍ぶのが相応しいと言えます。それゆえに、愛は律法を全うするのです(13章10節)。神はキリストをとおして裁かれる(16節)のであり、皆がキリストによる罪の贖いに頼るほかありません。したがって、キリストに罪赦された者として、なにを行うかが問われています。もし罪赦された者でありながら他の人の罪を断罪するならば、その行いに基づいて神は正しくお裁きになるのです。

○悔い改めと愛の道へ

わたしたちも罪人であり、罪赦された者です。しかしそれは、罪がなくなり正しい者となったことを意味しません。罪赦されたわたしたちが神の裁きの執行者であるかのように他人の罪を裁くならば、それは赦されたはずの自分の罪を裁くことになります。もし、神の豊かな慈愛と寛容と忍耐によって罪赦されたことに感謝し、悔い改めて隣人を愛するならば、神の裁きはわたしたちの罪を断罪するものではなく、罪の赦しと無罪を宣言する喜びのときとなるのです。(三輪 誠)

《参照聖句》 申命記31章9～13節、マタイ5章17節、ローマ13章10節
《教理問答》 ハイデルベルク信仰問答問3～5、126

10月20日 ローマの信徒への手紙2章1～16節

【説教展開例】

神の公平な裁き

◇..... 単元のねらい◇

わたしたちは、キリストの贖いによって救われました。そのため、教会生活はすべてが恵みです。しかし、ときとして他の人を裁く思いになることがあります。神の公平な裁きを学ぶことをとおして、わたしたちが罪赦されて救われた喜びを思い起こし、そのなかでどのような歩みへと招かれているかを考えます。

「神さまが喜ばれる行い」

今日は「神さまの裁き」について考えてみましょう。神さまは正しいお方です。そして神さまの裁きは公平です。公平とは、自分の好き嫌いによって、ある人を特別大切にしたり、特別酷く扱ったりしないということです。神さまが公平なお方であるということが、今日の御言葉においては「神は人を分け隔てなさいません」という言葉によって示されています。

ところでみんなは、何かスポーツをしたことがあるでしょうか。野球にしてもサッカーにしてもテニスにしても、スポーツの試合をするときには審判がいます。審判が公平じゃなかったら、どうでしょう。たとえば審判が「こっちのチームにいるあの子は自分と仲がいいから、反則しても見逃そう」とか、「あっちのチームには嫌いな子がいるから厳しくしよう」と考えていては、試合は成り立ちませんし全然楽しくありません。審判は公平であることがとても大切です。

さて、今わたしたちは教会に来ています。神さまは、教会に来ているわたしたちを愛してくださっています。このように神さまに愛されたわたしたちにも、わたしたちを裁かれる審判がいます。それが神さまです。神さまは、それぞれの行いによって正しく公平に裁かれます。裁きといっても、これは救われるか滅びるかの裁きではありません。なぜなら、イエスさまを信じたみんなはもう罪赦されて、神さまに愛されている

からです。ただ、神さまから愛をいただいて罪赦されたわたしたちが、その愛をうけてどう生きていくかを、神さまはちゃんと見ておられるのです。

では神さまは、どのような行いを喜んでくださるのでしょうか。それを示しているのが、律法です。律法とは、神さまが御自分の民にお与えになった規則です。神さまに愛された人々のルールブックと言ってもよいでしょう。律法には、神さまが救われた人々に対して、「こんな風に生きてほしい」という神さまの思いが詰まっています。この律法に示されている神さまの思いをちゃんと受けとめて生きているかを、審判である神さまは見ておられるのです。

さて、今日の御言葉はパウロがローマ教会に送った手紙です。ここにはローマ教会にいた、ある人のことについて書かれています。この人は、神さまのことが大好きでした。そして神さまが自分の罪を赦してくださったことを、とても感謝していました。それだけではなく、神さまが与えてくださった律法のことをよく勉強していました。そして、他の人に律法のことを教えることもしていました。ローマ教会のなかでも、特にまじめに神さまに従おうと努力していた人だったと思います。そんな彼が教会の中をみたときに、そこには律法に書いてあることとは違うことを行う兄弟姉妹がいました。そんな様子を見ていたこの人は、

心が痛くなりました。この人は神さまが大好きだったので、神さまを悲しませるようなことをする兄弟姉妹が気になって仕方ありませんでした。そしてついにこの人は、自分が神さまの代わりになって審判をし始めたのです。

「その君、それは律法違反だよ」

「そのあなた、律法にはこう書いてあるでしょ。それは罪だよ」

こんな風にこの人は、自分が神さまの代わりになって目についた兄弟姉妹の行動を責めて、裁いていたのです。

ところで神さまの代わりに審判をしているこの人も、もともとは神さまに罪を赦してもらった人のはずです。この人だって罪がありますから、神さまを悲しませることを当然していました。でもこの人は、「自分は神さまをこんなにも大好きで、神さまのためにいろいろとしているから、自分の罪は赦されて当然だ」と思っていました。その一方で、他の兄弟姉妹が律法を破っているのを見たら「それは罪だ」と厳しく責めていたのです。神さまが大好きだったはずのこの人は、いつの間にか神さまを横において自分が神さまであるかのような行動をしてしまったのです。この人のこの思いや行いを見て、公平な審判である神さまはどう思われるでしょうか。怒るに違いないと、この手紙を書いたパウロは警告しています。

イエスさまに救われたわたしたちに対して、神さまはどんな風に生きてほしいと願っておられるのでしょうか。律法をとおして、神さまはわたしたちにどのような行いをしてほしいと思っておられるのでしょうか。ローマの信徒への手紙を読み進めていくと、こんな言葉が書かれています。

「人を愛する者は、律法を全うしているのです」（ローマ13章8節 b）

律法をとおして神さまがわたしたちに求めておられることは、愛することです。愛

するというのが、イエスさまに救われたわたしたちのルールなのです。誰よりもイエスさまが、わたしたちを愛してくださったからです。イエスさまがわたしを愛してくれたように、他の人を愛してほしい。イエスさまがわたしの罪を赦してくださったように、他の人を赦してほしい。この神さまの願いにしたがった愛の行いをするなら、ユダヤ人だろうと異邦人だろうと日本人だろうと関係なく、神さまは喜んでくださるのです。

教会にはいろいろなお友だちがいます。毎週礼拝に来ているお友だちもいれば、たまにしか来られないお友だちもいます。教会のためにいろいろな奉仕をしているお友だちもいれば、あまり奉仕ができないお友だちもいるでしょう。礼拝中にちゃんとお話を聞いているお友だちもいれば、全然お話を聞いているお友だちも見えないお友だちもいるかもしれません。そうすると、自分よりも不真面目に見えるお友だちが気になってしまふことがあると思います。なんであの子は教会に来ないのか。なんであの子は奉仕しないのか。なんであの子は先生の話聞かないのか。そんな風に思うことが、あるかもしれません。

そんなときにこそ、イエスさまはわたしのために死んでくださり、わたしの罪を赦してくださったことを思い起こしてほしいのです。そしてイエスさまはその子のためにも死んでくださり、その子の罪も赦してくださったことを思い起こしてほしいのです。そして、その子をもっと神さまのことを好きになることができるように、何かできることがあればぜひしてみてください。小さなことでいいのです。公平な審判である神さまは、この行いをちゃんと見てくださいます。みんながお友だちのためにするその小さな行いを、神さまは誰よりも喜んでくださるのです。 （三輪 誠）

《今週の暗唱聖句》

人を愛する者は、律法を全うしているのです。（ローマの信徒への手紙 13章8節 b）

10月20日 ローマの信徒への手紙2章1～16節

【幼稚科】

神さまは愛です

〈展開例〉

イエスさまは、私たちの代わりに、十字架で罰を受けて下さいました。私たちのことが大好きだからです。私たちを愛しておられるからです。

神さまが私たちに願っておられることは、何でしょうか？ 立派になること、正

しくなることでしょうか？

神さまは、私たちが互いに愛し合うこと、ゆるし合うことを願っておられます。イエスさまが私たちを愛して下さったから、イエスさまが私たちをゆるして下さったからです。

〈手紙を送ろうⅡ〉

材料：封筒、画用紙、色鉛筆など。

準備：封筒に入る大きさの画用紙を、人数分、用意する。

画用紙を配り、病気のお友だちや教会を休みがちなお友だち宛に、絵やメッセージを書く。

封筒に入れて、皆でとりなしの祈りを捧げる。

10月20日 ローマの信徒への手紙2章1～16節

【小学科上級・中学科】

神の公平な裁き

1. ローマ2：1～16を読みましょう。

①ここでパウロが語りかけている「あなた」とは、どんな人たちのことですか？

②人を裁く者に対して、神はどうなさいますか？

③永遠の命をいただくのは、どんな人ですか？

④申命記31：12～13も読みましょう。律法はユダヤ人だけのものですか？ 律法は何のために与えられましたか？

⑤悪を行う者、善を行う者、それぞれに与えられるものは何ですか？ それは、誰の働きですか？

⑥義とされるのは、どんな人ですか？

⑦もし律法を知らなかったら、それを行うことはできませんか？

10月27日 詩編46編2～4節

【解説と黙想】

宗教改革の実り

毎年10月の最終日曜日は宗教改革記念日とされているので、宗教改革の実りを覚える時としたい。宗教改革というのは、神中心の信仰と神学と教会の確立を祈りつつ目指した運動であった。それはまずは教理的な面が強調される。聖書が本当に教えている救いとは、信仰とは何か。そして聖書が示すキリストの教会、その本来の姿に立ち戻ろうという運動が広がっていった。

ただ、宗教改革は教理の改革というだけではない。それは教会の改革であり、信仰生活の改革でもあった。特に教会改革の具体的な動きは、礼拝の改革において始められた。

宗教改革の実りとして、私たちが直接感じられるものに、礼拝における会衆による讃美歌の使用がある。ルターは、聖書の朗読と説教が礼拝に欠くことができないものであるとしつつ、それを支える詩編や、会衆が応答する祈りや歌によって礼拝全体が構成されるとした。そのようにしてローマ・カトリックとは違う、プロテスタント教会の礼拝の形が整えられていった。

讃美歌267番は、詩編の御言葉をもとにルターが作詞した賛美歌である。「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦」(詩編46編2節)、ルターはこの御言葉に支えられ、これにすがって生きて、この詩編に基づいた賛美歌を作詞した。ルターもまた弱さを抱えた一人の人間であった。教会

の改革もすべて上手くいったわけではない。多くの支持と同時に、彼に対する非難や攻撃も多くあった。またルター自身も今で言う「うつ傾向」におちいることがあったようである。また当時はペストの流行などもあり、それこそ死を身近に感じざるを得ない、そういう状況だった。その中でルターはこの賛美歌を作った。この賛美歌が各地で印刷されるようになると、あるところでは「慰めの歌」という表題が付けられたそうである。ルターにとって詩編の御言葉を基礎として、信仰において自らを慰め、立ち上がらせるそういう賛美歌だったのであろう。

もちろん、賛美歌は御言葉そのものではない。しかし、御言葉と信仰に基づいて作られた賛美歌、それを私たちが歌うとき、それは私たちに御言葉を教え、信仰を教え、そして、私たち自身の魂を慰め、励ますものとなる。それを私たちは礼拝で共に歌う。それこそが神の民の礼拝である。宗教改革の実りはそこにあらわれているのである。

宗教改革について学ぶとき、私たちは単に昔の知識を詰め込むのではない。今の私たちの信仰生活を支えている事柄のうちの少なくないものが宗教改革において始まり、今に受け継がれているのだということを教えられ、その意義を知り、より信仰生活を豊かなものとしていくのである。

(松田基教)

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」 問46

10月27日 詩編46編2～4節

【説教展開例】

宗教改革の実り

◇..... 単元のねらい◇

宗教改革記念日を覚え、宗教改革の実りを覚える。現在の私たちの信仰生活を支えているものが宗教改革において始まり、今に受け継がれているのだということ、とくに主日毎の礼拝にそれがあらわれていることを知ってもらう。

「神はわたしたちの岩」

10月31日は何の日か知っていますか。世間ではハロウィンかもしれませんが、私たちの教会では違います。宗教改革記念日と言って、16世紀におこった宗教改革という出来事を記念する日です。では、どうしてその出来事を記念するのでしょうか。例えば、私たちの教会の名前には「改革派」という言葉がついていますね。この「改革派」の「改革」というのは「宗教改革」の「改革」のことなのです。あるいは、私たちの教会のことをプロテスタント教会と呼ぶことがあります。この「プロテスタント教会」が始まったのが宗教改革という出来事なのです。このように宗教改革というのは、私たちの教会ととても関係が深い出来事なのです。ですから、毎年、私たちの教会では宗教改革記念日の前の日曜日には記念の礼拝をささげたりするのです。

さて、今から500年くらい前、16世紀の頃の西ヨーロッパでは、キリスト教会は、ローマ・カトリック教会という名前の教会だけが認められていました。でも、そのローマ・カトリック教会にはいろいろとおかしなことがありました。聖書に書いていないこと、聖書が教えていないことが神さまの教えとして教えられて、信じるようにとされてしまっていたのです。しかし、そのことに疑問をもった人たちが聖書をよく読んで調べて、「やっぱりローマ・カトリック教会のやっていること、教えていることはおかしい！」と声をあげたのが宗教改革の

始まりです。その中でも最初に声をあげて、戦ったのがドイツのマルティン・ルターという人でした。ルターさんは、ローマ・カトリック教会が教えていることでも、聖書に書いていないことであれば、それは間違いだと主張しました。そして、聖書の本当の教えを、聖書に書いてあることに基づいて教えたのです。

その後、ルターさんに賛成する人たちがだんだん増えていき、ローマ・カトリック教会から離れてプロテスタント教会と呼ばれる教会を作っていました。私たちの改革派教会というのもその中の一つなのです。

ルターさんはただ聖書の教えを教えるだけではなくて、聖書の教えに基づいて、教会の間違っているところをいろいろと変えていこうとしました。教会の改革に取り組んだのです。ルターさんが教会の改革で取り組んだことはいくつもあります。その中の一つは、日曜日の礼拝の改革です。日曜日の礼拝そのものが、聖書の教える、神さまが本当に喜ばれる礼拝となるために、ルターさんはいろいろと変えていきました。

例えば、皆さんは礼拝の時にみんなと一緒に賛美歌を歌いますね。日曜学校の礼拝でも、大人の人たちと一緒に礼拝でも、礼拝に集まっている人みんなと一緒に賛美歌を歌います。でも実は宗教改革以前のローマ・カトリック教会の礼拝では、みんなと一緒に賛美歌を歌うなんてことはしていま

せんでした。聖歌隊と呼ばれる特別に歌の訓練を受けた人たちだけが歌って、あとの人はそれを聴くだけでした。歌っている歌もとても難しく、普通の人には歌いたくても歌えないようなものだったのです。

でもルターさんは、礼拝での賛美歌というのは、礼拝に集まっているみんなが一緒に歌うことが大切なのだ、聖書が教えている、神さまが喜ばれる賛美というのは、一部の上手な人たちだけのものではなくて、下手でも声が小さくても、みんなと一緒に心から歌うものなのだ」と主張したのです。ですから、私たちの教会もそうですが、プロテスタント教会では、礼拝ではたいいみんなと一緒に賛美歌を歌うのです。

ルターさんはそのためにみんなが歌える賛美歌をいろいろ作りました。できるだけ聖書の言葉、聖書の教えにそった歌詞で、みんなが歌える曲の賛美歌をいくつも作ったのです。讃美歌267番「かみはわがやぐら」という賛美歌を知っていますか。みんなも礼拝で聴いたり、歌ったりしたことがあるかもしれませんね。この賛美歌は旧約聖書の詩編の言葉をもとにルターさんが作詞した賛美歌です。詩編46編の1節の言葉、「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦」、ルターさんはこの聖書の言葉が大好きだったみたいです。だから、この詩編の言葉に基づいた賛美歌を作りました。

当時のローマ・カトリック教会というのは、とつても大きな組織です。なにしろ西ヨーロッパに住む人みんながその教会のメンバーなのです。そんなローマ・カトリック教会の教えが間違っていると主張することはとても勇気がいることでした。そういう意味では、ルターさんは勇気のあるとても立派な人物でした。でも、ルターさんもまた私たちと同じように弱さを抱えた一人の人間でした。教会の改革も一から十まですべて上手くいったわけではありません。賛成してくれる人も多くいましたが、同じくらい多くの方がルターさんに対して

悪口を言ったり、攻撃したりしました。ルターさんは、そのことで落ち込んだりして、何日も自分の部屋に引きこもるなんてこともあったようです。また当時はペストという恐ろしい病気が流行していて、それこそいつ死んでもおかしくないような状況でした。

そういう状況の中でルターさんは先ほどの讃美歌「かみはわがやぐら」を作ったのです。この賛美歌が印刷されて各地で配られるようになると、あるところでは「慰めの歌」というタイトルが付けられたそうです。ルターさんにとって、大好きな聖書の言葉を賛美歌とすることで、礼拝でみんなが歌える賛美歌というだけではなくて、自分自身が慰められ、立ち上がる勇気をもたらえるという賛美歌になったのです。

みんなも自分が好きな賛美歌、歌うと元気になるような賛美歌がありますか。もちろん、賛美歌は聖書の言葉そのものではありません。でも、聖書の言葉と信仰に基づいて作られた賛美歌、それを私たちが歌うとき、それが私たちに聖書の言葉や教えを教えて、神さまを信じる信仰を教え、そして、私たち自身を慰め、励ます、そういうものとなるのです。それを私たちは礼拝で共に歌う、歌の上手な人もそうでない人も、声の大きな人も小さい人も、一緒に歌う。それこそが本当の教会の礼拝なのです。宗教改革からそのような礼拝が始まっているということを知ってほしいと思います。

宗教改革というのは、単に昔に起こった出来事、歴史上の出来事というだけではありません。今の私たちの教会や礼拝や信仰生活を支えている、いくつもの事柄の中で、けっこう大事なことが、宗教改革から始まって、今に受け継がれているのだということを知ってください。そして、そこに神さまの導きと恵みがあることを覚え、感謝しましょう。(松田基教)

《今週の暗唱聖句》

神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助け
てくださる。(詩編46編2節)

10月27日 詩編46編2～4節

【幼稚科】

宗教改革を記念して

〈展開例〉

さてクイズです。10月31日は、何の日でしょう？ ハロウィンではありません。

答。10月31日は宗教改革記念日です。

「改革」というのは、変えることです。

ずっと昔、聖書が言っている通りに教会を変えようと、一生懸命、働いた人たちがいました。ルターやカルヴァンです。

私たちは毎週、礼拝で賛美しますが、昔

は聖歌隊の人しか歌えませんでした。

聖書を持っている人も、ほんの少ししかいなかったの、皆は聞くことしかできませんでした。宗教改革のおかげで、今のような礼拝ができるようになったのです。

聖書が言っているように変えることは、昔の人たちだけでなく、私たちが今、することでもあるのです。

〈変えてみよう〉

幼稚科のお部屋を見回して、

「こんな風に変えたら、神さまはきっと喜んで下さると思う」事について話し合い、やってみる。

〈例〉

- ①ぜひ皆に読んでほしい絵本を、手に取りやすいように見える所に置く。
- ②来月の出席シール表を作って貼る。
- ③折紙の花を飾る。
- ④子ども用トラクトを置く。

子どもたちのアイデアを引き出して、翌週の分級で、皆で行うようにしても楽しい。

10月27日 詩編46編2～4節

【小学科上級・中学科】

宗教改革の実り

1. 詩編46：1～4を読みましょう。

①わたしたちに与えられる苦難には、どんなものがありますか？ あなたにとっての苦難や恐れるものは、何ですか？

②歴史の中で、キリスト者にはどのような苦難がありましたか？

③苦難の中で、神はどのようなお方ですか？

2. 詩編46：5～12を読みましょう。

①「砦の塔」とは、神のどのようなお働きのことを示していますか？

②戦いの中で、すべての民が騒ぎ国々が揺らぐ時、主は何を成し遂げられますか？

③あなたは、苦難の中でも恐れず、神をあがめる人を知っていますか？

④この詩編を通して感じたことを、話し合ってみましょう。

11月3日 ローマの信徒への手紙3章21～31節

【解説と黙想】

信仰による義

21節。「律法」という言葉は「モーセ五書」という意味でもある。そこから「律法と預言者」つまり「モーセ五書と預言書」という並べ方で「聖書全体」をいう言い方につながった。「聖書全体によって立証されて、神の義が示された」。しかしその「神の義・神の正しさ」とは、私たちがモーセ五書に命じられている律法の「行い」ができていのかどうかには「関係なく」示された。「律法」という言葉は27節でも「法則」と訳されて登場する。「律法」「モーセ五書」「法則」どれも同じ単語を一貫させてパウロは語っている。

22節。神から「正しい」と見ていただけるということには「行い」ができていない人かできていない人かという「差別」はない。生まれたときから神の民である人か、初めは神を知らない人だったかの差別もない。

23節。そんな差別以前に「人は皆」必ず罪人である。本来「神の栄光・輝き・すばらしさ」をいただけない人であるということ。

24節。しかしキリスト・イエスの十字架が私たち一人ひとりの罪を、神に対してつぐなってくださった。だから私たちは、どんな犠牲も代金も払うこともなしに「正しい」人とされている。それはキリストが一人で犠牲になってくださったからである。私たちが神から正しい人だと思っていただけのためには、そのキリストを信じるだけでよい。律法をきちんと行えているかどうか

は関係ない。私たちが正しいとするためにキリストを十字架につけ、それによって私たちの罪を全部消してくださったところに神の恵みがある。

25節前半。十字架の上で流されたキリストの血は、旧約聖書が告げている「罪を償う供え物」にほかならない。旧約聖書全体が教えているこの「罪を償う供え物」の効力は、キリストを「信じる人」に与えられる。

25節後半から26節にかけての文はこの翻訳のままでは困難。「今まで人が犯した罪を見逃して」きたことは神の義ではない。原文は「今まで人が犯した罪を見逃して、神は忍耐してこられた」というつながり。その今までの神の忍耐は「今このときに神の義を示されるため」だという意味。そのとき、神の正しさが明らかになると同時に、イエスを信じる者の正しさも定められた。26節。以上のことが十字架に込められた意味だから、自分の行いに基づいて正しい人であろうとする人の誇りも十字架によって取り除かれた。

27節。「行いの法則」「信仰の法則」は前述のように「行いの律法」「信仰の律法」という言葉。キリストを信じることこそ、私たちに命を与える「律法」であるというニュアンス。このことが31節の、「信仰」は律法を無にするのではなく、それを「確立」することだという結語を導いた。

(赤石純也)

《参照聖句》 ガラテヤの信徒への手紙全体 (特に2章15節～3章)

《教理問答》 子どもカテキズム問23～28

11月3日 ローマの信徒への手紙3章21～31節

【説教展開例】

信仰による義

◇..... 単元のねらい◇

神は私たちを罪と悲惨から一方的に救われた。それはイエスさまの正しさを信仰により受け取ること。

「神の義 イエス・キリスト」

今日の聖書箇所の中には「義」とか「神の義」という言葉がたくさん出てきます。「義」とは「正しさ」のことです。では「神の義」「神の正しさ」とはなんのことを言っているのでしょうか？

21節「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリスト」とありますね。「神の義」とはイエス・キリストのこと、イエス・キリストに神さまの正しさが完全に表れているということです。「律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて」イエス・キリストが神の義として示された、と言われているのですが、それはこういうことです。一つには、私たちがモーセ五書に命じられている律法の「行い」ができているかどうかには「関係なく」イエス・キリストが神の義として示された、ということ。もう一つには、「律法と預言者」（モーセ五書と預言書）つまり、聖書全体にイエス・キリストのことが書かれているということ、イエス・キリストが神の義・神の正しさそのものであることは聖書にちゃんと書いてあって、確かな証拠がある、ということです。

このイエス・キリストを信じるなら、信

じる人すべてに「神の義」が与えられる、そこには何の差別もない、と言われていません。神さまから「正しい」と言ってもらえるようなよい行いができている人かできていない人か、という差別もないし、生まれたときから神の民である人か、初めは神を知らない人だったかの差別もありません。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっている」とも言われています。だから、みんな同じなのです。

そういう罪人で、神さまの前に正しくない私たちが、イエス・キリストを信じるなら、その人のことを神さまは、罪人だと思いつけるのではなく、「正しい」と見てくださる、というのです。それは、イエス・キリストが十字架で私たち一人ひとりの罪を、神さまに対して償ってくださったからです。

旧約聖書には、罪を犯した人は、「罪を償う供え物」をささげなければならないということが書いてあります。本当は私たちが自分でささげなければならない供え物です。それをイエス・キリストが、十字架の上で血を流され、私たち全員のために「罪を償う供え物」をささげてくださった、ということです。

イエス・キリストが一人で犠牲になって

くださったから、私たちが自由の身になれるための身代金の全額をイエス・キリストが払ってくださったから、私たちは、このイエス・キリストを信じるだけで、もうどんな犠牲も代金も払わないで、無償で「正しい」人とされているのです。神さまは、私たちが「正しい」とするためにイエス・キリストを十字架につけ、それによって私たちの罪を全部消してくださったのです。ここに神の恵みがあります。

神さまはイエス・キリストの時が来るまで、人が犯した罪を見逃して忍耐してこられました。その時まで忍耐してこられたのは、今まで人が犯した罪を罪として十字架

で裁くことによって、神さまの正しさを示すためでした。十字架で血を流してくださったイエス・キリストによって、神さまの正しさが明らかになりました。そして、そのイエス・キリストを自分の救い主と信じる人たちを「正しい」としてくださったのです。

律法の行いによって、神さまに「正しい」としていただくのではなくて、イエス・キリストを信じることによって、神さまに「正しい」としていただくこと。これが私たちに命を与えてくれる新しい「律法」なのだ、とパウロは教えてくれたのです。

(赤石純也)

《今週の暗唱聖句》

しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです。なぜなら、律法の行いによっては、誰一人として義とされないからです。

(ガラテヤの信徒への手紙2章16節、聖書協会共同訳)

11月3日 ローマの信徒への手紙3章21～31節

【幼稚科】

信仰による義

〈ねらい〉

信仰による義の現実を、その存在で見事に証言してくれるのが幼稚科、幼児科の子らです。彼らは親によってイエスさまの教会に連れて来てもらう以外になにもできません。しかし、父なる神は、彼らをイエス・キリストのゆえに、契約の真実のゆえに義とし、神の子として受け入れてくださいます。教会は、言葉によってそれを宣言します。何よりお行いによって示します。つまり彼らに声をかけ、だっこし、遊び、彼らの居心地のよい環境を整えるのです。

ほめられることとしかられることを契機にして、神の義による救い、恵みを考えてみます。

〈展開例〉

今日は、

〇〇ちゃんは、お父さんやお母さんにほめられたことがありますか。しかられたことがありますか。どんなときにしかられたか思い出せますか。

- ①
- ②
- ③

どんな気持ちがありましたか。うれしくなりましたか。悲しくなりましたか。すなおにごめんなさいと言えましたか。

次に、ほめられたことがありますか。

- ①
- ②
- ③

そのとき、うれしかった？ またほめら

れたいとおもいますか？ どうしたらほめてもらえるのかな？

〇〇ちゃんは、良い子なのですね。すばらしいです。さて最後に、神さまから叱られることがありますか。ほめられたことがありますか？ どっちもないかな？

さて、ここが大切です。神さまとお父さんやお母さんは、ちがいますね。なぜなら神さまは、〇〇ちゃんのことを、ただいてくれるだけで、いつも「よしよし」と言って下さるお方だからです。〇〇ちゃんが褒められるようなよい事をしたからではありません。神さまは、〇〇ちゃんを神さまの子どもと受け入れてくださっているからです。たとえ〇〇ちゃんがどんなに叱られるようなことをしたときでも、神さまからはいつも「よしよし」と頭をなでられ、抱っこしてもらっているのです。

実は、先生も同じです。先生も、何も良いことをしていないのに、むしろ、叱られるようなことばかりをしているのに、「よしよし」と優しくされています。イエスさまが十字架についてくださったおかげで、天のお父さまの子どもとされているからです。うれしいね。いっしょに感謝しましょう。

〈やってみよう〉

牧師や大人の人たちに「だっこ」してもらいましょう。そして、「〇〇ちゃん、神さまは〇〇ちゃんのこと大好き。先生も〇〇ちゃんのこと大好き」と言ってもらいましょう。何人にしてもらえるかな。

11月3日 ローマの信徒への手紙3章21～31節

【小学科上級・中学科】

信仰による義

1. ローマ3：21～26を読みましょう。

①律法によって、私たちは義とされますか？

②旧約聖書の中で、「律法と預言者」は、何について証しているのですか？

③「神の義」は、何によって、どんな人に与えられますか？

④キリストの血による贖いは、何のためでしたか？

2. ローマ3：27～31を読みましょう。

①神が信仰によって義としてくださるのは、ユダヤ人だけですか？

②信仰によって義とされたら、律法は必要なくなりますか？

③信仰によって救われるなら、正しい行いをしようとするのは、意味がないのでしょうか？

11月10日 ローマの信徒への手紙8章18～39節

【解説と黙想】

神を愛する者たち

(黙想の手がかりとしての内容的解説)

ローマ書8章は、①霊による命(1～17節)、②将来の栄光(18～20節)、③神の愛(21～39節)(新共同訳聖書：表題)と三つに区分される。

第一の区分の最後で、わたしたちが、神の子(子ども)であることを証する方は、聖霊であり、この霊によって、神を「アッバ、父」呼び祈る者とされたことが教えられる(14～16節)。そして、聖霊は、わたしたちを、「神の相続人」「キリストと共同の相続人」(17節)としてくださると教える。

わたしたちが相続する分とは、十字架の死から復活・昇天されたキリスト・イエスの義による「命」(10節)、「“霊”(聖霊)の初穂」(23節)である。聖霊は、「わたしたち(人間)の霊(魂、息)と一緒にあって」神の子どもであることを証ししてくださる(16節)。

また、聖霊は、実生活において、「現在の苦しみ」と「将来わたしたちにあらわされるはずの栄光」(18節)と対比して告白されるように、「今この時を「忍耐して待ち望む」(25節)に、祈りに、わたしたちを導いておられる。

パウロはこの苦しみを「うめく」という言葉で言い表している。それは、被造物と共にある「うめき」であり、「神の子とされること(注：今もそうであるが、将来、神の子の特権を完全に知ること)、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます」と言う(23節)。

パウロは、すでにローマ書5章で、「不信

心な者」(6節)、「罪人であった」(8節)者、「(神の)敵であった」(10節)者に示された「神の愛」が「聖霊によって」「わたしたちの心に注がれている」(5節)ことを明らかにした。また、「苦難」と「忍耐」と「練達」と「希望」に至る、今や、わたしたちのために死んでくださった、「キリストを通して神と和解させていただいた」(11節)者の祈りの道を証している。

8章で、再び、このような聖霊の愛を注がれた者を、「神を愛する者たち」(28節)「神に選ばれた者たち」(33節)と呼び、神の救いのご計画(予定)において、御子の姿に似たものにしようとしていること、そして、目的が、御子を長子とする神の家族(見えない教会)の実現であることを伝える。

パウロは5章で伝えた確信を、「だれが……できますか」という問いをくり返して、神の選びの確かさと、十字架の死から復活され、昇天された、キリストの執り成しの恵み、そして、このキリストの愛のきずながどれほど堅固なものであるかを、訴える(31、32、34、35節)。

「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」(詩編44編23節参照)とは、キリストのために、主の贖われた者たちが、虐げられていることの証言。託された子どもたちの現状、教育現場、家庭等での隠れた痛みや傷に寄り添いつつ、祈り、備えたい。(宮武輝彦)

《参照聖句》 イザヤ53章7節、63章16節、ダニエル10章19節、コリント第二5章16～18節、エフェソ5章1節、フィリピ2章15、16節、ヨハネ第1章1節、ヨハネ黙示録19章5節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問1～5、8、15、16、32、36～39、47、55、67、86、89、ハイデルベルク信仰問答 問1、26～28、54～56、ウェストミンスター小教理問答 問34、100

11月10日 ローマの信徒への手紙8章18節～39節

【説教展開例】

神を愛する者たち

◇..... 単元のねらい◇

- 主の受難・復活・昇天、聖霊降臨の御業の中に、過去・現在・将来があることを信じる。
- 主の福音を伝える今日、苦難のただ中でも、忍耐と練達から、希望を生む、祈りに導く。
- 主は愛する子どもたちを決して欺かれない。主の真実を信じ、日々新たに生きよう。

「キリストに愛されている子どもたちの希望」

今日は、一週の初めの日、イエスさまが、十字架の死から三日目に復活された、日曜日ですね。

みなさんは、月曜日から土曜日に、学校で、イエスさまのことをお友だちに伝えたり、お祈りをしたりすることがありますか。また、お友だちに教会学校にさそったことはありますか。なんだか、少し、恥ずかしい気持ちになったりしないでしょうか。

この前の教会学校でも、「福音を恥としない」という、パウロさんの言葉を学びました。イエスさまのことを恥としないで、伝えるためには、わたしたち自身が、聖霊によって、変えられること、成長していくこと、が大切です。

パウロさんも、イエスさまを伝える人を殺していたのですが、イエスさまにすっかり変えられた人です。変えられて、今度は、死ぬことも恐れなくて、勇気をもって、イエスさまのことを伝える人になりました。

そのことを、神さまの恵みとお働きによること、また、イエスさまの十字架において、神さまがどんなにわたしたちを愛しておられるか、ということ、このローマの教会の人びとに宛てた手紙を書きながら、伝えようとしています。

先週学んだ、「信仰によって義」とされることも、イエスさまの愛によることですが、パウロさんは、その後の5章のところでこのように言っています。最初の1節から読みます。

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」(1, 2節)。

この平和というのは、神さまから愛されている者として、どんなときでも、神さまを信じることを一番にして祈る子どもにされた、ということです。それでは、パウロさんは、続いて、この神さまの愛についてどのように伝えているのでしょうか。3節「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということは。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」(3～5節)。

ここを読むと、パウロさんは、わたした

ちと同じように、毎日、色々なことをしながら、生活していたことがわかります。しかも、それは、イエスさまがくださった愛が心に注がれているから、どんなに苦しいときでも、神さまに祈りつつ、歩んでいると言うのです。

苦しみと希望の間に、「忍耐」と「練達」という言葉がありますが、これは、ちょうど、お習字をするときに、すぐに上手に書けなくても、くり返して、お手本をまねして書いているうちに、段々と上手になっていくように、いつも、イエスさまのようになりたいと思いながら、たとえ、お友だちの中で、一人だけ、教会学校に来ているような心細い気持ちをもったとしてもお友だちのために祈り続けているうちに、イエスさまのように、お友だちのために、良いことができるように変えられてくることです。それが、たとえ、教会学校に来ることでも、学校で、部活で、遊んでいるときに、良いことをするように変えられることも、イエスさまがいっしょにおられることです。

今日の暗唱聖句は、ダニエルさんの言葉です。ダニエルさんは、本当の神さまではなく、王さまを神さまとする国の大臣になった人です。

ダニエルさんは、その王宮で、朝、昼、晩と、三度、エルサレムの方に向かってお祈りをしていました。

ある時も、三週間も、人びとの罪のため、自分の罪のため、神さまにゆるしを乞い求めながら、お祈りをしていました。すると、神さまから遣わされたみ使い（天使）が現れて、ダニエルさんを勇気づけてくれました。

「愛されている者ダニエルよ、わたしが

お前（あなた）に語りようとする言葉をよく理解せよ、そして、立ち上がれ。わたしはこうしてお前（あなた）のところに遣わされて来たのだ」（ダニエル書10章11節）。

ダニエルは、神さまの言葉を聞いて、震えながらも、力を取り戻して、苦しみの中でも、神さまが希望を与えてくださることを信じました。

みなさん、祈りは希望です。それは、神さまが、わたしたちのすべてのことを知っておられるだけでなく、イエスさまの命を与えてくださったからです。

先に読んだパウロさんの手紙にも、こう書いてあります。「被造物だけでなく、“霊”（聖霊）の初穂（救われた命と神さまの愛）をいただけるわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです」（ローマ書8章23～25節）。

今、わたしたちは、大気汚染や、放射能や、いろいろな汚染のために、魚も、動物も、絶滅したり、汚染されたりしていることを聞いたことがあるでしょう。

人間の罪は、人間だけにとどまらないで、神さまが造られたもの全体におよんでいます。このような時に、パウロさんが待ち望んでいるのは、イエスさまが、十字架の死によって、取り戻してくださった、神さまとの平和が、完全に実現する日です。

それは、わたしたちの想像もできないようなすばらしい罪のない、きよい世界であ

り、いつまでも神さまのすばらしさがほめたたえられる救いの完成の日です。

イエスさまに愛され、イエスさまを信じる子どもたち、イエスさまにつながっているすべての人びとは、この日に、本当に、完全に「神の子とされる」のです。

ですから、パウロさんにとって、たとえ、今、どんなに苦しくても、また、神さまが造られたすべてのものと同じように、声にならないうめき声が心の奥、心の中にあっても、聖霊なる神さまが、わたしの心のうめき声を聞いておられることに信頼して、神さまの救いの約束を信じました。

「人を義（本当に正しい）としてくださるのは神なのです」（33節）とのみ言葉の

とおりに、わたしたちは、人がどう思うかでなくて、神さまが、わたしたちの心の悲しみも、痛みも、全部、知っておられること、それを、イエスさまの愛において、正しいことを認めてくださっていることを信じましょう。学校のお勉強や部活よりも、大事なことが、ここに 있습니다。そして、わたしたちの人生にとって、最も大事なことが、ここに 있습니다。それは、イエスさまの愛によって生きること、そして、神さまから愛されていることを、どんな時でも、信じて祈ることです。

「神さまの子どもとして、神さまと共に歩」（子どもと親のカテキズム問1）みましよう。（宮武輝彦）

《今週の暗唱聖句》

恐れることはない。愛されている者よ。平和を取り戻し、しっかりしなさい。

（ダニエル書10章19節）

11月10日 ローマの信徒への手紙8章18節～39節

【幼稚科】

神を愛する者たち

クイズ：聖句をおぼえよう！ ☆ ダニエル書 10：19

今日のおんしょう聖句を覚えているかな？

準備：このページのクイズの文字を大きく手書きして、人数分をコピーする。

☆ なんて書いてあるのか、暗号を解いて答えよう！

- | | |
|-------|-------|
| ① なれと | ② れるて |
| そはこ | も愛の |
| いるお | さよい |

* 読み方のヒント：次の順番で解読しよう。

① ↘ ⇄ ⇄ ⇄ ⇄ ↗ ◎ ↖ ↙

② ◎ ↙ ↖ ↗ ↘ ⇄ ⇄ ⇄ ⇄

- ③ 平ほろ和びをびほとろりほもろびどろほし、
びろしろっぴかろりほしびなろほさろびい。

* 読み方のヒント：「ほろび」を取り除く。

こたえ：3つの正しい文を書いて、声に出して言ってみましょう。

- ① _____
- ② _____
- ③ _____

11月10日 ローマの信徒への手紙8章18節～39節 【小学科上級・中学科】

神を愛する者たち

1. ローマ8：18～30を読みましょう。

①被造物は、今はどんな状態に置かれていますか？ 「被造物のうめき」について、気が付くことはありますか？

②被造物やわたしたちは、苦しんだままにしておかれるのですか？

③わたしたちが忍耐して待ち望むものは何ですか？

④わたしたちの言葉にならない祈りを執り成してくださるのは、どなたですか？

2. ローマ8：12、31～39を読みましょう。

①わたしたちに対する神の愛は、どこに最も表れていますか？

②わたしたちに敵対する人や、この世の多くの苦しみは、わたしたちをキリストの愛から引き離すことはできますか？ それはなぜですか？

③あなたは、自分が神さまに救われ、愛されていることを信じますか？

11月17日 コリントの信徒への手紙一 11章17～34節

【解説と黙想】

主の晩餐

私たちが生きる上で必要なものとして、まず食べ物や水、空気などが挙げられます。また事故に遭わないとか大病に罹らないことも必要でしょう。しかしそういう条件が整ってさえいれば、私たちは生きることが出来るか、と言えそうですではありません。今日一日を生きるだけであれば、それで良いかもしれません。ところが私たち人間には、将来を見通す力が与えられています。それは他の動物と比べて優れた点ですが、一方で、人間は将来に何も期待を抱けなくなれば生きる力が失われてしまうという面をも併せ持っているのです。

食べ物は私たちが生きて行く上で必要なものです。しかしそれだけではありません。食事は深い喜びを与えてくれるのです。一方、辛い時はいくらおいしい食事が提供されても味気なく感じるものです。私たちは、神さまに与えられた素晴らしい食事の時を楽しむことが出来ているのでしょうか。

聖書に記されているイスラエルの民の歴史の中で、最も苦しい経験の一つはエジプトでの奴隷生活です。その時イスラエルの民は、苦しんで食事を摂っていたと考えられます。神さまは、そのような民に対して憐れみを示して下さいました。エジプトから脱出する道を示して下さいました。その時神さまは、羊の血を家の鴨居に塗るようにとの不思議な指示と共に、その羊を食べなさいと命じられました。神さまは人を励ます時に、食事を摂る様にと命令なさつ

たのです。神さまの憐れみは食事と深く結びついていたのでした。

イエスさまの弟子たちにとって最も辛い経験は、愛するイエスさまが捕らえられ、十字架につけられる時でした。その最も辛い時を目前にして、イエスさまは聖餐式を制定なさいました。イエスさまは手にパンと杯を取って、こう言われました。「これは私の体。これは、私の血」。驚くべき言葉です。人間は、パンでも杯でもなく飲み食いされるために存在するものではありません。ましてイエスさまは人となられた神の子です。本来なら、触れることすら許されないはずの尊厳に満ちたお方です。しかしイエスさまはまるで食べることが出来るものとして、ご自身をお示しになるのです。

また聖餐式制定の場面で、イエスさまは杯を「これは私の血であって、契約の血である」と言われました。この杯を飲むことによって契約が結ばれると言われるのです。これは、エレミヤ書31章において約束されていた、神さまと人とが和解するという契約です。その契約が結ばれるためにイエスさまは、血を流す、命を差し出す、と言われるのです。この契約にあなた方が与るために、「取って食べなさい」と言われるのです。ここに私たちの希望の神秘が現わされています。聖餐式の喜びに生きる者は、普段の食事の時にも、神さまの恵みを深く覚える者です。 (常石召一)

《参照聖句》 マルコ14章22～25節、エレミヤ書31章31～34節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問53, 54、
ウエストミンスター小教理問答 問96, 97

11月17日 コリントの信徒への手紙一 11章17節～34節 【説教展開例】

主の晩餐

◇..... 単元のねらい◇

私たちが生きていくのは大変なことです。本当に辛くなると、神さまのことも、自分が愛されていることも分からなくなってしまうことがあります。そうした時こそ、神さまの前で自分はどのような存在なのかを見つめ直す必要があります。

「聖餐式の意味」

皆さんはどんなご飯が好きですか。この世には本当においしいものがいっぱいありますね。ただし食べ方には注意して下さい。好きなものばかり食べていたらどうしても栄養のバランスが偏ってしまいます。おいしいからといって甘いものや脂っこいものばかりを食べるのは健康によくありません。皆さんは今、どんどん成長する時期です。皆さんの体は神さまが与えて下さったものですから、それを大切にすることは、一人一人に与えられた責任です。ですからバランスを考えて食べること、そして食べるだけではなくて適度に体を動かすことが必要です。

神さまが食べ物を与えて下さるのは、皆さんが元気に成長するためだけではありません。私たちは何かをおいしく食べる時に、幸せを感じるのではないのでしょうか。そして「本当に神さまありがとうございます」という気持ちが湧いてくるのです。このように食事は、神さまを喜ぶためにも与えられているのです。けれども、いくらご馳走を食べてもおいしくないと感じることもあります。全然神さまに感謝の心が湧いてこないということも実はあるのです。嫌なことや辛いことがあって気持ちが落ち込んでいる時、心配でたまらないことがある時、食事は味気ないものになってしまいます。その時は神さまに感謝をする気持ちも薄くなってしまい

ます。それは私たちにとってとても悲しいことです。そして神さまにとっても悲しいことです。

さて、イエスさまのお弟子さんたちにとって、それまでで最も辛いことがありました。それはイエスさまの最後の食事の時でした。弟子たちは、今まで経験したことが無いような恐ろしい出来事が起こるといふ不安を感じていました。その席上で追い打ちをかけるように、イエスさまはこう言われました。「この中に自分を裏切る者がいる、その裏切りの時は近い、その者は生まれなかった方が良かった」。これは本当に恐ろしい言葉です。それを聞いて弟子たちは、ますます不安になりました。もしかしたら自分がイエスさまを裏切ってしまうかもしれない、と思ったのです。弟子たちはイエスさまのことが大好きでした。この方こそ信頼できる方だと信じて、イエスさまについて一緒に旅をしてきたのです。そのイエスさまに、私を裏切る者がこの中にいる、と言われたのです。そのような中での食事が楽しかったはずがありません。全くおいしいとは思えなかったでしょう。

しかしそのような中でイエスさまは、パンを手にとって、弟子たちに言われました。「これはあなたがたのためのわたしの体である」。また杯をとって言われました。「これはわたしの血、契約の血である」。イエ

スさまは、パンと杯を差し出して、「これはわたしたちだ。これを食べ、飲みなさい」と言われたのです。

ところでイエスさまは、私たち人間が食べたり、飲んだりすることが出来るようなお方でしょうか。人間は食べ物でも飲み物でもありません。ましてイエスさまは神さまの子です。人間であると同時に神さまなのです。そのようなお方を私たちが食べたり飲んだりして良いなどとはとても考えられません。しかしイエスさまは「私を食べ、飲みなさい」とおっしゃるのです。驚くべきことです。

イエスさまは、気落ちして本当に辛い気持ちでいる弟子たちを励まされたのです。そのために、パンと杯をご自身として差し出して、「これらを食べることによって、私を受け取って欲しい」と言われたのです。弟子たちはその時にはイエスさまがおっしゃる意味が分かりませんでした。後に分かる時が来ました。

イエスさまはこの後、十字架に架けられます。イエスさまは十字架に御自身の御体を差し出されたのです。その時に弟子たちは怖くなって皆、イエスさまを見捨てて逃げてしまいました。それは、イエスさまから「あなたは生まれなかった方が良かった」と言われても仕方のないような裏切り行為であり、情けないことでした。しかしそのような自分達のために、イエスさまは命を懸けて父なる神さまにとりなしをして下さっていた、ということに弟子たちは後に気が付いたのです。イエスさまの十字架が自分のためだったと信じる時に、全てが許され、神さまの愛を心から喜ぶことが出来る、ということを知ったのです。

私たちはいくら気落ちすることがあって

も、いくら大きな失敗をしても、それで神さまに見捨てられることはありません。私たちは、イエスさまが私たちのために十字架に架かって下さったことを覚えて生きていくことが出来るのです。イエスさまが大きな犠牲を払って下さったことに感謝をして歩んでいけるのです。

ところが、パウロがいたコリントの教会では、イエスさまに対して心から感謝することが出来ない人たちがいました。食べ物に困っている人が隣にいても自分は先にたらふく食べたい、そんな衝動を抑えられなかったのです。これは自分のことしか考えない、本当に悲しい姿です。イエスさまが折角ご自身の命を差し出して下さったことを忘れてしまっているのです。

神さまが望んでおられる人間の姿とは、私たちが互いに愛し合うことです。誰か困っていたら、そのことを悲しんで自分が犠牲を払ってでも何とか助けてあげる、そのような生き方をして欲しいと神さまは願っておられます。しかしコリント教会のある人たちは、それが出来ませんでした。これは決して他人事ではありません。私たちもつい、そうになってしまうことがあります。困っている人がいても、その人が目に入って来ないのです。あるいは入ってきても自分を優先してしまうのです。そういう時こそ、救いようのない私たちのために命を差し出して下さったイエスさまを思い出さる必要があります。そうして救われたことを心から喜ぶ時に、イエスさまの十字架の意味、またパンと杯の意味が分かるのです。皆さんは、神さまに愛されていることをかみしめて、おいしく食事をとって下さい。そしてすすくと大きくなって下さい。

(常石召一)

《今週の暗唱聖句》

だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。(コリントの信徒への手紙一 11章26節)

11月17日 コリントの信徒への手紙一 11章17節～34節

【幼稚科】

主の晩餐

1. 聖餐式について

※聖餐式についての理解は幼児には難しいものです。実際の聖餐式の時に、子ども達が食べたがるなどして混乱しないように、信者の保護者がいる子どもたちに限った方が良くもかもしれません。

※聖餐式が行われる週に、準備の様子や(可能ならば)礼拝の中での式の様子を写真に収めておくとも良いでしょう。

※言葉づかいの上で、「化体説」や「象徴説」的にならないよう気をつけたほうが良いかもしれません。ただし、あまり神経質になる必要はありません。

〈展開例〉

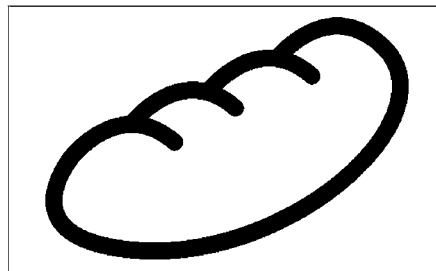
- ・教会では毎月、大人の礼拝の中で「聖餐式」をしています。
- ・パンとぶどうジュースを牧師先生が分けてくださって、みんなで食べる式です。
- ・教会でイエスさまを信じていると約束した人が食べることができます。
- ・小さな子たちはもう少し大きくなってから、イエスさまを信じる約束をしたから、パンとぶどうジュースを食べることができます。
- ・このパンとぶどうジュースは、イエスさまとお食事をしたときのことを忘れないように、今もイエスさまと一緒に食事できるようにイエスさまが約束してくださった式です。

2. パンを分け合おう。

聖餐式とは別に、今日の聖書箇所が示している「食卓のあり方」を体験するゲームです。

- ・先生がイエスさま役になり、子どものうちの一人にパンのカードを2枚渡します。
- ・渡された子どもは、カードを持っていない他の子どもに、パンのカードを分けてあげます。
- ・分けられた子どもは先生のところにカードを持ってきます。
- ・先生は1枚カードを持っている子どもにもう1枚カードを渡し、2枚にしてあげます。
- ・もらった子どもが次々と他の子どもにカードを分けることで、みんながいっぱいのパンのカードを持つことができます。

パンのカードの例



11月17日 コリントの信徒への手紙一 11章17節～34節 【小学科上級・中学科】

主の晩餐

1. Iコリント11：17～22を読みましょう。

①パウロが指摘した、コリントの教会の問題点は何でしたか？

2. Iコリント11：23～26を読みましょう。

①「主の晩餐」とは、何ですか？

②マタイ26：26～29も読みましょう。イエスさまは、このときどんな状況でしたか？

③何のために、今でも教会で聖餐式をするのですか？

3. Iコリント11：27～34を読みましょう。

①「ふさわしくないままで」とは、どういうことですか？ どうすることが、主の晩餐にふさわしいのでしょうか？

②わたしたちが礼拝や聖餐式のために教会に集う時、何が大切ですか？

11月24日 コリントの信徒への手紙一 13章1～13節

【解説と黙想】

もっとも偉大な愛

この手紙の宛先であるコリントの教会は、互いのそしりや不道德、分派争いなどの問題があり、キリストにある平和の一致を保つことが困難な状況にあった。キリストにある交わりでありながら、一致出来ないという、この世と神の国と対立する現実が初期教会の中にもあったのである。コリントの信徒たちが直面した問題は、キリストにある一致を拒む罪の現実と、この世の試みの強さを私たちに教える。

使徒パウロはコリントの信徒への手紙一13章13節で、信仰、希望、愛という、教会における三つの柱を教える。使徒パウロはこれらの3つの柱の中で、最も大いなるものが「愛」であることを強調する。この御言葉は、主にある民が何によって一致しているかを思い起こさせるものである。「愛の賛歌」と呼ばれるこの御言葉は、主にある交わりにおける「愛」の具体的なかたちを教える。同時に愛の賛歌は、私たちの現実がいかに愛することに貧しいかを教える。たとえば、4～7節の「愛」の部分に「自分」と入れて、自信をもって朗読することの出来る人がいるであろうか。自らの力で愛することの困難な、罪の現実がある。それにも関わらず、神の教会であり、キリストの集会であるものは、この世のものと同じではない。神の教会の柱となるのは、神の愛である。教会の一致は自らの力ではなく、キリストの十字架に示された神の愛により頼むことによって、実現するのである。

神の愛は、具体的なものとして私たちに

示されている。主イエスは、神の民の生きる規範である十戒を、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、わたしたちの神である主を愛することと、わたしたちの隣人を自分自身のように愛すること、と要約した。イエス・キリストの愛は自己をささげ、献身し、仕える愛である。その愛は十字架に具体的に表されている。使徒パウロは、「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です」（ガラテヤの信徒への手紙5章6節）と、主にある兄弟姉妹にキリストにある一致と、愛の実践を勧める。ハイデルベルク信仰問答問55は、聖徒の交わりについて、全ての信徒が群れの一部として、主キリストと全ての賜物が与えられていること、信徒がこの賜物を、他者の益と救いのために、自発的に用いる責任があることを教えている。神の愛に生きる者は互いに愛する者へと変えられるのである。愛の交わりの初めは、キリストを通して与えられた神の愛を受けることにある。

私たちの教会生活においても、互いに愛し合うことの困難な現実がある。聖徒の交わりにおいて、愛の一致が試みられるとき、私たちがなすべきは、主なる神が、与えて下さったキリストにある罪の赦しと、互いに愛しあうことへの促しである。互いに愛する者としての成長を祈り求めることこそ、神が私たちに求めていることである。（長谷部真）

《参照聖句》 マタイによる福音書25章40節、

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問59、ハイデルベルク信仰問答 問55、114

11月24日 コリントの信徒への手紙一 13章1節～13節

【説教展開例】

もっとも偉大な愛

◇..... 単元のねらい◇

主イエス・キリストに招かれた教会は、神の国の完成のために歩んでいる。その神の国の完成、教会の一致のために、神を堅く信じること、希望からそれないこと、そして愛することという、三つの柱があることを確認する。主イエスは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と十戒を要約され、神と隣人を愛する生活こそ、神さまに従う歩みであることを確認する。神の愛の深さを確認すると同時に、私たちの現実がどれだけ愛から離れているかを知り、私たちは神さまが示してくださった、イエス・キリストの十字架という、神さまから示された愛に頼る道が与えられていることを確認する。私たちの教会生活、信仰生活の中心には、主なる神さまの示された完全な愛があり、その神さまの深い愛に委ねたとき、キリストにある平和の一致が実現することを確認する。

「もっとも大切なこと」

皆さんは、「愛」という言葉を聞いて何を思い浮かべるでしょうか？ 家族を大切にすること、誰かを好きになること、大切にすること、困っている人に優しくしてあげること、お互いを思いやること、弱い立場にいる人たちに仕えること、仲良くすること。聖書の御言葉に示された神さまの愛は、教会にとって、最も大切な恵みです。イエスさまが教えてくださった十戒の要約は、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」でした。神さまが従う、私たちに命じられたのは、「神さまと隣人を愛する」ということです。

今日の御言葉の13節で、パウロさんは教会でとても大切にすべき3つのことを教えています。一つ目は、神さまを確かに信じる信仰です。二つ目は、神さまが与えてくださった希望から離れないこと、そして三つ目は、神さまと人とを愛することです。しかもそれだけではありません。これら三つの大切にすべき柱の中で、もっとも偉大なのは「愛」である、とはっきり教えてい

ます。第一コリント13章は、「愛の賛歌」と呼ばれています。パウロさんは、コリントの教会の人たちに、「愛」とは何かを詳しく教えています。

パウロさんが愛について教える必要があったのは、コリントの教会の人たちの間にあったたくさんの問題があつて、教会の交わりに平和が無かったからです。コリントの教会の人たちは、パウロさんから神さまの愛について教えてもらっていました。しかし教会の中で、愛を実践しようとしたとき、彼らはお互いに仲良くすることが出来ませんでした。自分とは違う考えの人たちや、お互いの出身の違いのために交わりの中で仲良く出来ず、考え方のずれ違いのために、お互いを無視したり、神さまが命じた掟を無視して、自分勝手に生活している人がいたり、教会の中でグループを作って、一つである教会が分かれそうになるなど、キリストに招かれたにもかかわらず、一つの交わりとして仲良くすることが出来ませんでした。

私たちもまた、神さまと隣人を愛することが難しい状況に出会うことがありますね。学校の友だちや、兄弟、時には教会の人との間にも私たちの隣人との間に、仲良くできずに対立することがあります。イエスさまが「隣人を自分のように愛しなさい」と命じられたのに、私たちは愛から離れてしまっている、ということがあります。私たちは愛からどれだけ近くいるのでしょうか？ たとえば、コリントの信徒への手紙一13章4～7節にある、「愛」という言葉を「わたし」という言葉に置き換えてみてください。「わたしは忍耐強い。わたしは情け深い。わたしは自慢せず、高ぶらない」。自分の現実と、パウロさんの言葉との間に、隔たりはないのでしょうか？ 私たちは自分の力で隣人を愛そうとすると、そこには限界があることに気づかされます。

そのような私たちが、「隣人を愛する」ためにはどうしたら良いのでしょうか？ そのためには先ず、主なる神さまの愛を受けることです。神さまが既に示してくださった愛を受け取ることで、愛する、とは具体的な行いです。神さまは、ご自分の愛をもっともよく示すために、イエス・キリストの十字架の愛を示してくださいました。人々に仕え、自分自身をささげられた十字架は、神さまの愛が示された出来事です。

それでは私たちが隣人を愛するためには、どうすれば良いのでしょうか？ それは、私たち一人一人が、神さまに与えられた大きな恵みを知ることです。神さまは、イエスさまという一番大切な独り子をお与え下さいました。それは私たち一人一人が救われるためです。神さまの愛はイエスさまの十字架に示されています。

神さまは、イエスさまと、イエスさまを通して与えられるたくさんの恵みを、教会に集まる一人一人に与えてくださいます。

た。そして神さまは教会に集まる私たちが、与えられた恵みを、他の人のために用いてほしいと願っておられます。しかも、誰かから強制されるのではなく、私たち一人一人が自分から用いてほしいと願っておられます。私たちがお互いに愛することが出来るように、見本を見せてくれたのが、イエスさまですね。イエスさまは弟子たちを、そして苦しみ悲しんでいる人たちを愛しました。イエスさまの眼差しは、愛にあふれています。

罪ゆえに、互いに愛することに貧しいわたしたちに、パウロさんは、愛するとはどのようなことかを教えています。先ほどふれたコリントの信徒への手紙13章で、パウロさんは愛の具体的な行動を記しています。私たちは互いに愛し合うことすら、難しいものです。そのような私たちがイエスさまは愛してくださいました。イエスさまは、互いに愛することの出来ない私たちの罪を背負って、十字架にかかって下さいました。そのイエスさまを通して与えられた神の愛を、私たちが受け取って、神さまの愛を確かめていく中で、私たちもまた、隣人を愛する者へと成長することが出来ます。教会に招かれた私たち一人一人は、神さまからイエスさまと、全ての賜物が与えられています。

イエスさまに招かれた私たちは、神さまから大きな愛を注がれています。私たちがその愛に満たされたとき、私たちも互いに愛する者へと変えられていきます。それが、教会にキリストの平和を実現するためにもっとも必要なことです。信仰、希望、愛、この三つは教会の中でいつまでも残る大切な柱です。その中でもっとも偉大なものが、愛ですね。お互いに愛せない、と思ったとき、イエスさまがどのように私たちが愛してくださいましたかを思い出してみてください。(長谷部真)

《今週の暗唱聖句》

それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である。(コリントの信徒への手紙一13章13節)

11月24日 コリントの信徒への手紙一 13章1節～13節

【幼稚科】

イエスさま、たくさんの愛を、ありがとう

1. 「今日は、愛について学びましょう。
聖書は、語ります」(紙に書いて見せる)

愛は、あきらめない	愛は、ひとを、じぶんより、だいじにする
愛は、うらやましがらない	愛は、いばらない
愛は、じまんしない	愛は、ひとにめいれいしない
愛は、わたしがさき!といわない	愛は、むかつ!とおこらない
ひとのわるいところを、かぞえない	けらいができることを、よろこばない
ほんとうのことをよろこぶ	なんでも、がまんできる
かみさまに、いつもしんらいする	よいことのためにどりよくする
くよくよしないで	まっすぐ、ゴールへはしる

「神さまは、イエスさまという、一番大切なひとり子を、与えて下さいました。それは、わたしたち一人ひとりが、罪から救われるためです。イエスさまは、わたしたちの代わりに、十字架におかかりになり、死んで下さいました。これにまさる愛はありません。イエスさまをくださるほどに、神さまはわたしたちを愛して下さいます。このことをいつも思い出して、「神さまの愛をみんなにもわけてあげるこども」になりましょう。」

2. さんび「しゅわれをあいす」

みんなで手をつないでうたいましょう。

3. いのり

*御言葉は、*Eugene H Peterson, The Message*を参考に私訳

11月24日 コリントの信徒への手紙一 13章1節～13節 【小学科上級・中学科】

もっとも偉大な愛

1. Iコリント13章1～3節を読みましょう。預言の賜物や、知識や信仰は、それだけで価値のあるものでしょうか。
2. 人のために財産や命を犠牲にすることは、「何をもって」するべきだと言っていますか。
3. Iコリント13章4～7節を読みましょう。ここに出てくる「愛」を「私」に置き換えてみましょう。
4. 3. で「私」と「愛」に隔たりがあると感じた場合、それはなぜか考えてみましょう。ガラテヤ5章6節も読んでみましょう。
5. Iコリント13章8～13節を読みましょう。「完全なもの」とは何のことでしょうか。
6. 「成人したとき、幼な子のことを棄てた」とはどういう意味ですか。マタイ25章40節も読んでみましょう。
7. 鏡におぼろに映ったものをはっきりと見るのができるのはいつですか。またこれは何のことを言っていると思いますか。
8. パウロは、「いつまでも残る」のは何だと言っていますか。その中でもっとも大いなるものは何ですか。教会の中でこれらを生かしていくにはどうしたらよいか、考えてみましょう。

12月1日 マタイによる福音書24章36～44節

【解説と黙想】

目を覚ましていなさい

マタイによる福音書24章は神殿崩壊（このことは歴史の中で紀元70年に起こった）について語ることから始まりますが、章の終わりの光景は、終末、そして主の来臨が語られています。つまり終りについての教えがまとめられています。今回の箇所（36～44節）は主が来臨される時に備えて目を覚まして生きるというキリスト者の生き方が語られています。

36節では、主の来臨の時について述べられています。その日、その時は誰も知らず、ただ神だけが御存知なのです。

37～39節ではノアの箱舟が例としてとりあげられています。ノアの洪水の時、人々はノアが箱舟に乗るその日まで、飲んだり、めとったり、とついだりしていました。彼らは洪水の前兆を知らなかったのではありませんでした。洪水の前からノアが箱舟を作ることによって洪水の警告はされていたのです。ですが、彼らはその警告を信じなかったのです。このノアの譬えはマタイ24：3～14の終わりの徴の事柄とつながっています。「その日、その時」は父だけがご存知ですが、その日来る予兆と前兆は知らされるのです。主の警告を、目を覚まして聞き続けることが求められています。

40, 41節では終末を待ち望む責任が一人一人にあることを教えています。「そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が

白をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される」少し残酷に思うかもしれませんが、信仰は最終的に個人的な問題になるのです。神の御言葉を信じる者は天へ導かれるのです。

42～44節の言おうとしていることは、37～39節のノアの箱舟の例と類似しています。盗人が来ることが分からないので不安である、ということではなく、分かっているからこそ、用意することができるということです。「その日、その時」はいつなのか、私たちには分かりません。それは盗人のように思いがけない時に襲って来ます。ですが、来ることは分かっています。その備えを私たちは求められているのです。

全体を以下の三点にまとめることができます。①主の来臨の時は神だけが御存知であるということ。②神のみ御存知であるからといって、神が何も示しておられずに「その時」が起こるのではないということ。神は終末に近い徴を与えてくださるので、その警告に聞き続けることが求められている。③終末を待ち望む責任は一人一人に問われているということ。

子どもたちに終末のことを伝えることは、難しいかもしれませんが。現実の日常生活の中で、「今」、神さまを見続けるという「目を覚ましている」生き方をお話することが求められます。（高内信嗣）

《参照聖句》 創世記6章11～13節、イザヤ54章9節、2ペトロ2章5節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問39

12月1日 マタイによる福音書24章36～44節

【説教展開例】

目を覚ましていなさい

◇..... 単元のねらい◇

終末のことは難しい事柄かもしれない。だが、今、現在の私たちの信仰と深く結びついている。主イエスの「目を覚ましていなさい」という言葉は、私たちが今、神さまの御存在と私たちに与えてくださった救いを見続けることである。いつも神の愛を見つめて生きるということはこの単元で確認する。

「神さまを見つめる目を開ける」

今日の聖書の言葉の中で「目を覚ましていなさい」という言葉が出てきましたね。イエスさまはよくお弟子さんたちや大勢の人々に「いつも目を覚ましていなさい」と言われました。みなさんはどれくらい連続で起き続けたことがありますか？ 私はせいぜい40時間くらいかな？ それ以上は無理でした。そして、ずっと寝てないとうがい頭が痛くなってふらふらになるんですね。いつも目を覚まして生活することは不可能です。でも、ここでイエスさまが言おうとしていることは、ずっと眠らないでいなさいということではありません。みなさん、睡眠はしっかりとってくださいね。イエスさまがおっしゃっているこの「目」は「神さまを見る目」ということです。「目を覚ましていなさい」とは「神さまを見つめる目を開けていなさい」、「神さまを見続けていなさい」と言う意味ですね。

人間の集中力って短いなと、ふと思うことがあります。私は全然、集中力がありません。勉強していても、別の勉強がしたくなるし、漫画やゲームがしたくなります。同じように、私たちも神さまのことを考えていても、違うことを考えてしまうのだと

思います。ぼーっとして神さまを忘れてしまうことが良くあります。そのような私たちにイエスさまは「目を覚ましていなさい」とおっしゃるのです。

みんなはこの世界に終わりが来るって信じているかな。世界の終わりのことって、多くの人が興味を持っているみたいなので、昔から、ずっと、いつ・どんな時に、世界が終るかという研究が続けられてきました。たまに、ツイッターを見ると「明日、世界が終る」っているツイートが出てくることがありますね。今まで、そのような終りの日の予測が続けられてきましたし、「明日、世界が終る」という声も何度もささやかれてきましたが、結局、今も、世界は続いていますね。イエスさまは本日の箇所で、「その（終末）時は、父だけが御存知である」とおっしゃいました。そのことは神さまだけが御存知なんです。でも、その日がいづつ来るか分からないので、ボケ～と生きていけばいいということではありませんね。

みなさんは、旧約聖書にあるノアさんの物語を読んだことはありますか。お父さん、お母さんからお話を聞いたり、紙芝居や聖

書の漫画で読んだことがあるかもしれません。ノアさんが生きていたころ、人間は好き勝手に行動し、神さまを信じずに生活していました。このような人々の生活をみて、神さまは心を痛められ、地上から人々を拭い去ろうとお考えになられました。しかし、ノアさんだけは正しい方で、純粋に神さまを信じる方でした。神さまは、ノアさんだけ、大きな舟を作ることをお命じになられ、ノアさんの家族を救おうとされたのです。こうしてノアさんは神さまが洪水を起こすまで、一所懸命、箱舟を作りました。

本日の聖書の箇所ではイエスさまはこうにおっしゃっていましたね「洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった」。

ノアさんが生きてきたころの人たちは、洪水が来るまで、好き勝手に行動して、神さまを裏切って生きていました。洪水が来るまで、何も気づかなかったのです。でも、何も警告がなかったわけではありませんでした。ノアが箱舟を作っていた時も、その工事が行われていることを人々は見えていたわけでありますから、洪水が来ることは、全く、伏せられていたわけではありませんでしたね。ですが人々は神さまを見ずに、洪水が来るまで、自分勝手に生きてしまったのです。

イエスさまが来られる「時」は、いつになるのか、それは神さまだけがご存知です。ですが、イエスさまはその「時」が来るとおっしゃっています。その「時」が来ることは、間違いのないのです。

さて、みなさんは、大好きな友だちに久しぶりに会うと嬉しいでしょう。夏休みや冬休みが終わって、新しい学期になったとき、「ああ、今日から学校かあ〜」と思いつつも、久しぶりに友だちに会えることが私は嬉しかったです。「終りの日」と聞くとも何か怖いことを考えるかもしれません。ですが、イエスさまが言う、「その日」とは私たちにとっては恐ろしい日ではありません。イエスさまがこの世に来てくださるのですから！ 私たちにとっては嬉しい日です。もし、私たちが久しぶりに会った友だちのことを忘れていたら、友だちは悲しむと思いますね。イエスさまも同じです。イエスさまも「わたしのことを忘れないで」と思っています。「いつも、目を覚ましていなさい」と生きていくということは、私たちがイエスさまのことを忘れずに、イエスさまとお会いする日を、心高まりながら、どきどきとお待ちするということです。イエスさまは私たちを愛してくださり、私たちのために命を投げ出された方です。イエスさまも、愛している私たちの下へ来られることを喜んでおられます。

(高内信嗣)

《今週の暗唱聖句》

だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。

(マタイによる福音書 24章 44節)

12月1日 マタイによる福音書24章36～44節

【幼稚科】

目を覚ましていなさい

〈ねらい〉

クリスマスの準備をする季節が始まります。クリスマスの喜びをすでに知っている幼子に向けて語ります。突然、クリスマス当日が来るのと、準備をして待ち続けるのでは、当日のよろこびの度合いは比べられません。その類比を用いて、説明します。また、再臨を待つ喜びとは、今ここで主と共に生きることの喜びを知っている人のみ与えられるものです。子どもたちに、イエスキリストがいつもいっしょにいてくださることを第一に伝えたいと思います。それによって、待つ力と祝福は私たちのものとされるからです。

〈展開例〉

今日は、日曜日です。日曜日には教会があります。今日が日曜日だと、いつ、分かりましたか。今朝、起きて、ご飯を食べているとき、「今日は、教会に行く日ですよ」と言われましたか。昨日、「明日は教会ですよ、準備をしましょう」と言われましたか。

どちらが、わくわくしますか。待ち遠しくなりますか。教会が楽しいお友だちであれば、今日の朝に、「エッ、今日は教会なんだ」とは思わないと思います。土曜日や、早ければ金曜日から「もうすぐ日曜日だ、教会だね」と思うでしょう。

12月に入りました。クリスマスが近づきました。今年は22日が降誕祭です。今から、準備しましょうね。そうすると、それまでの一日一日が特別にキラキラしてきます

よ。待っていることは、楽しいのです。

イエスキリストは、「ちゃんと待っていてね」と、繰り返し語られました。「私は、あなたに見える形で会いに行くから、その日、その時を待っていていなさい」と。

ただし、イエスキリストは、会いに来てくれるその大切な日を、一度も教えて下さいませんでした。なんども、「待っていていなさい」とおっしゃったのですが、肝心のいつ、どこでとは教えてくれなかったのです。

「えー、それでは、待っていてもつまらない。待つてなんかいられない！」って思うのでしょうか。たしかにそうですね。

でも、イエスキリストは、一つのことを求め、約束して下さいました。それは、「日曜日には教会に来て、礼拝してごらんください。そうしたらわたしと会えるよ。」と。

先生は、日曜日を楽しみに待っています。〇〇ちゃんに会えるし、イエスキリストを礼拝することでイエスキリストにお会いできているからです。

待つことは、うれしいこと。クリスマスがやって来ます。かならずやって来ます。待っている人は、待っていない人の何万倍も楽しい毎日を過ごせます。みんなで、待っていきましょう。

〈やってみよう〉

- ・アドベントカレンダーをつくる。
- ・アドベントクランツをつくる。

「アドベントの楽しみ方」で検索するとさまざまなことが紹介されています。

12月1日 マタイによる福音書24章36～44節

【小学科上級・中学科】

目を覚ましていなさい

1. マタイによる福音書24章36～41節を読みましょう。「その日、その時」は何のことを表していますか。またそれをご存知なのは誰でしょうか。
2. ノアの時に人々は何も気づかなかつたとありますが、知らないで洪水がきたのか、それとも知っていたけれども気づかずにいたのかどちらだと思いますか。創世記6章11～13節も読んで考えてみましょう。
3. 「一人は連れて行かれ、もう一人は残される」とはどういう意味でしょうか。
4. マタイによる福音書24章42～44節を読みましょう。「目を覚ましていなさい」とは何に備えることだと思いますか。
5. 「人の子は思いがけない時に来る」ため、私たちは日頃どんなことを心がけるべきでしょうか。

12月8日 マタイによる福音書3章1～12節

【解説と黙想】

洗礼者ヨハネ

洗礼者ヨハネの母エリサベトと主イエスの母マリアは「親類」であり、マリアは受胎告知の後にエリサベトのもとを訪れている。(ルカによる福音書1章36節)。ヨハネと主イエスも、顔なじみであったかもしれない。

洗礼者ヨハネは主イエスのことをはっきりと「わたしよりも優れた方であり、わたしは、履物をお脱がせする値打ちもない」(マタイ福音書3章11節)と人々に告げており、自分の働きをよくわきまえていた。彼の働きは、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにすること」であった。彼は、主イエス以前の最後の預言者であり、主イエスの表現によれば「預言者以上の者」である(マタイ福音書11章9節)。

彼は人々に「悔い改めよ。天の国は近づく」と宣べ伝えた。主イエスの宣教の開始にも同じ言葉が記されている(マタイ福音書4章17節)。洗礼者ヨハネに与えられた働きは「主の道を備える」ことであり、主イエスは「主」ご自身であるが、二人の宣教は明確に同一線上にあることがわかる。

彼は人里離れたところで、変わった生活をしていた。そこに、「エルサレムとユダヤ全土、ヨルダン川沿いの地方一帯」から大勢の人々がヨハネのもとを訪れた。ヨハネは、特にファリサイ派やサドカイ派の人々に向かって厳しい言葉を発したようで

ある(マタイ福音書3章7～10節)。血縁によって「アブラハムの子孫」であるということが神の怒りを免れる根拠ではなく、それぞれの悔い改めの必要を説いた。

「悔い改める」という言葉は、「立ち返る」ということである。ユダヤ人たちは神に特別に選ばれた人々であったが、神に対して罪を犯し、神の元から離れた状態にあった。ユダヤ人のみならず、人間は神によって創造された者である。しかし、アダムの子孫以来、神のもとから離れて歩む性質を帯びている。私たちは自分たちの罪を認めて、神のもとに立ち返らなければならない。神から離れて歩むところに本当の平安はない。しかし、罪という性質によって生じている人間と正しい神との間の亀裂は深刻な大きさである。人間が神の側に上っていきその亀裂を埋めることはできない。

神ご自身が降りてきてくださり、その罪を一身に背負うことにより、人間と神との関係は正される。そのために主イエスがこの地上に人として来られ、それを祝うのがクリスマスである。

また、「悔い改め」は日々なされなければならないものでもある。それは、毎日毎日、主イエスとの関係で罪を見つめ続けるということへと促される。

ヨハネの「悔い改めなさい」という言葉は、同時に、救い主の必要性を私たちに教える言葉である。(大宮季三)

《参照聖句》 マタイによる福音書11章1～17節、ルカによる福音書1章26～45節
《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問20～28

12月8日 マタイによる福音書3章1節～12節

【説教展開例】

洗礼者ヨハネ

◇..... 単元のねらい◇

洗礼者ヨハネは「悔い改め」の必要を人々に告げた。私たちは、イエスキリストによって、悔い改め、神のところに立ち返る信仰生活を歩みたい。

「悔い改める」

聖書には「ヨハネ」という人が何人か出てきます。今日出てくる「ヨハネ」は洗礼者ヨハネと言います。洗礼者ヨハネはイエスさまの親戚です。もしかすると二人は、小さい時から一緒に遊んだことがあったかもしれませんね。イエスさまは洗礼者ヨハネのことを「燃えて輝くともし火であった」（ヨハネによる福音書5章35節）とおっしゃいました。洗礼者ヨハネは、「輝く火」のような働きを神さまから与えられた人だったのでですね。先ほど読んだ聖書の箇所には、洗礼者ヨハネがどのような生活をして、そのようなことを人々に伝えたのかが記されていました。

洗礼者ヨハネは人が住むところから離れた「荒れ野」で生活していました。そして、「らくだの毛皮」の服を着ていました。そして、「いなごと野蜜」を食べていたと書かれていましたね。洗礼者ヨハネはかなり変わった生活をしていたようですね。

人が住んでいない「荒れ野」で変わった生活をしていた洗礼者ヨハネですが、たくさんの方がここにやってきました。彼らは何を聞いて、何をしたのでしょうか？ヨハネは10節でこういうことを言っていますね。「斧は既に木の根元に置かれている」

斧が木のすぐ近くにあり、いつ木が切り倒されて火に投げ込まれてもおかしくないそういう状況だと。神さまが嫌うことを自分たちがしてしまった罪があって、その罪に対する罰を受ける時がもうすぐそこに近づいている。そして洗礼者ヨハネは「悔い改めなさい」と、人々に伝えました。「悔い改め」を伝えることが、洗礼者ヨハネに与えられた働きでした。

「悔い改める」という言葉は少し難しい言葉ですが、とっても大事な言葉です。イエスさまも、働きを開始されるときに、「悔い改めなさい」という言葉を最初に人々におっしゃいました。「悔い改める」という言葉の意味は、「神さまのところへ帰る」ということです。神さまが嫌うことをしてしまう状態は、神さまから離れてしまっていますね。そこから神さまのところに帰らなければならない、と洗礼者ヨハネは人々に伝えたのでした。

ヨハネの話を聞いていた人々は、ユダヤ人ですね。彼らは、神さまから特別に選ばれた人たちのはずでした。しかし、神さまから離れてしまった人たちでもあります。神さまが嫌うことをたくさんしてしまいました。だから、「悔い改めなさい」「神さまのもとに帰りなさい」と洗礼者ヨハネ

は、人々に伝えたんですね。

そして、ヨハネの話を聞いて、たくさんの人たちが、「悔い改め」で「洗礼」を受けました。

私たちがまた、神さまのもとに帰る必要があります。それはなぜでしょうか？それは、私たちが神さまに作られたからです。お祈りの時に「天の父なる神さま」と最初に言いますね？ 私たちはみんな、お母さんから産まれてきますが、本当の親は、天の神さまです。

だから、私たちは天の神さまのところに行かなければ迷子のようなものです。迷子の子が、公園で遊んでたとしても、心配で心配で楽しく遊ぶことはできません。

私たちが、神さまのところに戻らなければなりません。しかし、神さまが嫌うことをしてしまう私たちは、その罰を受けなければなりません。神さまが嫌う「罪」をなんとかして頂かなければなりません。そうでなければ、神さまのところに戻ることはできません。そして、私たちは罪を犯し続けてしまいますから、自分の力でなんとかすることはできません。どうすればよいのでしょうか？

私たちが神さまのところに戻るために、神さまはあることをしてくださいました。

それは何でしょうか？ そうですね、イエスさまをこの世に遣わしてくださったんですね。もうすぐ迎えるクリスマスは、私たちのために遣わされたイエスさまをお祝いする日ですね。神さまの前に犯した罪をイエスさまの十字架によって赦していただき、私たちは神さまのもとに帰り、神さまのところで生きるのですね。

イエスさまが生まれる随分前から、神さまの言葉を受けた預言者と呼ばれる人たちは「救い主が来る」という預言をしてきました。そしていよいよ、イエスさまという救い主が来られる直前に登場したのがこの洗礼者ヨハネという人でした。

私たちが神さまの元に帰るたった一つの道がイエスさまです。神さまが嫌われる「罪」を私たちはイエスさまによって赦していただくことができます。そして、神さまのところに戻っていくことができます。

この「悔い改め」は一回すればもうしなくてもよいではありません。毎日毎日、私たちはイエスさまによって悔い改めて、神さまのところに戻るのですね。神さまのところに戻り続けて、神さまのもとで新しい一週間を過ごしてまいりましょう。

(大宮季三)

《今週の暗唱聖句》

悔い改めよ。天の国は近づいた。(マタイによる福音書3章2節)

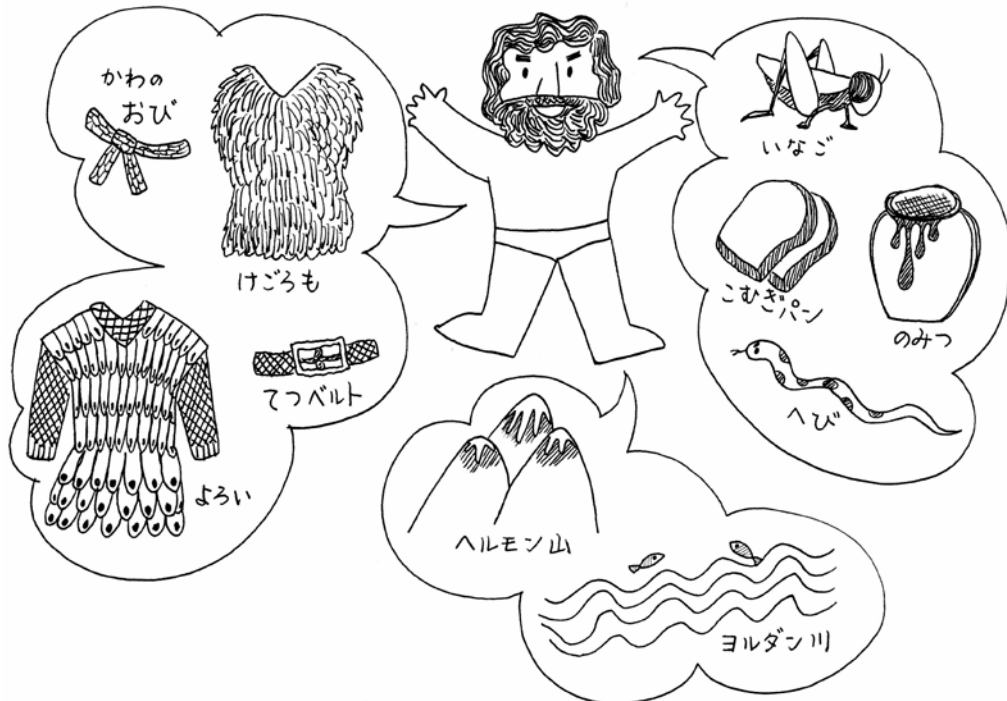
12月8日 マタイによる福音書3章1節～12節

【幼稚科】

洗礼者ヨハネ

クイズ：洗礼者ヨハネってどんな人？

Q 1. ヨハネは、①何を着ていましたか？ ②何を食べていましたか？ ③どこで洗礼を授けていましたか？



Q 2. ヨハネが言ったことばは、どれですか？ マタイ3：2

「悔い改めよ。天の国は近づいた」

「荒れ野で叫ぶ者の声がする」

「我々の父はアブラハムだ」

12月8日 マタイによる福音書3章1節～12節

【小学科上級・中学科】

洗礼者ヨハネ

1. マタイによる福音書3章1～6節を読みましょう。洗礼者ヨハネはどこで、何と書いていましたか。また彼はどんな様子で、どんな生活をしていましたか。
2. ヨハネは預言者イザヤによって何と書かれていましたか。
3. 人々はどんな所からやって来て、彼のもとで何をしましたか。また、それは何のために行なわれたのでしょうか。
4. マタイによる福音書3章7～12節を読みましょう。ヨハネはファリサイ派やサドカイ派の人々に何と言いましたか。何を意図して彼はそう言ったのでしょうか。
5. ヨハネはまた、神さまとイエスさまについても述べています。それぞれ何と書いていますか。
6. 全体を通して、彼の役割は何だと思えますか。彼が伝えたかったことは何でしょうか。マタイ11章1～17節も読んでみましょう。

12月15日 マタイによる福音書11章2～11節

【解説と黙想】

洗礼者ヨハネとイエス

マタイによる福音書における洗礼者ヨハネに関する記事の2つ目。

前週のマタイ3章において、人々に天の国について宣べ伝え、洗礼を授けていたヨハネであったが、捕えられ、牢に入っていた(マタイ4:12)。ヨハネを捕らえたのは、ヘロデ大王の息子ヘロデ・アンティパス。彼は結婚していたが、兄弟フィリポの妻ヘロディアを愛し、妻とした。これが律法違反(レビ18:16)であったので、ヨハネはヘロデ夫妻を非難した。その結果、彼らの怒りにふれ、捕えられてしまった(マタイ14:1～12参照)。

すでに主イエスに出会い、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハネ1:29)と救い主メシアの到来を認めていた洗礼者ヨハネであったが、今日の箇所では「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」(3節)と、自らの弟子を通して、主イエスに質問したのは、福音書の中で最も大きな謎の一つとされる。代表的な見解は、以下の3つ。①ヨハネは捕囚の苦しみの中に信仰を捨てた。②ヨハネの信仰は全く揺らがなかったが、ヨハネの弟子たちが不信仰であったため、彼らにキリストを信じさせるために質問させた。③報告された主イエスの姿が、ヨハネのメシア観(裁きのメシア)と異なっていたために質問した。ヨハネは、メシアの裁きがヘロデ夫妻を裁き、捕囚の義人である自分を救ってくれるものと期待していた。しかし、主は愛と憐れみのわざばかりをして、裁きを行わない。つまり、ヨハネはメシアであることを疑わなかったが、メ

シアの性質を考え違いしていたためにしびれを切らして質問した。

私見では、ヨハネはイエスのメシア性を疑っていたわけではないが、やはり捕囚の苦しみの中に信仰が弱まっており、精神状態が良くない中で弟子たちに質問させたと考える。つまり、彼はメシアであることが分かっているながらも、信仰の確信のために質問した。

主イエスはそのような状況にあるヨハネに対して、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」(5節)と答えられた。これはイザヤ書(下記参照)にあるメシア預言の言葉。主イエスはこの預言が御自身の御業によって成就していることを示す。つまり、主は自らがメシアであることを語り、そのことによって、苦しみの内にあるヨハネを励まされた。

「貧しい人」とは、イザヤ61章で使われる言葉で、「苦しむ人、迫害される人」のこと。5節のすべての内容は「貧しい人は福音を告げ知らされている」にまとめられる。イエス・キリストは、様々な苦しみの状態にある人々に対して、それぞれに必要な福音を告げ知らせてくださるのである。「つまづく」(6節)とは「信仰が挫折する」という意味。主イエスは、今まさに、獄中で苦しみ、信仰が弱くなっていたヨハネに対して、御言葉をもって、励ましと慰めの福音を告げ知らせてくださったのである。

(佐野直史)

《参照聖句》 イザヤ35章5、6節、61章1～4節、ルカ4章16～21節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム問29～33、
ウエストミンスター小教理問答 問23～26

12月15日 マタイによる福音書11章2節～11節

【説教展開例】

洗礼者ヨハネとイエス

◇..... 単元のねらい◇

待降節第3主日は「喜びの主日」。先駆者ヨハネは、前週マタイ3章でキリストに出会い、喜びに満たされていたと思われるが、ヘロデに捕らえられ、牢で苦しみ、その喜びを失いつつあった。主イエスは、そのようなヨハネに対して、御言葉をもって、自らがメシアであることを語り、そのことによって、苦しみの中にあるヨハネを励まし、再び「主にある喜び」を与えられた。そのように、神が私たちに「主にある喜び」を与えてくださることを覚えたい。

「ヨハネさんが牢屋に！」

先週は洗礼者ヨハネさんのお話を聞きました。ヨハネさんが人びとの前で「悔い改めよ。天の国は近づいた」（マタイ3：2）と言って、天の国について宣べ伝え、罪の洗い清めの洗礼を授けていたお話を聞いたと思います。ヨハネさんはその後、イエスさまに出会って、イエスさまにも洗礼を授けたのでした。今日はその続きのお話です。

ヨハネさんはイエスさまと別れた後、ヘロデという人に捕まってしまうました。ヨハネさんを捕まえたのは、クリスマス物語に出てくるヘロデ大王の息子ヘロデ・アンティパスという人でした。ヘロデはもともと結婚していて自分の妻がいたのですが、自分の兄弟の妻であったヘロディアという女性のことを好きになってしまい、ついには彼女と結婚してしまいました。これは旧約聖書で神さまが「やってはだめだよ」と言っていた悪いことだったので、ヨハネさんはそのことを注意したのです。すると、ヘロデとヘロディアは怒ってしまって、ヨハネさんを捕まえて、牢屋に入れてしまいました。ヨハネさんは何も悪いことをしていないのに、牢屋に入れられてしまったのです。

そのようにして、牢屋の中で生活していたヨハネさんでしたが、ある日、ヨハネのお弟子さんたちから、救い主イエスさまがどのようなお働きをしているのかを聞きま

した。いろんな町や村で神さまのことを教え、天の国の福音を宣べ伝えていること（マタイ11：1）を聞いたのだと思います。イエスさまのなさったことを聞いたヨハネさんでしたが、お弟子さんを通して、不思議な質問をイエスさまにしました。「来るべき方はあなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」（3節）と。「来るべき方」とは、「救い主メシア」のことです。ヨハネさんは「救い主はあなたですか」とイエスさまに質問しているのです。あれれ、これはどういうことでしょうか。ヨハネさんは、一度イエスさまに出会って、イエスさまが救い主であると知っていたのに、どうしてこういう質問をしたのでしょうか。イエスさまのことを忘れてしまったのでしょうか。

きっと忘れてはなかったと思います。イエスさまのことを知っていて、救い主であると信じていたと思います。でも、牢屋で生活することは大変なことです。苦しい牢屋での生活の中で、ヨハネさんは神さまに何度もお祈りしたけれども、助けてもらえず、元気がなくなってしまうたのかもしれない。ヨハネさんはそのような中で、イエスさまが救い主であることをもう一度改めて知りたくて、「救い主はあなたですか」と質問したのだと思います。答えはわかりきっている質問でしたが、イエスさまの答えを聞くことによって、もう一度元気を取

り戻したいと思っていたのだと思います。

ヨハネのお弟子さんたちは、イエスさまのところに来て、言われた通り、「救い主はあなたですか」と質問しました。するとイエスさまは次のように答えられました。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである」(4～6節)と。イエスさまが様々な病気を癒されたことが語られています。これは旧約聖書のイザヤ書で、「救い主メシアとはこういう人ですよ」と書かれる「メシア預言」で書かれていることと同じことでした。つまり、イエスさまはヨハネに、ご自分が救い主であることを、聖書の言葉によって力強く答えられたのです。ただ「はい、そうです」と言うのではなく、「わたしの働きを見なさい」と言わんばかりに、聖書の言葉とそのお働きによって、ご自分が救い主であることをはっきりとヨハネに語られたのです。

「貧しい人」とは、「苦しんでいる人」のことです。イエスさまは苦しんでいる人々に福音を、良い知らせを告げ知らせておられることが語られます。また、「つまずく」とは、信仰がなくなってしまうということです。「わたしにつまずかない人」、つまり、イエスさまを信じ続ける人は幸いであると語られるのです。

ヨハネさんはこのイエスさまの答えを聞いて、どう思ったのでしょうか。

本当に嬉しかったのだと思います。イエスさまが旧約聖書から語られてきた、苦しんでいる人々に福音を告げ知らせる、真の救い主であることを改めて知らされ、元気が湧いてきたのだと思います。答えはわかりきっている質問でした。しかし、牢屋の生活の中で苦しんでいたヨハネさんにとつ

ては、その事実をイエスさまから聞くことに大きな意味がありました。イエスさまはそのような状況にあるヨハネさんに御言葉をもって、自分がメシアであることを力強く明らかにされました。そして、そのことによって、ヨハネさんを励まし、元気を与えられたのです。イエスさまは御言葉にある通り、今まさに牢屋の中で苦しんでいたヨハネさんに対して、励ましと慰めの福音を告げ知らせてくださったのです。

僕たちもヨハネさんが牢屋で苦しんでいたように、毎日生活する中で、辛いことがあるかもしれません。ヨハネさんがそうであったように、イエスさまのことを信じているけれども、元気がなくなってしまうと、「イエスさまは本当に救い主なのですか」とイエスさまに聞きたくあることがあるかもしれません。でも、イエスさまはそういう僕たちに対して、聖書を通して語っておられるのです。「わたしが救い主である」と。聖書にはいろんなイエスさまのお働きが書かれています。イエスさまは「それらを見なさい」と僕たちに語られます。それは僕たちが聖書を見ることによって、イエスさまが救い主であることが分かるからです。イエスさまは聖書を通して、ご自分が救い主であることを語り、そのことによって、僕たちを励まし、元気を与えてくださるのです。

今日はアドベントの第3週目の日曜日です。このアドベント第3日曜日は「喜びの日曜日」と言われています。この日曜日は、クリスマスの前に、イエスさまという救い主が生まれてくださる、生まれてくださった、という喜びに目を向ける日です。

僕たちが生きる中では、辛いことがあるかもしれません。悲しいことがあるかもしれません。でも、僕たちには救い主であるイエスさまが共におられるのです。そのイエスさまが僕たちと共におられることに感謝し、主にあつて喜びたいと思うのです。

(佐野直史)

《今週の暗唱聖句》

わたしは主によって喜び楽しみ

わたしの魂は神にあつて喜び躍る。(イザヤ書61章10節)

12月15日 マタイによる福音書11章2節～11節

【幼稚科】

洗礼者ヨハネとイエス

ヘロデとヨハネとイエスさまゲーム

- 1 子どもたちと先生が話になって座ります。
- 2 先生は「ヘロデ」「ヨハネ」「イエスさま」のいずれかの名前を言います。
(三人の名前や顔を描いたイラストを用意できると最も面白くなります)
- 3 先生が言う名前に応じて、子どもたちはそれぞれの表情をします。
「ヘロデ：怒り顔」
「ヨハネ：困り顔ないしは泣き顔」
「イエスさま：笑い顔」

- 4 名前を呼ぶスピードをだんだん速すると難しくなります。
- 5 その他に次のような名前を加えると、難しくなります。
「弟子ヨハネ：話を聞く」
「ヘロデア：悪だくみをするポーズ」
- 6 周りの邪魔にならないように、大きな動きも楽しいです。
「サロメ：踊る」
「歩けない人：立ち上がる」
「わたしたち：立ち上がって踊る」

などいろいろな動きをしてみましょう。

12月15日 マタイによる福音書11章2節～11節 【小学科上級・中学科】

洗礼者ヨハネとイエス

1. マタイによる福音書11章2～6節を読みましょう。ヨハネは牢の中からイエスさまに弟子たちを送って尋ねさせました。それはどんなことでしたか。
2. ヨハネはどんな気持ちでそうしたのでしょうか。
3. イエスさまはどうお答えになりましたか。
4. マタイによる福音書11章7～11節を読みましょう。イエスさまはヨハネについて群衆に何とされていますか。
5. ヨハネのイエスさまに対する思い、またイエスさまのヨハネに対する思いから、イエスさまと私たちの関係について考えてみましょう。イザヤ書61章1～4節も読んでみましょう。

12月22日 マタイによる福音書1章18～25節

【解説と黙想】

主の降誕

1章1節から17節まで、イエス・キリストの系図が記されている。それは、イエスをダビデ王家の血統直属のメシア、ユダヤ民族の先祖アブラハムの子孫の中から起こされるメシアとして描こうとする。アブラハムは、神からその子孫によって全世界を祝福する約束を与えられた。イエスは、この約束の成就であった。その他にも様々な重要なことが、この系図に示されている。しかし、イエス・キリストの系図についてのお話は他の機会に譲ることにして、今回は18節から25節のイエス・キリストの誕生物語に焦点を当てることにする。

本日の聖書箇所を理解するためにどうしても避けて通れないキーワードがある。それは、ヘブライ語の「インマヌエル」という言葉である。「インマヌエル」という名は、「神は我々と共におられる」という意味である(23節)。

「神は我々と共におられる」という教えは、聖書全体に多く見られる。例えば、イサクの子ヤコブが兄エサウから逃れて不安な旅に出発するとき、神は共におられることを約束なさった。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」(創世記28:15)。ヤコブの子ヨセフがエジプトでの苦難の日々に耐えることができたのは、主が共におられたからであった。「主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。……」(創世記39:2～4)。モーセがイスラエルの民をエジプトから導き出す

働きにも、主が共におられた。神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである」(出エジプト記3:12)。このように、神の民が悩みに遭うとき、また神の大きな働きに参加するとき、生ける神が力を与え支えてくださる。この「インマヌエル(神が私たちと共におられる)」ということが、本日の御言葉に登場するヨセフにも大きく関わってくる。

ヨセフと婚約中のマリアが神の御子を産むことは、旧約聖書に預言されていた。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」(23節)。この預言者イザヤの言葉(イザヤ書7:14)が実現するために「おとめマリア」が神の子の母として選ばれたのである。イザヤの預言は、身勝手に、罪を犯して滅び行く人間を、それでも見捨てることなく、「関わりを持ち続ける」という神のご計画を語っている。そしてそのご計画が、ヨセフとマリアを通して実現しようとしていた。

マタイは、預言の成就として来られる方を、御自分の民を救う「イエス」と呼び(21節)、さらに「インマヌエル」と呼んでいる(23節)。目に見えない神の臨在が今や歴史の事実となった。神は肉体をとって、その民のうちに住まわれる。そして、御子イエスは、地上の生涯の後も臨在することを約束して、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と言われる(マタイ28:20)。マタイによる福音書は「インマヌエル」で始まり「インマヌエル」で閉じている。(小澤寿輔)

《参照聖句》 イザヤ書7章14節、フィリピ2章6～11節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問25～27

ウェストミンスター小教理問答 問22

12月22日 マタイによる福音書1章18節～25節

【説教展開例】

主の降誕

◇..... 単元のねらい◇

「インマヌエル」（「神が私たちと共におられる」という意味）は、身勝手に、罪を犯して滅び行く人間を、それでも見捨てることなく、愛して関わりを持ち続けるという神のご意志であることを学びたい。また、救い主イエス・キリストがおとめマリアからお生まれになったことは、「インマヌエル」という神のご意志が実現したこと、罪人にとって大きなプレゼントであることを知ってもらいたい。

「その名はインマヌエル」

今日、ぼくたち私たちは、クリスマス礼拝をささげています。みんなは、クリスマスと聞くと、何を想像するでしょうか。サンタクロース、ジングルベル、プレゼント、クリスマスツリーやネオンの飾り、美味しい食事やケーキなどを連想するかもしれませんね。町に出れば、あちこち綺麗な飾りつけがなされていて、見ているだけで何だか心がワクワクしてきますね。けれども、町のクリスマスは本当のクリスマスではないのです。なぜ本当のクリスマスでないのでしょ。それは、主役がいないからです。ではクリスマスの主役とは誰でしょう。そうです、イエス・キリストです。クリスマスとは、イエスさまのお誕生日をお祝いして、イエスさまに礼拝する日なのですね。それが本当のクリスマスなのです。

仮に、今日が私の誕生日だとします。でも、私のお友だちはみんな別のお友だちの家に集まって、私がいなくて私の誕生日をお祝いしていたら、おかしいでしょう？ それと同じで、イエスさまのお誕生日をお祝いする日にイエスさま抜きでお祝いしたら、おかしいでしょう？ 町のクリ

スマスはそういうおかしいクリスマスをしているのだね。イエスさまが地上にお生まれになってくださったことを感謝し、お祝いし、イエスさまを礼拝するとき、本当のクリスマスをお祝いしていることになるのです。そうです、今、ぼくたち私たちは、本当のクリスマスをお祝いしているのです。

では、それが、ぼくたち私たちと、どういう関係があるのでしょうか。イエスさまのお誕生は、今から約2000年前に起こった出来事です。しかも、日本から遠いイスラエルという国で起こった出来事です。それなのに、どうして私たちはお祝いするのでしょうか。実は、イエスさまが地上に生まれてくださったのには、ぼくたち私たちにとって、大きな意味があるのです。今日は、その意味が何なのかを、聖書のお話聞いてみましょう。

1. 関係を切るという人間の方法

今日のお話の主人公は、ヨセフさんとマリアさんです。ある日、ヨセフさんは、自分と結婚をする約束をしていたマリアさん

のお腹の中に赤ちゃんがやどっていることを知りました。そのことを知ったヨセフさんは喜んだのでしょうか？ いいえ、彼は驚き、困ってしまいました。なぜなら、ヨセフさんは、マリアさんのお腹の中の子どもが自分の子ではないことをはっきり知っていたからです。ヨセフさんは、神さまの律法にちゃんと従う人でした。神さまの律法によれば、結婚の約束をしている女の人が別の男の人と夫婦のような関係をもってしまったら、それは大きな罪で、その女の人は死刑に処されることになっていました。もしヨセフさんがマリアさんのことを訴えたら、マリアさんは死刑になるかもしれなかったのです。しかし、ヨセフさんは愛の人でもありました。仮にマリアさんがそのような罪を犯したとしても、どうにか彼女をかばう方法があるのではないかと考えました。ヨセフさんは、色々と考えに考えた末、辛いけど密かに彼女と離婚しようと考えました。そうすれば、人々はこれから生まれて来るマリアさんの子どもを、ヨセフさんの子だと思うので、マリアさんの命を救うことができます。ヨセフさんは、そのことで自分も人から悪く言われることになるかもしれませんが、でも、これがマリアさんを死刑から守るための一番良い方法だと考えたのでしょう。でも、よく考えてみると、ヨセフさんがしようとしていることは、マリアさんと「縁を切る」、つまり「関係を断ち切る」ということでした。問題を解決できないとき、相手と関係を切ることは、とても簡単な方法です。でも、うまくいかなければ関係を切るというのは、神さまの方法ではなく、人間の方法なのです。

2. 人間との関係を保ち続ける神さまの方法

それでは、神さまの方法とは、どのような方法でしょう。主の天使がヨセフさんの夢に現れて言いました。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」(20、21節)。神さまの方法とは、「妻マリアを迎え入れる」つまり「共にいる」という方法なのですね。夢の中で神さまの隠されたご計画を天使によって示されたヨセフさんは、眠りからさめると、マリアさんを自分の妻として迎え入れました。「関係を断ち切る」という方法をやめて、マリアさんと「共にいる」ことを選んだのです。そして、彼は天使の御告げに従って、生まれて来た子どもに「イエス」という名をつけました。この「イエス」という名は、「ご自分の民を罪から救う」という意味だと天使は言いました。そして、それは「インマヌエル」、「神は私たちと共におられる」ことの現れなのですね。このことは、神の子でありながら、人間の姿をとってこの地上に生まれてくださった救い主イエスさまのことを、そのまま表しています。神さまは、はるか遠い天のかなたにおられて、私たち人間を遠くからただ眺めておられるのではなく、御子イエスさまに私たち人間と同じ姿をとらせて、この地上に送ってくださったのです。そこに、神さまの暖かい御思いが伝わってきます。神さまは、私たち人間と、どこまでも深く関わり、ずっと共にいてくださるのです。決して関係を切らないのです。

3. 関係を保つということ

神さまがイエスさまをこの世に人として遣わされたのは、神さまが「私たちと共に生きる」ためでした。神さまは、ぼくたち私たち一人ひとりの人生に、イエスさまを通して、どこまでも、とことん関わりを持ち続けてくださいます。この「インマヌエル」「神さまが私たちと共にいてくださる」ことが、ヨセフさんとマリアさんの二人を通して、この世に現わされました。クリスマス礼拝の今日、「インマヌエル」「神さまが私たちと共にいてくださる」ということを、心からの喜びをもって神さまに感謝しましょう。

次に、このクリスマスに、自分の周りの人との関係を思いめぐらしてみたいと思い

ます。私たちは、それぞれ教会や、おうちや、学校など、色々な所で親や兄弟や先生やお友だちと関わりをもって生活していますが、周りの人との間に、壊れそうな関係、壊れてしまった関係はあるのでしょうか。ぼくたち私たちも、ヨセフさんがマリアさんを受け入れたのと同じように、「神さまの方法」で良い関係を取り戻しませんか。相手を受け入れて関係をとことん持ち続けることは、神さまが私たちにもして欲しいな、と思っておられる姿なのです。

今年のクリスマスに、「インマヌエル」「神さまが私たちと共にいてくださる」ことを心から感謝し、周りの人たちと良い関係を持って、神さまに喜ばれる生活をしていきましょう。
(小澤寿輔)

《今週の暗唱聖句》

このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

(マタイによる福音書1章22, 23節)

12月22日 マタイによる福音書1章18節～25節

【幼稚科】

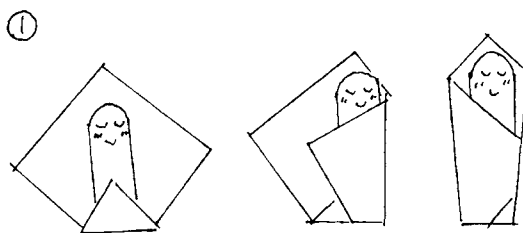
ともにおられる かみさま

【工作】 baby jesus を作る

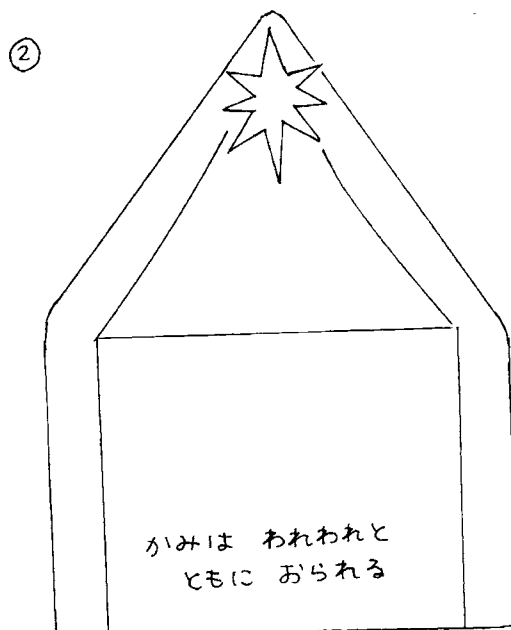
〈準備するもの〉

- ・アイスクリーム用木製スプーン…人数分
- ・小さな折り紙…人数分
- ・厚紙に下図②をコピーしたもの…人数分
- ・のり または 両面テープ
- ・色鉛筆など

①アイスクリーム用木製スプーンの先に赤ちゃんの顔を描き、色紙で下図①のようにくるむ。



②下図②をコピーした厚紙に、好きな色をぬって、中央に①の赤ちゃんをつける。



12月22日 マタイによる福音書1章18節～25節

小学上・中学科

主の降誕

1. マタイによる福音書1章18～25節を読みましょう。ヨセフとマリアはどのような関係にありましたか。
2. ヨセフはマリアの状況を知って、どのようにしようと考えましたか。また、それはなぜですか。
3. 夢の中に現れた天使は、ヨセフに何と言いましたか。
4. ヨセフは眠りから覚めると、どのような行動をとりましたか。なぜそうしたと思いますか。
5. 神さまはなぜイエスさまを地上に遣わしてくださり、「神は私たちと共におられる＝インマヌエル」ようにしてくださったのか考えてみましょう。私たちは日常生活の中で、そのことをどうやって生かしていったらいいと思いますか。

12月29日 マタイによる福音書2章1～23節

【解説と黙想】

エジプトへ逃れる

東方の学者たち

お生まれになった御子キリストを礼拝しにやって来たのは占星術の学者たちである。聖書には人数は記されていない。ただ複数形で書かれているだけである。「東の方」とはエルサレムから見て東であるから、ペルシャの異教徒たちであったと考えられる。彼らは星や月の動きを見て、世界や人々の運勢を占う人たちであり、この時も彼らは星を見て「ユダヤ人の王」の誕生を知り、拝むためにやって来た。

「ユダヤ人の王」だから、とりあえず都エルサレムに行こうということだったのかもしれない。しかしエルサレムまでたどり着いた彼らは、御子キリストがどこでお生まれになったのかを質問している。学者としての知識や力に頼ってキリストにお会いすることはできない。

わたしたちも真に神さまに出会うためにはどうしても御言葉が必要である。御言葉を通して神さまに出会い、神さまを知るということを覚えたい。ここで東方の学者たちをベツレヘムへと導いたのは、ミカ書5章の御言葉であった（6節）。

ヘロデ王の時代

ここに登場するヘロデは、後に出てくる同名の政治支配者たちと区別するためにヘロデ大王とも呼ばれる。ハスモン王朝（前143～37）をローマの力を借りて打倒し、ユダヤの王に任命された人物。彼はエドムの家系に属する者であり、ユダヤ人の好意を得ようとしてハスモン家出身のマリアンメ1世と結婚した。しかし、彼は最後まで自分の地位が脅かされることを恐れて生きた人である。まず、ハスモン家の血を引く者らを次々と殺し、ついには妻や子どもたちまで殺した。

そんな彼は「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と

言う学者たちの言葉を聞いて冷静でいられるはずがなかった。彼は学者たちに、見つかったら教えるように命じた（8節）。しかしだまされたと知り（16節）、ベツレヘムと周辺地域の2歳以下の男子を皆殺しにするよう命じた（16節）。

パスカルの『パンセ』に以下の記述がある。「ヘロデが殺させた二歳以下の子どもたちの中に、ヘロデ自身の子どももいたことをローマ皇帝アウグストが知ったとき、こう言った。『ヘロデの息子になるよりは、ヘロデの豚になる方が安全だ。』」

御子キリストの出エジプト

ヘロデ王の狂気の中でも、神の計画は確実に成就する。天使の御告げに従いヨセフは幼子イエスとマリアを連れてエジプトに逃げた（14節）。そしてヘロデが死ぬまでエジプトにとどまった。これがホセア書11章1節の成就として語られている。「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」（15節）。主イエスのエジプトからの帰還は、新しい出エジプトを告げている。御子キリストは、モーセに優る真の救い主として世に来られ、罪ある者たちを滅びから救いへと導かれるお方である。

2人の王

2人の「ユダヤ人の王」が登場している。ヘロデはユダヤの地を治めた王。御子キリストは「ユダヤ人の王」としてお生まれになり、十字架につけられた時、イエスの頭の上には「これはユダヤ人の王イエスである」という罪状書きが掲げられた（27：37）。

ひとは自分の立場を守るために、民の命を平気で奪う王であり、もうひとは、民を救うためなら自らの命をも惜しまず差し出す王である。このお方の民として生きていく恵みが差し出されていることを改めて覚えたい。（小橋口貴人）

12月29日 マタイによる福音書2章1～23節

【説教展開例】

エジプトに逃れる

◇..... 単元のねらい◇

ヘロデ王によってもたらされた残虐な出来事の中でも、神さまのご計画は確実に成し遂げられることを覚えたい。この箇所では、御子キリストとモーセの姿を重ねながら、民を滅びから救いへと導き出すキリストのお働きを学ぶ。またヘロデ王と「ユダヤ人の王」として生まれた御子キリストとを対比しながら、キリストが王としてご支配される神の御国の到来を語りたい。悲慘な世界の現実の中でも、確かに神の御国が到来していることと、御国の民として生きる喜びに招かれていることを伝える。

「王としてお生まれになったキリスト」

導入

先週の日曜日はみんなでクリスマスの礼拝を捧げました。イエスさまが、わたしたちを罪から救うために、この世界にお生まれくださったことを聖書から学びましたね。クリスマスの恵みを覚えながら、みんなは楽しい冬休みを過ごしていることと思います。今日は今年最後の礼拝の日です。でも今日の聖書の箇所には、ちょっとドキッとするようなお話が教えられています。

イエスさまがお生まれになった時にユダヤの王さまをしていたヘロデという人が、ベツレヘムとその周りにいた二歳以下の子どもたちを皆殺しにしてしまうという怖いお話です。どうしてそのような怖いことが起こったのでしょうか。

東方の学者たち

イエスさまがお生まれになったことを知って、東の国から博士たちがやって来ました。クリスマスの劇で博士の役をしたことがあるお友だちはいますか？ 何人で

やって来たのでしょうか。聖書には人数は書いてありませんが、何人かで来たことがわかります。彼らは星を見るお仕事をしてきた人たちです。星を見て「あ、ユダヤ人の王が生まれたぞ」と分かったようです。博士たちはエルサレムまでやって来ました。でも、イエスさまがどこでお生まれになったのかはわかりませんでした。

博士ですから頭のいい人だったかもしれません。いろいろな知識を持っていたでしょう。でも、どこに行けばイエスさまにお会いできるのかはわかりませんでした。みんなはどうすれば神さまにお会いできるのでしょうか？ どうすれば神さまのことがわかるのでしょうか？ どれだけ頭のいい人でも、いろんなことをたくさん知っている人でも、自分の知識や経験で神さまに会うことはできません。わたしたちが神さまに出会い、神さまのことを知るのには、聖書の言葉を通してです。だから、みんなはこれからもたくさん聖書のお話を聞いて、御言葉を覚えてください。御言葉を通してわたしたちは神さまに出会うのです。

ヘロデ大王

博士たちはイエスさまがどこでお生まれになったのかを聞きました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」。これを当時ユダヤの王さまをしていたヘロデと言う人が聞いてしまいます。ヘロデ大王です。クリスマスの劇でヘロデ大王の役をしたことがある人はいますか？この王さまはずっと自分が王さまでいたいと思っていました。だから、自分の地位を脅かしそうな人がいたら、次々と殺してしまうという恐ろしい王さまでした。

そんなヘロデ王は、自分の他にユダヤ人の王として生まれた者がいるということを知り、冷静でいられるはずがありません。自分以外に王となる者が生まれたということが許せませんでした。そこで、ヘロデ王は博士たちに言いました「もし見つかったら教えてくれ。わたしも行って拝みたいから」。ヘロデ王はイエスさまを見つけたら殺してしまおうと考えたのです。

ところが、博士たちは「ヘロデのところへ帰るな」という夢を見て、そのまま自分たちの国へ帰ってしまいます。怒ったヘロデ王は、ベツレヘムとその周りの地域にいる二歳以下の男の子をみんな殺してしまうように命令しました。一人残らず、男の子は殺されました。ひどい出来事ですね。子どもを殺された親はみんな悲しんだでしょう。

でも、こうして預言者エレミヤを通して言われていたことが本当に起こりました。とマタイは伝えています。つまり、この出来事も神さまのご支配の中で起こったことなんだということです。神さまの御手の外側で起こってしまったのなら、わたしたちにはどうしようもないんですが、このこ

とも神さまがしっかりと治めておられるということです。

キリストの出エジプト

このようなひどい出来事が起こりましたが、イエスさまは助かりました。どこへ逃げたのでしょうか？お父さんのヨセフが、マリアとイエスさまを連れてエジプトに逃げていたんです。そのように御使いが教えてくれました。「エジプトに逃げなさい。しばらくエジプトに留まっていなさい」。そしてヘロデ王が死ぬと、イエスさまはエジプトを出てイスラエルに戻ってきました。そしてヨセフとマリアとイエスさまはナザレという村に住んだのですね。

どれだけヘロデ王がひどいことをしても、神さまのご計画は確実に成し遂げられていきます。イエスさまは、罪人を救うためにこの世界にお生まれになったのですから、そのことを成し遂げるために、しっかりと神さまが守られます。

ところで、このイエスさまの人生、誰かと似ていませんか？生まれた時に、他の男の子たちはみんな殺されてしまったけれども、守られて成長して、やがてエジプトを脱出した人がいましたよね。覚えていませんか？

はい、モーセですね。モーセが生まれた時、エジプトの王ファラオは「生まれた男の子は、一人残らずナイル川に放り込め」（出2：22）と命令しました。でも、モーセのお母さんがパピルスの籠にモーセを入れてナイル川の葦の茂みに隠しました。それでモーセは助かったのです。やがてモーセは、奴隷であったイスラエルの民を導いて、出エジプトしました。

イエスさまは、モーセに優る救い主です。

モーセがイスラエルの民をエジプトから導き出したように、イエスさまは、罪の奴隷となっているわたしたちを、救いへと導いてくださいます。博士たちは、イエスさまのことを「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」と言いました。まさに、わたしたちを罪の呪いから救い出して、ご自分の民として守ってくださる王なんです。

2人の王

今日のお話には二人の「ユダヤ人の王」が出てきましたね。ヘロデはユダヤの地を治めた王。御子キリストは「ユダヤ人の王」としてお生まれになり、十字架につけられた時、イエスの頭の上には「これはユダヤ人の王イエスである」という罪状書きが掲げられました (27:37)。

ヘロデは自分が王さまでい続けるため

に、平気で民の命を奪う王さまでした。でも、もうひとりの王であるイエスさまは、民を救うためなら自らの命をも惜しまず差し出す王さまです。

ヘロデ王さまの国で生きていきたいというお友だちはいますか？ イエスさまが王としてご支配される国で生きていきたいというお友だちはいますか？ わたしたちは日本という国で生きています。この国の政治的指導者たちは、わたしたちをひどく扱うことがあるかもしれません。でも、目には見えないけれども、イエスさまが王としてご支配されている御国で、わたしたちは生きていくことができるのです。イエスさまはわたしたちを救うためにお生まれくださいました。御子のご降誕を喜びましょう。
(小橋口貴人)

《今週の暗唱聖句》

ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。(マタイ2章2節)

12月29日 マタイによる福音書2章1～23節

【幼稚科】

エジプトに逃れる

☆礼拝の説教で説かれたのは主イエスのエジプト下りでしたが、ここでは東方の学者たちによる御子に対する礼拝が記されています。クリスマスには親しい記事ですから、幼稚科の子どもたちにはこちらのお話をするほうがよいでしょう。この御言葉に因んだ米国のオペラ『アマールと3人の王様』（メノッティ作）のお話を紹介してもよいでしょう。日本では『ベツレヘムへの道』という題で、一色義子さんの絵本が出ています。お話の内容は次の通りです。

〈おはなし〉

ある村にアマールという少年がいました。彼は生まれつき足が悪く、杖をもたずに歩くことができませんでした。アマールは母親と二人で貧しく暮らしていました。ある晩、アマールは空に輝く大きな星を見つけました。そのことを母親に話しましたが、母親は少年の話を信じようとしませんでした。すると夜遅くに、誰かが家の扉をたたく音がしました。「アマール！ 見ておいで！」と母親に命じられて、アマールは床を出て戸を開けました。すると、そこに立っているのは、見たこともない豪華な衣装をまとった王さまでした。アマールはすぐに母親の元へ戻って、「母さん、王さまだよ！」と告げました。しかし、母親は信じようともせず、「なにをねばけてんだい！ もう一度よく見ておいで！」と少年を送り返しました。アマールはもう一度扉

を開けて外を見ました。すると、そこには3人の王様たちの一行がずらりと並んで立っていました。今度は母親も出てきてお辞儀をすると、王様たちは、新しく生まれた救い主を拝むために長い旅をしているところで、宿を貸して欲しいとのことでした。貧しい暮らしで旅人をもてなす余裕もない家でしたが、一行はアマールの家に一晩泊まることになり、母親は村人の助けを借りて、わずかなもてなしをしました。皆が寝静まったころ、母親は王様たちが持参して来た宝箱に近づきました。これがあれば貧乏から抜け出せると思ったのです。ところが、そこを見つかってしまい、家は大騒ぎになりました。ひたすら許しを乞う母親に対して、一人の王は、それが救い主へのささげものであること、しかし、それをあなたに提供することを申し出ます。母親は罪を悔いながら、自分の家にはその幼子にささげるのにふさわしいものが何もないことを嘆きます。すると、この一部始終を見ていたアマールは、顔を輝かせて「僕のこの杖をあげる！」と王様に差し出しました。その時、アマールは、自分が杖なしでも歩けるようになっていたことに気がつきました。そして、アマールは王様たちと一緒に、救い主に会うための旅に出ることに決めたのでした。










あなたなら、イエスさまに何をささげますか？

12月29日 マタイによる福音書2章1～23節

【小学科上級・中学科】

エジプトに逃れる

1. マタイによる福音書2章1～12節を読みましょう。東方から来た占星術の学者たちは、どこで「ユダヤ人の王」の誕生について尋ねましたか。その理由は何でしたか。そこには誰がいましたか。
2. 預言者の言うとおりにベツレヘムに来たのに、学者たちはイエスさまを見つけることができずにいました。それはどうしてだと思いますか。
3. ヘロデ王は学者たちに何と言って送り出しましたか。またその理由は何ですか。学者たちはヘロデ王の言うとおりにしましたか。なぜそのようにしたのでしょうか。
4. マタイによる福音書2章13～18節を読みましょう。ヨセフは夢で天使に何と言われましたか。その結果、どこに行きましたか。
5. ヘロデ王は事の次第を知り、その後何をしましたか。
6. マタイによる福音書2章19～23節を読みましょう。イエスさまたちはエジプトを出てどこに行きましたか。何のためにそうしたのでしょうか。
7. ここに出てきた「二人の王」について、それぞれ考えてみましょう。

<p>10月6日</p> <p>あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。 【使徒1:8】</p> 	<p>10月13日</p> <p>わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。【ローマ1:16】</p> 	<p>10月20日</p> <p>人を愛する者は、律法を全うしているのです。 【ローマ13:8b】</p> 
<p>10月27日</p> <p>神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。【詩編46:2】</p> 	<p>11月3日</p> <p>律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。【ガラテヤ2:16】</p> 	<p>11月10日</p> <p>恐れることはない。愛されている者よ。平和を取り戻し、しっかりしなさい。 【ダニエル10:19】</p> 
<p>11月17日</p> <p>あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。 【1コリント11:26】</p> 	<p>11月24日</p> <p>信仰と、希望と、愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である。 【1コリント13:13】</p> 	<p>12月1日</p> <p>だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。 【マタイ24:44】</p> 

<p>12月8日</p> <p>悔^くい改^{あらた}めよ。天^{てん}の国^{くに}は近^{ちか}づいた。</p> <p>【マタイ3:2】</p> 	<p>12月15日</p> <p>わたしは主^{しゅ}によって喜^{よろこ}び楽^{たの}しみ、わたし^{たましい}の魂^{かみ}は神^{かみ}にあって喜^{よろこ}び躍^{おど}る。 【イザヤ61:10】</p> 	<p>12月22日</p> <p>見^みよ、おとめ^{おとこ}が身^みごもって男^{おとこ}の子^こを産^うむ。その名^なはインマヌエル^{えぬ}と呼ばれる。</p> <p>【マタイ1:23】</p> 
<p>12月29日</p> <p>ユダヤ人^{しん}の王^{おう}としてお生まれ^うになった方^{かた}は、どこにおられますか。</p> <p>【マタイ2:2】</p> 		
		

2020年1～3月カリキュラム（第76号）

—救済史に基づく2年サイクル 第2年—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
1月5日	天地創造	創世記1：1－2：4	
	万物を創造された神さまの栄光の御業をたたえよう。		
1月12日	生命の創造	創世記2：5－25	
	すべての命は神さまのものと知り、命の尊さを覚えよう。		
1月19日	人間の務め	創世記1:26, 2:15	
	人間には世界を治める光栄に満ちた務めがあると知ろう。		
1月26日	罪と墮落	創世記3：1－24	
	すべての人間が神さまに背いて罪びととなったことを知ろう。		
2月2日	カインとアベル	創世記4：1－16	
	神さまに敵対する人間の思いがどれほど思い罪かを学ぼう。		
2月9日	ノアの箱舟	創世記6：1－7：24	
	墮落した世界を新しくする神さまの裁きと救いのご計画を知ろう。		
2月16日	虹の契約	創世記8：1－9：17	
	神さまが人類と結ばれた契約から、世界にかけられた希望を学ぼう。		
2月23日	バベルの塔	創世記11：1－9	
	文明の思い上がりを砕かれた神の御業と不思議な計画を知ろう。		
3月1日	アブラハムの召命	創世記11:27－12:9	
	神さまの選びの歴史と救いの契約を心に留めよう。		
3月8日	割礼	創世記17：1－17	
	神さまが選んだ民には契約のしるしとして割礼が命じられたことを知る。		
3月15日	ソドムとゴモラ	創世記19：1－19	
	神さまに背いて滅ぼされた町とそこから救われた家族の物語に学ぼう。		
3月22日	イサクの誕生	創世記18:1－15, 21:1－8	
	神さまの約束は人間の思いを超えて確かであることを学ぼう。		
3月29日 レント	イサクの奉献	創世記22：1－19	
	アブラハムの忠実な信仰と恵みの契約の確かさを学ぶ。		

2019年度年間カリキュラム (第73～76号)

—救済史に基づく2年サイクル第2年—

(2019年4月～2020年3月)

	月 日	教会暦・行事	主題	聖書箇所
2019年 73号	4月7日	レント	放蕩息子の譬え	ルカ15：11-32
	4月14日	受難週	主の十字架	ルカ23：1-49
	4月21日	イースター	主の復活	ルカ24：1-12
	4月28日		主の顕現	ルカ24：13-35
	5月5日		キリストの謙遜	フィリ2：1-11
	5月12日		受け継がれた信仰	2テモ1：1-18
	5月19日		信仰の模範に倣う	ヘブ11：1-12：13
	5月26日		信じて行こう	ヤコ1：19-27
	6月2日		主の昇天	ルカ24：44-53
	6月9日	ペンテコステ	聖霊降臨	使徒2：1-24
	6月16日		人ではなく神に従う	使徒4：1-37
	6月23日		ステファノの殉教	使徒6：1-7：60
	6月30日		フィリポの宣教	使徒8：26-40
74号	7月7日		パウロの回心	使徒9：1-31
	7月14日		異邦人の回心	使徒10：1-48
	7月21日		アンティオキア教会	使徒11：1-30
	7月28日		パウロとバルナバ	使徒13：1-52
	8月4日		エルサレム会議	使徒15：1-35
	8月11日	平和主日	女と竜	黙示録12：7-12
	8月18日		フィリポでの宣教	使徒16：11-40
	8月25日		アレオパゴスで語る	使徒17：16-33
	9月1日		トロアスでの集会	使徒20：1-12
	9月8日		パウロの逮捕	使徒21：1-36
	9月15日		パウロの裁判	使徒22：17-29, 23：11-22, 24：22-27
	9月22日		王の前での証し	使徒25：1-26：32
	9月29日		ローマへの出発	使徒27：1-44

2019年度年間カリキュラム (第73～76号)

—救済史に基づく2年サイクル第2年—
(2019年4月～2020年3月)

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	聖書箇所
75号	10月6日		ローマに届いた福音	使徒28：1-31
	10月13日		福音を恥としない	ロマ1：16-17
	10月20日		神の公平な裁き	ロマ2：1-16
	10月27日	宗教改革	未定	
	11月3日		信仰による義	ロマ3：21-31
	11月10日		神に愛される子ども	ロマ8：18-39
	11月17日		主の晩餐	1コリ11：17-34
	11月24日		もつとも偉大な愛	1コリ13：1-13
	12月1日	アドベント	目を覚ましていなさい	マタイ24：36-44
	12月8日		洗礼者ヨハネ	マタイ3：1-12
	12月15日		洗礼者ヨハネとイエス	マタイ11：2-11
	12月22日	クリスマス	主の降誕	マタイ1：1-25
12月29日		エジプトへ逃れる	マタイ2：1-23	
2020年 76号	1月5日	新年	天地創造	創1：1-2：4
	1月12日		生命の創造	創2：5-25
	1月19日		人間の務め	創1：26, 2：15
	1月26日		罪と墮落	創3：1-24
	2月2日		カインとアベル	創4：1-16
	2月9日		ノアの箱舟	創6：1-7：24
	2月16日		虹の契約	創8：1-9：17
	2月23日		バベルの塔	創11：1-9
	3月1日		アブラムの召命	創11：27-12：9
	3月8日		割礼	創17：1-17
	3月15日		ソドムとゴモラ	創19：1-29
	3月22日		イサクの誕生	創18：1-15, 21：1-8
3月29日	レント	イサクの奉献	創22：1-19	

子どもと親のカテキズム

神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

『子どもと親のカテキズム』の目指すもの

～「あとがき」より～

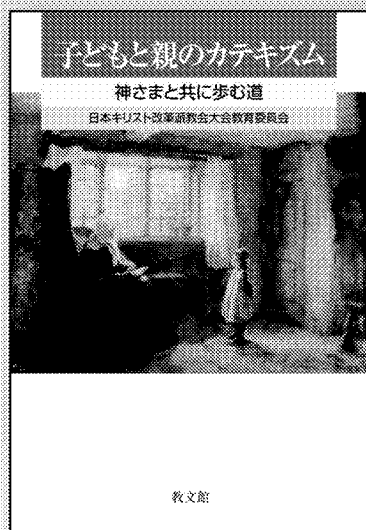
このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子どもの伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格 **400**円 (税込)

書店での販売価格は540円 (税込) ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円 (税込) です。

申込先 E-mail shintoko_ch_pastor@yahoo.co.jp 長田詠喜

振込先 01620-8-39213 長田詠喜

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 FAX03-5250-5107
HPをご利用ください。 <http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/> 【呈・図書目録】

大会教育委員会

「教会学校教案誌」

継続発行のための

50万円 自由募金のお願い

弊誌のためにお祈りとご購読をもってお支え下さいます事を、心から感謝するとともに御礼を申し上げます。

大会教育委員会の重要な使命と任務は、日本キリスト改革派教会独自の教案を作成することです。そのために委員会は、なにより「内容」を磨くことに全力を注いでおります。しかしそのためには、教案誌の「安定的発行」が不可欠です。

かつて執筆者には1000円の図書券を贈呈し、最低限の礼を尽くしてまいりました。現在は、何の御礼もさしあげていません。ひとえに誌代を維持したいからです。ギリギリの厳しい状況がつづいています。自由募金に積極的にご参加ください。

教会だけではなく、個人としてのご協力をも伏してお願い致します。

Soli Deo Gloria!

※ 購読申し込みは、西堀 元（熊本伝道所：✉boribori89@gmail.com）

〒862-0924 熊本県熊本市中央区帯山2-13-74 ☎ファクス (096)382-7630

お問い合わせは、相馬伸郎（iwanoue@me.ccnw.ne.jp）まで。

目標金額 50万円

送金先 郵便振替 00190 - 4 - 451670

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

〈あとがき〉

●先日、50年ぶりに小学校職員室に連行されました。その日、いつもの教会近くではなく、校門近くでチラシ配布。ほどなく、二人の教師方が険しい顔つきで小走りに近寄って来られ「許可を得ましたか。職員室に来てください」と。よほど危険人物と見られたのでしょうか……。説明を受け、急ぎ教会に戻り、申請書に署名捺印し提出。毎回、必要とのこと。ちなみに、もう一つの小学校にはその制度はないものご挨拶に。校長他、全員、初対面。人事は数年で変わることを改めて認識。数年に一度は、自ら出向く必要を痛感。その集いには、50名をゆうに越える子らと保護者がどっと来会。(記帳ままならず……) 嬉しい悲鳴とはこのこと！(相馬伸郎)

●このところ、教育委員で幼稚科分級の一部を担当しています。基本的には文章を読むことができない年齢の子どもを対象とするのですが、その日のメッセージの内容をピンポイントでわかりやすく「見える化」するのはなかなか難しいことです。同時に、聖書のメッセージを掴み、伝えるという説教者の最も大切な能力の修練に最適な作業かもしれないと感謝しています。

(長田詠喜)

●8月の平和主日を迎えるころ、シリア北西部のテロリストを掃討する名目で、アサド政府軍+ロシア軍は、4カ月間に、空爆・砲爆で一般市民400人以上(うち1/4は子ども)の命を奪った(国連発表による)。倒壊した建物のがれきの中から、生後7カ月の妹のシャツをつかんで耐えている5歳の姉の腕の写真が、瞬く間に地球の裏側まで伝えられた。母はすでに亡く、この幼い姉も空爆直後に死んだ。同じシリアの大都市

アレppoががれきの山と化し、そのほこりと血にまみれて呆然と座っている5歳児の写真が、世界に衝撃を与えたのは、すでに3年前のことだ。地上に戦火の途切れることはない。主よ、我らの罪をゆるし給え。エゼキエル書16:6。(小川 洋)

●言葉が通じない経験をします。特に地域の子供たちが教会学校に来てくれた時の子供説教。自分の時代とは何か違います。イエス様は神の子なのにわたしたちのところに降りて来てくださいました。自分も降りていけと問われます。(西堀 元)

●教会学校紹介は今回休載します。6月の大会役員修養会で配布したアンケートは17通しか回収されませんでした。残念ですが、回答して下さった教会の中には本誌に対するご意見などもあり、今後の参考にさせていただきます。ありがとうございました。(牧野信成)

※バックナンバーを御希望の方は下記までご連絡ください。

長野佐久伝道所 牧野信成

〒385-0051

長野県佐久市中込3-9-1

Tel & Fax : 0267-62-2409

E-mail : rcjnaganosaku@gmail.com

執筆者一覧

まえがき

坂井孝宏 (勝田台教会牧師)

巻頭説教

三野孝一 (東京恩寵教会牧師)

教会学校教師会のために③

相馬伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)

CS 教師の一言

中尾慎宏 (長丘教会長老)

教師職について (1)

望月 明 (引退教師)

教育の現場から

吉岡良昌 (萌保育園施設長)

信仰告白の証

雨宮凜太郎 (上福岡教会)

旧約聖書が語る歴史 (7)～(9)

大西良嗣 (宝塚教会牧師)

イラスト作画

表紙 中村未生 (春日井教会・IBUKI)

高橋乃亜 (湘南恩寵教会・IBUKI)

聖句カード

岡野美佳 (青葉台キリスト教会)

聖書黙想・説教展開例

赤石めぐみ (伊丹教会)

袴田清子 (灘教会)

三輪 誠 (浜松教会牧師)

松田基教 (多治見教会牧師)

赤石純也 (伊丹教会牧師)

宮武輝彦 (男山教会牧師)

常石召一 (大阪教会牧師)

長谷部真 (堺みくに教会牧師)

高内信嗣 (高知山田教会牧師)

大宮季三 (芸陽教会牧師)

佐野直史 (銚子栄光教会牧師)

小澤寿輔 (高知教会牧師)

小橋口貴人 (那加教会牧師)

分級展開例

愛智 愛 (新座志木教会)

畑中寿子 (田無教会)

光が丘聖書発見学習案内者訓練会

小堀尚美 (花小金井教会)

編 集 部

相馬伸郎 (長)

名古屋岩の上教会牧師

牧野信成

長野佐久伝道所宣教教師

長田詠喜

新所沢伝道所宣教教師

西堀 元

熊本伝道所宣教教師

小川 洋

高松教会牧師

日本キリスト改革派 大会教育委員会 『教会学校教案誌』 第75号

2019年10・11・12月号 (季刊)

2019年9月1日発行

発 行

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

発行所

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎

〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax 052-895-6701

郵便振替口座

00190-4-451670「日本キリスト改革派教会大会教育委員会」

編集・印刷 株式会社あるむ

頒価 900円 (本体価格)

Reformed Church in Japan
Board of Education

